923
Si266s2
00033337

澁川玄耳著

支那興亡志

東京　白永社發行

支那興亡志　目次

九天より奈落の底まで……一―一四六
榮華の巻……五
流離の巻……四九
興亡のいろ〳〵……一―二〇
偉大なる秦の始皇……一
秦の天下僅に十五年……二三
女の身最貴國を失ふ……四三
農家から起つた後漢の光武……五九
痛ましき恐怖の一生……七三

923

命惜しさの蜀の劉禪……九五
曹氏から司馬氏へ……一〇七
降參してからの辣語……一一七
南北朝劇の大詰……一二七
馬嵬驛の玄宗……一三七
易々と亡びた司馬晋……一四三
八代の中五帝は廢殺……一六一
南齊八主二十三年……一六九
雲水出身の明の太祖……一七七
朋黨と流賊とに自滅……一八九
賢明言行錄……一―八四

目次終

九天より奈落の底まで

北宋二帝の盛衰記

923
S,26612

33337

九天より奈落の底まで

はしがき

始皇帝は秦の朝を無窮に傳へたい望みであつたが、僅に十五年にして漢となつた。元の順聖皇后は南宋亡びて幼主恭宗が入朝したのを見て、昔より千載を保つ國なし、我が子孫をして又此の憂き目を見するの日あるかと歎じた。忽ちに興り忽ちに亡び、轉變極りなきものは支那の歴朝である。

その興るに當つては壯烈勇武かず〳〵の物語を殘すのであるが、一方亡滅する側には又多くの悲劇が演ぜらるゝ。少しく氣骨ある者は必ず死し、暗愚の帝王は多く降伏して名目のみの公侯に拜せられ、奴隷の如き屈辱的生涯を了るもあれば、散々に愚弄された末に殺害さるゝ者も少くない。この數ある滅亡悲劇の中にも、北宋の末路の如く悲慘なのは少いと思ふ。先帝と現帝との父子にその皇后諸王を併せて囚虜と爲し、有らん限りの侮辱と酷遇とを與へ、數次饑餓に陷いれ、或は暑寒に晒した如き無慈悲不人情なやり

方は、女眞帝國金人の殘虐性に戰慄せしむるものがある。

父徽宗帝は表面太平の天子として、在位二十五年の間、所謂莫迦を盡して逸樂に耽つたのであるから、九年の幽居もその天罰とも見られようが、子の欽宗帝は僅に二年在位したゝめに、二十五歳の若盛りから六十歳まで三十五年に亘る長年月を、あらゆる悲慘の裡に過さなければならなかつたのは、眞に同情に堪へないものがある。況んや徽宗に取りては子であり、欽宗に取りては弟であるところの高宗が、江南に南宋の朝を立てゝ百五十年の基を啓いてゐながら、父と母と兄とを捕へられたが爲に、金に對して手剛き抵抗も攻擊も出來ないで、見るも酷たらしい嬲り物となつてゐる父兄を見殺しにしたに至つては、又實に情無い話だと歎ぜざるを得ない。

本編は專ら史外の書、「宣和遺事」に據りて綴つたものである。同書は南宋の人が書いたものであらうが、その作者は判明してゐない。その記事には小說的傾向が多く、正史とは事實の上の相違も少くない。然し作者の構想による部分といつても、それが當時を去ること遠くない時代のことではあり、諸種の挿話も口碑傳聞を根據としたものであらうし、如何にも有り得べきこと、或は無ければならぬこととして受け取られる事が多いのである。當時の事實をも、又記事の根底をなす人情風俗をも知らないものが、恣に筆を弄した戲作とは目することが出來ない。否、しば〳〵正史よりも却つて事實の眞相に觸れてゐると考へらるゝ點もあるのである。

今その全部を紹介することは、本編の能くするところで無いから、前半の徽宗帝榮華の卷は、唯その大體を知るために、斷片的に抄出し、後半流離の卷を較詳しく記述することゝした。但しそれも原書の逐字譯でないのは勿論、又しば〳〵他書によりて補ひ足したところも少くない。

榮華の巻　宣和遺事抄（上）

□徽宗の御宇

禍根は王安石にあり

宋の朝廷が亡びなければならなくなつた遠因は、王安石が新法を行つたのにあるといはれる。後年姦邪の限りを盡した蔡京を、先づ取立てゝ立身の緒口を作つてやつたのも王安石である。彼を用ひた神宗が崩して哲宗が立ち、太后が簾を垂れて政を聽き、司馬溫公を用ひて、天下太平を謳つたのも束の間、公卒して章惇等が又も新法を行つて、世は再び侵姦に充ち、亂世の態になつしまつた。その哲宗の御宇も元符三年で終り、次に立つたのが、人間界の歡樂を極め、親ら仙客を氣取つて道君皇帝と號し、最後に活きながら地獄道の苛責に落ちた徽宗皇帝その人であつた。

明君たるべくして然らず

徽宗帝は才俊人に過ぐと稱せらるゝ御方であつた。詩文には達してゐられたし、書畫には巧みであられたし、儒佛道の三教の書にも通じ、九流の典故にも明かであつたといふから、稀代の明君であるべきであつたが、才子才に誤られて、身をも國をも破つたの

である。

■九流とは儒家者流、道家者流、陰陽家者流、法家者流、名家者流、墨家者流、縱横家者流、雜家者流、農家者流の九系統を指す。

帝は宴遊逸樂を專らとし、童貫、蔡京、高俅、楊戩等の佞人を近づけ、樓閣を築き林泉を營み民夫を驅役すること限りなく、國力は極度に疲憊し民望は全く去つてしまつたのであつた。その上に蝗の害は打續いて毎年の饑饉となり、黄金一斤で粟一斗といふ突飛な物價となつた。樹の皮を削りて食ひ、子を賣つて食ふまではよかつたが、遂には宋江や方臘などいふ賊將が大徒黨を擁じて、放火殺人掠奪を恣にして天下を横行するといふ有樣となつた。然かも帝は殆ど知らざるもの丶如く、佞人どもと樂みを取り歡びを追ひ朝政を顧みないで、二十六年間の榮花に醉つてゐられたのである。

姦臣蔡京を重用す

蔡京帝の意を迎ふ

徽宗帝が即位せられた建中靖國元年に、丞相章惇の言を用ひて、蔡京を擧げて翰林學士とされた。當時滿朝の諸官は皆諛ひ者御機嫌取りばかりで、蔡京如きを重用されては宜しくないと言ひ爭ふ者も無かつた。唯僅に豐稷と陳師錫との兩人が表文を奉つた。中に、

「……若し果して蔡京を用ひさせ給はゞ、則ち治亂これより分るべく、祖宗の基業これより壞れん」とまで極言したが、帝は採用されなかつた。

その頃内侍であつた童貫を杭州へ遣はして造作局を監せしめられた。この局は帝室御用の器具を作るところで、華美と高價とを旨として寶物などを造り出すところであつた。これと各地の珍花異木や奇石怪岩などを集める事業とは、國力を消耗し民怨を募らす大きな原因であた。

國力消耗の二機關

即位の翌年即ち崇寧元年の夏、蔡京は右亟相に登つた。朝野擧つてこれには驚いた。帝には彼の言が事毎にお氣に入つた。

帝は父帝神宗、兄帝哲宗が王安石の新法を施行して未だ盡さゞる點があるのを見て、國是定まらずと思はれた。蔡京に向つて、

『朕は父兄の志を達したいと存するが、在朝の諸高官を通じて、共に國治を謀るに足る者が見當らない。今卿を朕が宰相としたが、いかなる意見を以て朕を輔ける考なのぢや』

と訊ねられた。蔡は頓首して、

烏滸がましき言ひ分

『唯生命の限りを盡して君恩に報い奉るばかりでござりまする』と申上げた。帝と蔡京との其の後の行動を見ると、帝の言も烏滸がましいし、蔡の言も厚がましい。

或時帝は寶玉で製した盞を取出して、重臣どもに示されて、

『これは朕が造らせて久しくなるが、餘りの驕奢と譏る者もあらんかと考へて、未だ一度も使用しないでゐるのぢやが……』と仰せられた。蔡京はすかさず答へた。

『理に於て當然の儀には人言を顧ることはござりませぬ、陛下はこの太平の御代が產み出すくさ〴〵のめでたき寶をお受けになるのが當然の儀にござりまする。區々たる玉器くらゐに何の人言をお考へになることがございませう』

佞人時を得る祕策

この言は盡く帝の御機嫌にかなつた。帝の一身を誤つたのみならず、宋の社稷をも危くした佞人どもは、萬事この呼吸で帝を喜ばせ、我が身の富貴榮達を謀るのであつた。

□商人を誑かす奸策

蔡京が亟相になつてからの事であるが、大實業家連が、六七名もして訴へて出た。それは以前要路に立つて惡政を恣にした章惇と曾布とに、莫大な金を用立てゝあるのに、

御用金の返還を迫る

今以て朝廷で支拂はないのは怪しからんといふのであつた。この事は帝の耳にも入つた。帝は當惑して眉を顰められた。

『朝廷が商人から借りたものが返せないとあつては、誠に面目次第もない』

『私が何とか取計らひまして返しませう』と蔡京は易々と請合つた。

諸官省の倉庫を調べて、古い不用品を澤山取集めた。それには又麁末な香料や漆器、象牙、織物などもあつた。さういふものに一々高い評價をつけて、金滿家連にそれ〴〵債權に應じて引渡さうとした。然し容易にそれを引取らうとしないで、その中から藥品でも少々試に賣らしてもらひたいと申出た。蔡京は其處を覘つてゐたのだから、その頃値段の高くなつてゐる乳香（樹脂の香料）を態と廉く見積つて渡してやつた。

思ふ壺には まる慾深

商人たちはさうとは知らず、その乳香を賣つて數倍の利益を得た。慾に誑かされた商人は、これならば外の骨董品なども利益があるに相違ないと見て、いづれも喜んで引受ける事になり、半歲經たない間に三千七百萬貫といふ大負債を綺麗に償却して了つた。

あとで商人たちは各引受けたがらくたを賣らうとかゝつたが、これは眞正のがらくた」で十の一二も捌けなかつた。けれども早やその時は尻を持込む事も出來なかつた。

□正邪分類名簿を作る

崇寧二年に蔡京は左丞相に進んだ。宮廷の大建築は創められた。

先代哲宗の時にゐた人々を類別して、正邪各三等に品評し、五百八十二人の忠孝奸邪の名簿を作つたのも、蔡京とその子の蔡攸との計らひであつた。そして司馬光(溫公)文彦博、范祖禹、程明道、程伊川、蘇軾(東坡)蘇轍(東坡の弟)呂公著、呂誨等の如き千載に敬慕せられる名臣賢相凡そ百十九人を錄して奸黨に編入してしまつた。そして反對に王安石は荆國公に追封せられ、更に舒王に封ぜられた。のみならずその塑像を孔子像の側に置いて、孔子廟に合祀せられた。

名臣賢相を奸黨とす

先朝の賢臣を奸黨とした事は、やがて詔勅によりて天下に布告し、その名を石に刻して立てしめられた。この達しが長安に行くと、石に刻字すべき石工の安民なるものが、

『朝廷の思召は私どもには分りませんが、司馬溫公といふお方は、海内皆その正直忠賢を稱揚したお方といふことです、それであるのに今奸邪の人として名を石に刻するといふ事は、私には出來かねます』といつた。役人は立腹して安民を撻たうとした。彼は泣きながら更に訴へた。

石工の硬骨

『刻むには刻みませう、お上の嚴しい仰付けでございますから刻みも致しませう、然しこの石に刻した者として安民の二字を鑽りつけて置くことだけはお免しを願ひます。後世になつて私が惡くいはるゝのは厭でございますから』

役人もこの言葉には愧ぢ入つた。

大切な碑には、文の撰者、書者の外、刻工の名をも刻する例である。

後世の譏を奈何せん

□三十代の張天師

崇寧五年の夏、解州に蛟の祟があつて、その氣に當つた人畜は忽ち嚙みつくやうになつた。第三十代の張天師たる張繼先に命じて祟を封ぜしめられた。

張天師＝張良の八世の孫と稱する張道陵なるものが、漢の末頃、まじなひで愚民に信仰され天師と稱せられた。後には道教の一本山として、その子孫累代張天師と稱して衣鉢を傳へ、徽宗帝の朝には其の三十代目の繼先がゐたのである。この系統は元明を經て清朝に及ぶまで宮中の席次に列せられてゐた。

張天師の呪法効を奏す

張天師の呪法によつて祟は治まつた。帝は彼を召して勞を犒ひ、且つそれが如何なる妖魅であつたかを問はせられた。天師の答は、

『昔黄帝が蚩尤を斬られたのを、後人が祠を立てゝ祀つてゐたのでございましたが、その祠も廢れ毀れてゐますので、變じて蚊となつて地方に災を被らしたのでございます。つまり祭祀を續けてもらひたいためでございます。今幸に私は陛下の御稜威によつて治むることが出來ましてございます』といふのであつた。

關羽も魔術師に使はる

『さらば如何なる神を招いて治められたか、その神に會つてお禮を述べたいものぢや』と帝は賴まれた。それは容易い事でと、早速殿庭に二神の姿を招き現はした。

一人は赤衣に金甲青巾、髯の美しい神で、今一人も甲冑を帶した神であつた。天師は二神を指して帝に奏した。

『金甲美髯の神は蜀の關羽で、一人の甲冑の神は自鳴山神の石氏でございます』

言ひ訖ると二神の姿は忽ち消えた。帝は二神を追封し、張天師には視秩大夫虚靖眞人の尊號を與へられた。

滑稽な瑞祥の數々

□黄河の水澄む

凡そ達し難き豫望を抱くやうな場合に、百年河清を俟つといふ諺があるくらゐに、黄河の水は名の如く濁つてゐる。然るに大觀元年にその黄河の水が、七晝夜に亘り長さ八百里以上も清澄になつたと奏して來た。

帝は上天の祐けとして、その地の乾州を改めて清州と命ぜられた。

□誕生傳説の定型

大觀二年の元旦に、帝は新に八種の寶物を獲られた。蔡京は天下到る所にめでたき瑞祥ありて既に八十七箇所に及ぶといふので賀表を捧げた。その瑞祥といふ中には、甘露が降つた、靈芝が生へた、祥雲がたなびいた、双頭の蓮が咲いた、連理の木があつた、牛が麒麟を生んだ、鷄が鳳凰を生んだ、などゝいふ事が數へ立てゝあつた。

蔡京は大師に進み、童貫は宣撫使の上に更に司空を加へられた。童貫はこれより軍政を掌握して專姿となり、蔡も不快に思ふやうになつた。

帝と后との奇夢

この年顯仁皇后が皇子を産まれた。この皇子が後の康王であり、南京に即位して南宋を立てた高宗帝である。この誕生に就いても容易ならぬ話が附隨してゐる。

先づ徽宗帝が夢を見られた。それは唐の末から梁にかけてゐて吳越王となつた錢鏐が來て、帝の御衣の袖を控へ、「わたしは宿かりに來た、舊山河を取戻さうと思つてゐる」といつた。皇后も亦夢に金甲の神人が現はれ錢武肅王（鏐の諡號）だと名をいつたと見て、覺めるとやがてお産があつた。そのお産の時は紅の光が室に滿ちた。後に高宗が南京に即位し杭州に都を建てられたのは、錢王の生れ替りとして、正に夢の如く舊山河を取戻したものである。錢は八十一歳で卒したが高宗も八十一歳で崩じた。これも偶然ではあるまい。

一人で頑張る黃河の神

□王文卿の雨乞

同じ年の七月、河南淮北の地方が大旱魃で困つた。帝は王文卿といふものを召して雨を祈らせられたが効驗がない。そこで文卿から奏問した。

『九江四海五湖の龍神は皆上帝の勅命を奉じてゐますのに、未だ雨が降りませんのは、黃河の神が一人で睿旨を奉じないからでございまする』

それでは黃河の神を召して雨を降らせたら宜からうとの勅諚で、文卿は京師の太一宮に向つて壇を築き、祈りていふには、

『大宋の皇帝は黃河の水深さ三尺を借らせ給ひ、以て萬物の焦枯を救はせ給はんとす、黃河の龍神敕を奉じ給へ』と。

時を移さず大雨沛然として降りしきつた。その雨は何處も黃色い雨であつた。即ち黃河の水が降つたものと思はれた。帝は叡感斜ならず、文卿に、凝神殿侍宸沖虛觀妙通玄眞人といふ長い稱號を賜はつた。この王文卿はその後撫州の臨川縣で尸解した。

黃河の水は黃雨となる

尸解は假に死して仙となるをいふ。

□花石綱はじまる

帝は花木を植ゑ石を据ゑることが好きであつた。蔡京に登庸された朱勔といふ者が、最初黃楊木三四本を献上した。それが深く帝のお氣に入つたので、それから花卉や珍石を取寄せることが次第に仰山になつた。さういふ物を輸送する船が水上に續いてゐると

花卉木石の大輸送

家を毀ちて庭樹を奪ふ

いふ有様となつた。これは徽宗の秕政の一として數へらるゝもので、所謂花石綱の名を得たものである。綱といふのは貨物大輸送といふ意である。

その花石の集め方が實に一通りの手段ではなかつた。いかなる山河の險があらうともいかに運輸の便を缺かうとも、さういふ事に一切頓着なく掘り出させ運び出させた。民家に一花一木の面白い物があると、忽ち幕で圍んでしまつて御用の物に指定し、運び出す時は障碍となる家屋など遠慮なく打毀して了つた。數丈の大きさの石などは大艦に載せて運ぶのだから、新に河を掘り通す場合もあるし、橋などは落して了ふし、土手を毀ち水門を開き、到る處で其係り官が、賄賂を貪り婦女を汚し、其他あらゆる理不盡な手段を取つた。その爲に地方土民の怨を買ふ事も頗る甚しかつたが、その又費用が莫大なもので、一花に數千貫、一石に數萬緡といふ金錢を要するのであつた。

水滸傳にも花石綱が民苦の大なるものであつたことが記されてゐる。

□帝天上の樓閣を見る

政和三年夏に玉清和陽宮の造營が竣つた。後に玉清神宵宮とした。道教の行はるゝこ

道教の全盛

幻覺のおつきあひ

の時より盛なるは莫しと稱せられた時代で、徐知常や徐守信・劉混康などの道士が盛に尊信された。張天師や王文卿の事は前に述べた。

十月帝は玉津園に行幸あつた。帝は突然左右を顧みて、

『玉津園の樓閣が二重に見えるやうであるが、一つの方は何處であらうぞ』と仰せられた。お供の蔡攸はぬからず奉答した。

『私には雲間に樓殿臺閣が見えまする。隱々として數重に連なつてゐるやうに存じまする。いや尙もよく〳〵見まするに、地上數十丈の高いところにあるかと思はれまする』

帝は暫くして又攸を顧み、

『そちには、あそこに人物がゐるやうには見えないか』と問はれた。

『いかにも見えまする、道家の童子が幡天蓋を立て並べて、續々雲間から出て參りまする、その衣服も容貌まで歷々と識別けられまする』とお答へした。

蔡京は百僚を率ゐて賀辭を述べた。

□林靈素を尊信す

帝は夢に、道教の神なる東華帝君が、仙童をして帝を神宵宮に招き遊ばしむると見られた。その神宵宮といふ仙宮の話を詳しく聞召したいとの御諚で、徐知常はその事跡を書き綴つて奉つた。然るに知常は元來神宵宮の事を知らないので、内々大に心配してゐた。そこへ京の東太一宮に二三年前から溫州の方士で林靈素といふ者が來てゐて、神宵の事を知つてゐると知らせた者があつた。知當は林道士を早速帝に薦め、帝は林によつて神宵宮の事を審にされた。

林靈素始めて召さる

『神宵宮と申しますのは卽ち東華帝君の知しめす所でござりまして、天上には長生大帝君とその弟の青華大帝君とが在しますのでござりまする。このお二方は玉帝のお子樣でござりまする。それから左元仙伯といふお方がおいでゝ、仙官八百餘の賞罰を司られまする。畏れながら陛下は天上の長生大帝君が假りに人間界に御降誕あつて、天下の帝王とおなりになつたのでござりまして、蔡京と仰る方は天上の左元仙伯でござりまする。近日中に陛下は御弟の青華大帝君のお招ぎで神宵宮へお遊びにおいでになることも出來ませう。お樂みな御事と存じまする』

帝と蔡京と共に天仙

帝は無上に喜ばれた。林靈素は金門羽客通眞達靈元妙先生と崇められ、金紫の服を賜ひ、絶えず禁中に出入するやうになつた。その勸に從つて帝は教主道君皇帝と自稱さるゝに至つた。その詔書には、

『朕は乃ち上帝の元子にして大宵帝君たり、中華の金狄の教（佛教を指す）を被るを憫み、遂に上帝に懇願して人間の主となれり。今天下は正道に歸したり、卿等表章を奉つて朕を教主道君皇帝と冊すべし』といふことが述べてあつた。

帝の道號と狂妄の詔勅

帝は明達皇后の死を惜みて、林靈素に勅して后と邂逅することを得られた（「神仙」の巻に詳し）政和七年十二月に、天神が坤寧殿に降つた。

帝には卽位のはじめ皇子が無つた。劉混康が、宮城の西北隅の地勢が低いから盛り土をすれば皇子が生れると申上げたのを信じ、土を集めて山を築かせられた。果して續々と皇子の誕生があつた。これも帝が道教に深入せらるゝ因となつた。

□天上に表を上つて罪を獲たり

この盛土した小山を次第に增築して、萬歲山と名づけ、花石を多く運び集められた。後に名を艮岳と改めた。

上帝との通信方法

帝は徐知常に命じて天を祭らせられた。そして親ら上帝に奉る表文三章を作り、それを凝神殿で焚いた上で、徐知常に、帝のこの表文を上帝に奏し、その睿旨を承れと仰せ付けられた。知常は仰せ畏つて、祭壇の側に拜伏したまゝ一夜を過し、翌日になつて起き上つた。

『上帝の仰せを隱さず話して貰ひたい』と帝は尋ねられた。

『決してお隱しは致しませぬ。陛下は第一章に、國家萬民の爲に豐稔をお祈りになりました。上帝は御覽になつて天顏殊の外お喜びのやうに拜しました。然るに次章に陛下は百代の榮華をお祈りになりましたのを御覽になつて、上帝は少し御不機嫌の御容子で、何といふ慾深い事をいふのぢやと仰せられました。末章には陛下は何もお認めになつてゐませんでした。爲に上帝は大層な御逆鱗で、筆を執らせられて判（裁斷の語）ぜられました。それには、趙某（宋朝は趙氏）慢上の罪あり、全家を徒流せしむる三千里とお書きになりました』と答へた。

悲しき運命の豫告

これは即ち徽宗欽宗二帝が各皇后と共に、金の爲に北地に拉し去られ、遠く今の黑龍江邊までも悲慘極まる流浪をされることを豫言したものである。

金の建國

帝は妖變を知らず

徐知常はこの事あつてから、林靈素がお氣に入つてゐるのもあるし、旁々辭して歸らうとしたが、帝は容易に許されないので、遂に逃亡してしまつた。

翌重和元年には、千道會といつて林靈素を導師とし、官民を集めて道教の說教を催ほすことゝなつた。この年女眞の阿骨打は帝と稱し、國號を大金と號した。

□佛教の道教化

宣和元年の元旦に、宮中に安置してある聖祖の神像に涙が流れてゐた。守廟の役人どもは、廟内に常に泣聲を聞くといふ事であつた。さういふ異事は數々あつたが、蔡京等は一も帝の御耳には入れなかつた。そして帝の驕奢の行は愈募るばかりであつた。

二年三月林靈素が說により、詔して諸佛を改めて悉く仙人とし、寺院を觀とし、僧尼の稱をも改めた。然しこれは翌年になつて復舊した。

その頃金（女眞）から李善慶といふ者が使者として來朝した。蔡京童貫等はこの使と議して宋と金とが遼を夾擊する相談をした。使は唯々として歸つたが、金の帝は後に、

『果して好みを結ぶ所存ならば、速かに國書を送るが宜しい、詔書などといふ體裁のも

龍を殺して食ふ

のを送つたのでは相手にならぬ』といはしめた。

開封縣の茶店の前に或朝龍のやうなものが蹲つてゐた。鱗があつて角が生え、その聲は牛の如しとある。軍器局の軍人等が亂暴にもそれを殺して食つて了つた。するとその夜赤氣が立つたり流星があつたりした。そして幾もなく霖雨となつて、都は大洪水に襲はれた。

陰氣盛なるは慨はし

帝は戸部侍郎の唐恪に治水を命ぜられた。唐は即日小舟に乘つて濁流を視察し、遂に五丈河へ水を落して都を救ふを得た、澎湃たる洪水に小舟を乘り廻してゐる唐が姿を、帝は遠く眺められ、涙を泛めてその忠勇に感ぜられた。帝は彼が功を勞つて、

『朕が宗廟社稷の安きを獲たるは、全く卿の功であるぞ』と仰せられた。この優渥なる勅諚を拜した唐恪は、

『水は陰類でござりまする。陰氣盛にして宮闕を犯すに及びましたのは誠に慨はしい事でござりまする。どうか陛下に於かせられても、臣下をお使ひになることに御心を潛められ、婦女の御寵愛をお愼みになり、お側に小人が近づきませぬやう、且つは夷狄の侮りを防ぐ御用意に缺くることなく、それで以て、いよ〳〵ます〳〵この度の天の戒めを謹みお考へ下さるやう』と奏問した。

同じく諫めて賞と罰と

帝はその言を嘉納された。然しその時、起居郎の李綱が時弊を論じて天戒に答ふる所以を奏したのは罰せられて遠くへ左遷された。

□佞人の癡態

秋九月、保和新殿に蔡京父子を召して、盛宴を催ほされた。その時列べられた器は皆琉璃であつた。これは數年の後に二帝が北方に流離の憂目を見らるゝ讖をなした。

奸臣の邸に微行す

帝は微行して蔡京の邸に行かれる事が度々であつた。それは君臣の禮を撤して亂次ないものであつた。蔡京は毎度帝に『君臣相悅』といふことを說いては、その濫行を辯護し且つ奬勵してゐた。人君たるものは四海を家とし、太平を娛むべきもので、短い人生に何を强ひて自ら責め苦しむを要せんといふのが蔡京の說で、帝はこの言を喜び、變裝して市井の間に出でられる事も多かつた。

言語道斷の高官

京が子蔡攸も宮中で俗惡卑猥の語を弄して帝の淫蕩な心を蠱んでゐたが、次相の李邦彥に至つては自ら倡優の技をなし、更に猥雜を極めた所作が多かつた。世間では彼を浪

子宰相と呼んでゐた（浪子は遊蕩兒の意）。

或時李は帝の宴に侍り、一趣向を考へて、薄絹に龍文を描かせ肌に貼りつけ、裸になつて全身の文身のやうに見せて踊つた。帝が杖を執つて打たうとされると、李は逃げ廻つて木の上へ攀ぢ登つてしまつた。中宮は是を望み見て、

『さやうな事をせず、下りて來い』と諭されたが、李は、

『黄鶯（天子黄袍を着る故に比したる也）が覗いてゐますから、なか〳〵枝から下りられませぬ』とふざけてゐた。

『宰相がこれでは、どうして天下を治められようぞ』と中宮も呆れて歎ぜられた。

詩を以て時弊を諷す

時に朱勔が花石綱で帝に媚び、ために東南の地は民情頗る穏かでなかつた。大學生鄧肅なるものが、詩を作つてこれを諷した。

蔡京はその詩を帝の御目にかけて、

『大學生が詩文を以て陛下を誹謗し奉るといふのは、誠に怪しからぬことで、かういふ者を殺さないで差置きましては、あとから〳〵と倣ふ者が出まして、一種の流行ともならうかと存ぜられまする』と帝を激せしめて鄧を殺す考であつた。然し帝は唯鄧を鄉里へ歸らしめるだけで罪を問はれなかつた。その將來を惜しまれたのであつた。

□方臘亂を成す

宋と金との同盟成る

宣和三年、金と使者の往復があつて、遼を夾擊するの策を立てた。そして若し遼國を攻め亡ぼした場合には、宋は燕京（今の北京）一帶の地を保有することゝし、宋と金とは兄弟の國たるを誓はうといふ事になつた。宋に取りては都合のよい條件であつたに相違ない。それだけ金の方には實行の意志が無つた事も明かである。

方臘蹶起して忽ち大衆を得

時に睦州（浙江）の方臘といふ者が亂を起した。

元來彼が家には漆園を持つてゐた。それが帝室御用の造作局の爲めに太抵その所產を取り上げられた。又同地方は花石綱の爲にも人民は泣かされてゐた。彼は妖術を以て不平の民を煽動したから、數日の間に數萬の亂民を嘯聚することが出來た。彼が表榜する大目的は、花石綱の張本人たる朱勔を誅するといふのにあつた。

數萬の徒を得た方臘は、放火掠奪四方に手を伸ばした。兩浙都監はこれを討ち平らげようとして却つて敗死した。睦州を陷いれた亂徒は更に附近の數縣を奪ひ、方は自ら聖

公と號し年號をも永樂と建てた。

休寧縣を陷いれて知縣の麴嗣復を捕へたから、脅かして降參させるために、麴の面前で士人を二人まで斬り捨てさせた。然るに麴は少しも怯まず、却つて賊を罵つた。

『昔から妖賊で長久した者は無いぞ、お前等も一日も早く逆を捨てゝ順に附くのが本當だぞ、俺に願つて朝廷に歸順するならば、朝廷でも必ずこれまでの罪はお宥しになる。それに何だ、俺を賊徒に降らせようなどとは烏滸の限りだ、さつさつと俺を殺したらよからう。』

名知縣を殺すに忍びず

『いや實は私も休寧の者ですが、公が知縣となられてから善政を布かれたので、今まで曾て無い名知縣だと崇めない者はありません、さういふお方を殺すなどといふ事が出來るものですか』と賊の方でも手の下しやうが無く知縣を捨てゝ去つた。その後麴は一躍して睦州の知事に抜擢された。

賊は歙州杭州衢州等を陷いれ、何れも守將を屠つた。詹良臣といふ者を捕へた。良臣は賊を罵つてやまないので、その肉を割いて彼自身に喰はせたが、死ぬまで罵聲を絶たなかつた。彼は七十の老人であつた。

童貫賊を征して功あり

更に賊は剡縣越州青溪縣等を犯した。遂に六州五十二縣を破り、人民二百餘萬を殺すに至つた。童貫大軍を擁して征討し、方臘を生檎して歸り、功によりて太師に進んだ。

註 水滸傳によりて知らるゝ梁山泊の宋江以下も、恰もこの時代である。宣和遺事にも數葉に亙つて梁山泊に關する記事はあるが、水滸傳の劇的場面の數々を熟知してゐる人々には興味を感ずる程のものではなく、且つ宋の宗室に關係が無いから、今その抄出を略して置く。

諫言に心を痛む

張夢熊帝を警む

宣和五年七月朔日、例によつて文武百官を召して朝見の儀があつた。これは朔日と十五日との定式の謁見日で、形式ばかりのものであるから、拜謁が了ると、例によつて、『事あらば奏せよ、事無くば諸員退出』と沙汰された。すると異例にも一人座列を離れて帝の前へ進み出るものがあつた。何事を言ひ出すかと帝は驚かれた。それは司天大監の張夢熊といふ者で表を奉るのであつた。

その上表には、孰々天文を案ずるに、毛頭星（彗星）東北に現はる、兵亂亡國の兆なりと

いふことが書いてあつた。帝は驚いて蔡京を顧みて相談されると、天下に大赦を行はせられるが宜しからうと奏した。張夢熊は、

『此の妖星は大赦で除くことは出來ませぬ、既に此の妖星出でたるからは、遠くて三年近ければ今歳の内に、東北に兵を用ひることになりませう』と奏した。帝は、

『今四方に盜賊起つて、未だその悉くを平らげないでゐるのに、又この星が現はれたとあつては、何時の日に平安を得るであらう、誰かこの諸卿相の中にこの妖星を祓ひ除く者はないのであるか』と歎ぜられた。

張商英上表して痛論す

すると又一人の大臣が進み出た。群臣はどうなる事かと色を失つた。それは諫議大夫の張商英であつた。張は今までも帝の奢侈淫蕩を諫むること度々であつたが、帝は佞辯にのみ惑はされて顧みないでゐた。この日天文方の張夢熊に氣味の惡い事をいはれて、帝も心を痛めてゐられるのを見て、商英も亦表を奉つたのであつた。

『臣張商英誠惶誠恐頓首頓首百拜して皇帝陛下に奏す。

臣切りに謂へらく、天と人と感應あるは一理也、人心悅べば則ち天意得たり。人心怨めば則ち天變彰はる。近日星文は變を示せり、乃ち天心仁愛の一機なり。陛下もし大

天下は祖宗の天下なり

天變に答ふるの道

に警め懼れ大に悔悟し給はゞ、則ち禍を轉じて福と爲んこと掌を反すが如からんのみ切に惟みるに、天下は祖宗の天下なり。藝祖（太祖の意）金戈鐵馬によりて經營し、列聖（代々の帝王）深仁厚澤によつて涵養し、以てこれを萬世に垂れ無窮に傳へんと欲するなり。今陛下は佞臣の言に惑ひ給ひ、驕奢の慾を恣にし、萬歳山（後の艮嶽）を起し太湖の石を運び、寶籙宮を建て同樂園を修め、天下の農工を役して大に土木を興し、賦は煩はしく役は重く、人民は生くることを賴まず、されば年々旱魃と蝗害とに襲はれ、日月は光薄く或は蝕し、妖星は變を示し、風雨は調はざるもまことに宜なり。しかも陛下は恭謙以て天戒を謹み給はず、却つて群臣と游畋に溺れ、聲色に耽り、祖宗創業の艱難を忘れて、萬民をして塗炭の苦痛を嘗めしめ給ふ。願はくは臣が忠愛の意を汲み給ひて、膳を減し、樂を撤し、己を損し民を益し、宮殿の修築を止め、花石の搬送を停め、奸邪を逐ひ去り、賢臣を登用し、衆正の路を開き、群枉の門を塞ぎ、工役を罷めて以て民を息はしめ、倉庫を開いて以て貧に施し、力めて善事を行ひ、以て天變に答へ給はゞ、天心も復へすべく、人心も定まらん、斯くて生靈の幸となり、宗社の福とならんなり。臣萬死を冒して、伏して聖旨を伺ふ。』

帝はこの表を御覽じて、龍顏悅ばず、張商英に向ひて、

『卿が奏するところ、備さにその忠言であり嘉言であることを察する。だから今や宋江は山東河北に反し、方臘は荆楚湖南に叛き、妖星は燕北に現れ、天下紛々として何時定まるとも思はれない。若し卿に善謀良策があるならば、朕が及ばざるところを輔けて、天變を挽回してもらひたい、朕は卿か言を嘉納するぞ』と憂はしげに仰せられた。

卿に善謀良策はなきか

始めて天子の不自由を知る

□佞辯によつて慰む

張夢熊と張商英との上表を御覽じてから、帝はとかく浮かぬ顏をして暮された。或時平章の高俅と御史の楊戩とがお側に侍してゐるのを顧みられて、

『位は至尊であり、富は四海を有しても、一擧一動に諫臣から忠告されるやうでは、天子といふものも不自由なものぢや』と溜息を吐かれた。高俅は帝を慰めて、

『彼等草茅の言をお氣におかけになる事はありませぬ、人生は白駒の隙を過るか如しと申しまする、若し時に及んで樂みをしなければ、忽ち老いて復た樂しむ折は參りませぬ昔から聖主明君といはれた唐堯の墓は雜草に蔽はれ、夏禹が自ら耕したところも、周公が食するに三たび哺を吐いて賢者を待つたといはるゝのも、遠き昔に消え失せて、今は何一つ殘つてはゐませぬではございませぬか。これに反して褒姒を寵した幽王も、揚貴妃を愛した玄宗も、飛燕を嬖して成帝も、朝毎に歌ひ舞ひ、日毎に管絃をして、思ひのまゝに遊んだのでございまするが、一生は同じく一生ではございませぬか。小臣の言說に御腦を痛めらるゝ事はございませぬ。今朝酒あり今朝醉ふ、明日愁來らば明日當らんとも申してあります。萬一何か事がある時には、私どもが誓つて肝腦地に塗れ、以て陛下の御恩德に報い奉りまする。決して御心配遊ばされまするな』と滔々と述べたてた。

彼も一生是も一生

帝はこの奇怪な享樂主義の氣休めに悉く機嫌を直されて、それではこれから憂さ晴しの宴を催さうと、左右に命じて酒肴を運ばせられた。一同早や醉つた頃に、何處からともなく風のまに〳〵曲調面白き音樂が遠く聞えて來た。帝は大に安心したやうに微笑まれて、

『朕は九重雲深きところにばかりゐて、少しも知らなかつたが、下民どももあんなに愉快さうに遊んでゐると見える、それにしても都の町のさまを、有のまゝに見たいものぢやが、さういふ事が出來ないのは殘念ぢや』と仰せられた。楊戩はすかさず、

帝の微行を勸む

『それはお易い事ではございませぬか。正式に行幸の鹵簿をお立てになつては、道掃除があつたり人拂ひをしたり、都中が靜肅になつてしまつて、とかく有りのまゝのすがたを御覽になることは出來ませぬが、お召物をお替へになつて、秀才儒生といふやうな扮裝でも遊ばしたら、私ども一兩名が從僕の姿となつてお供を致し、後載門（北門）から御微行になれば、御存分に町や店の光景を御覽になることが出來るではございませぬか』と申上げた。

天子花柳の街を素見す

□天子の都見物

微行の献策には帝も無上に喜ばれた。一刻も猶豫が出來ないと即座に衣服を改めて儒生の扮裝をされた。お供は高俅と楊戩の二人だけで、後載門から脱け出し、都の町の大路小路を見物しながら、花柳の街に踏み込んだ。夕暮の頃、金環巷といふ通りへ入つた。そこは又少し樣子が異つた町で、門には塑像を置き、戸には名花を列ぬるといふ雅びた構で、簾の奥には喋々の嬌舌喧しく、門の陰には笛の音が響いてゐた。そして其處には脂粉を施し媚を装つた者どもが隱見するのであつた。帝には珍しくもあり面白くもあり頗る御意にかなつた。

妖艷極りなき美人あり

或一軒は殊に立派に飾られて、帝も美しく思召す程の數奇を凝らした家であつた。帝は思はず覗き見をすると、中に聲作る者があつて、翠簾高くかゝげ、繡幕低く垂れたところに一人の美人が坐つてゐた。烏の濕羽なす髪に金鳳の簪を挿し、眼に秋水の波を湛え、眉は春山の黛を拂ひ、腰のたをやかなるは楊柳に似、體の滑かなるは凝脂の如く、是で琵琶を抱いてゐたら正に鄭觀音といふべく、白鸚鵡をかけてゐたら確に楊貴妃といふべく嫦娥が月宮から出て來たのか、洛女が玉階を下つて來たのかと思ふばかりの美人であつた。

帝忽ち心を奪はる

この美人こそ當時その名滿都に冠たる李師師といふ妓であつた。この女の爲には家倉を失つた金滿家や、命を捨てゝしまつた田舍者など數々あつた。

帝は一目御覽あつて忽ち魂が蕩けたやうであつた。然し帝にはこの女の素性や身分はさすがにお判りにならなかつた。高俅もお答が出來なかつた。帝は向側の茶店へ立寄られた。そこで欲しくもない澁茶を飲んで、茶店の主人にいろ〳〵と問糺して、名や身分はお判りになつた。そこで又その茶店の主人を使として、李師師が許に遣はし、

『こちらは殿試の秀才（朝廷の試驗に及第した秀才）だが、そちらへ行つて一杯酒が飲みたい、御都合いかゞ』と問合せをされた。使は直ぐ立戻つて、喜んで迎へると傳へた。帝は喜びに堪へない程で、二人のお供と早速李が家へ行かれた。

其處には宮廷の女に見出されない種々の淫蕩な濃艶な面白さがあつて、一として帝を珍しがらせ嬉しがらせないものはなかつた。一行三人は李を相手に酒を飲んだ。

帝の身の上ばなし

□天子娼家に宿す

李師師はお酌をしながら帝に對して、

『妾にはどうもお國が判りませんが、どちらです、そして御苗字ぐらゐ仰しやつても宜いでせう』と鼻を鳴らして見せた。帝はもう魂天外に飛んでゐたので、早や他愛もなく

『心配しなくても宜いよ、私はこれでこの汴梁の主で、三省六部といはず、御史西臺といはず、四京十七路、五覇帝王の都、皆私の管下にあるのだよ、今住つてるところはね、さやうさ、東華門の西で、西華門の東、後載門の南で午門の北だ。そこの大門樓の中が私の住居さ、姓は趙だが、八番目の部屋だから、私は趙八郎なのさ』と仰せられた。

捕吏の恐縮

『まア、たまげましたね』といつて師師は座を立つた。そしてこの途方もない法螺吹きが氣味惡かつたので官に訴へた。

時を移さず捉殺使の孫榮と賛監とが巡邏二百餘人を引つれて駈けつけ、忽ち李師師が家を取圍んだ。

帝は戸外の物騒しさに氣づき、高俅に目くばせされると、高は門のところへ駈け出した。其處には孫榮等が大威張りで出張してゐた。高俅は彼等を怒鳴りつけた。彼等は驚いて熟視すると、當時君寵並ぶ者なき高俅だつたので、はつとばかりに地に平伏してしまつた。そしてぶる〳〵と震へ上つた。そして不審の訴によつた旨を陳辯した。

高は彼等を深く咎めず、それとなく附近を巡回して帝を警護させることゝした。この騒でお客さまは天子だといふ事が李師師にも判然した。男といふものを物のかずともしない名妓でも、天子と知つては膽を潰して了つた。家の者ども一同地に伏して、ひたすら罪を謝する外はなかつた。帝も今更身分を隱すことも出來ず、又師師が色香を捨てたくないので、一同無罪と申し渡された。そして再び元の四人で打解けた酒宴を催すことになつた。

天子遂に妖婦に捕はる

帝はその夜宮中に歸らないで、師師が室に醉臥された。そして朝になつて、驚いて歸られた。歸られる時師師は有ん限りの媚を呈して取り縋つた。帝は今夜必ず又來ると約せられた。そして帝は果してその夜もその次の夜も師師が許へ微行された。

帝が李師師が許へ通はれること殆ど二箇月に及んだ。誰知るまいと思つてゐられたのだが、都合の悪いことには正言の曹輔に知られて堂々と表を奉られた。

諫臣の決心

□諫められて赤面

曹輔は帝の微行を知つて、我が職責として默過すべきでないと考へた。幸に諫言が用ひらるればよし、萬一聽かれずして身は鼎に膏を塗ることになつても、また古の諫臣龍逢比干と地下に會ふ面目はあると決心した。

その上表は長文であつた。

『陛下は萬金の御からだ、こはこれ歴代諸帝の御かたみなり、陛下躬ら惜み給はずとも、祖宗の御爲に御身を惜み給はずや』とも書いた。又、

『承ればこの頃、賊臣高俅賊臣楊戩なるものあり、これ元より市井無籍の小人。一旦聖恩に遭ひて巧に佞諛を進め、聖聽を蠱ばみ奉り、萬乘の尊嚴を輕んじて下民間の坊市に遊び、娼樓に宿らせ奉ること、事迹顯然たり、人の耳目を掩はんと欲するも得べからざるなり』とも書いた。

人の耳目は掩ひ難し

『下賤の潑妓（蓮葉女の意）を寵愛し給ふ事天下に知られなば、史官は何とか記し奉るべき。服を易へて微行し某娼の家に宿すること陛下より始る。と記さんには笑を萬代に貽すものにあらずや』とも書いた。

非を遂ぐる勿れ

帝はこの表を得て遺に慚ぢられた。然し蔡京が言に從つて彼を遠國に左遷されようとした。その時諫議大夫の張天覺は、

『曹輔はその内心は君を愛するのみでござりまする、申上げるところが甚だ硬直でござりますために、陛下はこれを遠ざけようと遊ばすのでござりませう、若し陛下が過失を文つてその非を遂けさせられるに於ては、今後忠言を奉る者も絶え、必ず御後悔遊ばす時が參りませう』と申上げた。帝も屈して、

『朕もわが過は知つてゐる、これから改むるであらうぞ』と仰せられた。

□天子の戀敵

それから數日が間は、帝も我慢して居られたが、何うも李師師が色香が忘れられない。楊戩を召して密かに賴まれた。

『曹輔張天覺等に諫められて、出られなくなつた、そのためにあの女との約束も違へることになつたが、此方の心は少しも替らぬから怨まぬやう、よく話して貰ひたい』

楊戩は馬を飛ばして李妓の家へ行つた。女は羞ぢらつた樣子を見せ、又醉つたふりをしてゐた。楊は帝の御意を傳へた。

おめでたき御心痛

『どうせ天子には皇后さまや貴妃など多勢おいでになるのですもの、妾どものやうな賤しいお轉婆の家へなどおいでにならないのが本當でせうよ』と女は床の上に醉ひ倒れて手足も露はに拗ねて見せた。楊はいろ〳〵と慰めいたはつてゐたが、ふと側の卓上を見ると小い手紙があつた。それは女の古馴染なる賈奕といふ小役人から來たもので、

『七夕に別れたきり、早や重陽になつた、月日の流れるのは早いものだ、此頃天子は忠臣の諫を納れられて、深く宮中に在しまし御微行もないといふ事だ、私等の緣も盡きないものと嬉しく思ふ。今日の節句をむだにも過せまいが、行つても差支ないか、色よい御返事を待つてゐる』と書いてあつた。楊もこれには驚いた。さすがに赫となつた。

情夫の密書

『天子の御寵愛を蒙りながら、この恩知らずが、今に見ろ』とその手紙を取つて宮中へ駈け戻つた。帝は待あぐねてゐられたので、

『おゝ歸つたか、師師は何といつてゐた』と相好を崩された。楊はものも言はずにかの手紙を帝に差出した。

賈奕は忽ち取押えられ、三族を合せ誅せられようとした。この事は又諫議大夫の張天覺の耳に入つたから默つてゐない。

又も油を絞る諫言

『陛下は奸讒賊臣の語を信じ給ひて、夜は娼家に宿し酒色に荒み給ひ、朝綱は理らず、國政は修めず、天文は上に變じ、人心は下に怨み、國境安からず盜賊四方に蜂起するに際し、それ等につきては大御心を痛め給ふこともなく、却つて匹夫と潑妓を爭ひて肆まゝに刑戮に處し給はんこと、他日これを史官の筆に上せなば、譏りを萬古に貽し給ふものならずや』と諄々と說き諫めた。

その時楊は例の手紙を取り出して張天覺に見せた。帝は、

『卿でもその手紙を見たら許せまい』

『これ即ち陛下の御過でござりまする。人必らず自ら侮つて、然る後人これを侮ると孟子も説かれました。陛下が九重の奥に在さば誰が謗り申しませうぞ、萬乘の尊貴を親ら尊しとし給はぬによつて、この通りの事も出來致すのでござりまする、君君たらずんば臣また臣たらじと申すのは其處でござりませう、陛下は先づ御自分の御過を悔いさせ給ふべきで、決して人を咎め立て遊ばす場合ではござりますまい』と手強く述べた。

自ら侮つて人に侮らる

帝も己むを得ず賈奕を誅することをやめて、遠く廣州の方へ轉任せしめられた。

賤妓忽ち殿上の人

□諫臣を追つて娼婦を容る

帝は張天覺の諫言が忌々しかつた。何とかしてやりたかつた。

使を遣はして先づ李師師を召した。彼に衣冠を與へて帝の御座の次に座を與へ、其處へ張天覺を召した。張は遙かに階下に立つた。

『朕は今この夫人と殿上に同座してゐるが、卿はその階下から何か言ふことがあるか』

『三綱五常は地を掃つて無くなりました。臣は骸骨を乞ふて田園に歸臥する外はありません』と泣いていつた。

帝は怒つて彼を貶して勝州の太守とし、即日赴任せしめられた。後になつて帝は彼が異人たるを覺つて惜まれたが、あとの祭であつた。

天覺が去つてから宮中の頽廢は益募るばかりであつた。蔡京父子や童貫等は上に專恣を逞くし、高俅、楊戩、朱勔の徒は下に黨を組んで邪惡を事とし、帝は全く彼等の思ふまゝに籠弄されるばかりであつた。

娼婦遂に明妃に上る

李師師は遂に李明妃となつた。彼女が住んでゐた町の名を改めて小御街と喚び、始めて緣つなぎのお使をした向家の茶店の主人周秀も、泗州の茶提舉といふ役を與へられたこれは宣和六年の事であつた。

□狂態癡態の數々

宣和六年金と約成りて燕山の六州は宋に歸した。但しそのために宋からは莫大な年金を拂ふのであつた。しかもその地方は洗ひ晒い金人の爲に運び去られた土地であつた。數百萬の金を拂つて空城を得たのみであつた。

空城の價數百萬金

遼の張穀は精兵を擁して平州にゐた。金では當然自分の方に屬してゐるものと思つてゐた。それが宋に投じた。これは金が宋の不信を責むる種となつた。

燕山の地を得たといふ事は帝を喜ばせた。それが實は重大な不利を蒙つてゐる事も知らずに、皇威が伸びたやうな氣がした。

帝乞食に扮して戯る

それからの帝は日として宴を催し歡樂を盡さぬ日とてなかつた。遂には宮中に茶店や酒店を作らせ、宮女を賣子にして遊んだ。帝自ら乞食の裝ひをして、その間に物を乞ひ歩くといふ癡態を演じた。又長夜の飲と稱して徹夜の酒宴を催ほされた。

築山の萬歳山の增修も始められ、又太湖の石の運搬が始まつた。蘇州杭州から汴京まで石を運ばせるので、沿道の民家から壯丁は盡く人夫に驅り出され、その人夫等は酷使に堪へず、到る所に仆れ死んだ。怨嗟の聲野に滿ちたが帝は少しも知られなかつた。

千秋庭の月見の宴

帝は林靈素と李明妃とに高俅などを從へて千秋庭に宴を催ほされた事があつた。晝のやうな明るい月夜であつた。酒闌にして林靈素を禁中に宿せしめ、帝は明妃と寢に就かれた。

暫くして帝は林靈素と庭上に坐して閒談してゐられた。

帝月宮に遊ぶを得たり

『話に聞けば月の都は方圓八百里といふが、若し廣寒宮（月中の宮殿）に到るには一萬億を隔てゝゐるであらうが、どうして行かれるだらう』

『陛下が廣寒宮を御覽になりたければ、お易い御用でござりまする』と云つて林が空中に向つて手招きをすると、忽ち二羽の青鸞が御前に舞ひ下つた。

『これにお乘り下さいませ』と林が勸むるまゝに、帝は一羽の背に跨り、林も亦同じく一羽に乘つた。

『暫くお目を塞いでおいでなさいませ』といつて、林が一喝すると二羽の青鸞はふわ〳〵と天上さして舞ひ上つた。暫くして帝が目を開いて御覽になると、大きな門樓を通りぬけるところだつた。冷光滿ち〳〵て清寒肌を襲ふ程である。

天下分目の圍碁

□九天の下に眞倒さま

帝は林と門内へ進み入られると、一樹の陰に紅衣の人と黑衣の人とが南北に分れて碁を圍んでゐた。

『天帝の勅を奉じて、この一局に勝つた方が負けた方の天下をも取るのぢやぞよ』と二

人は互に局面を爭つた。やがて勝負がついた、黑衣の人が勝つて哈々と笑ひながら北方へ行つてしまつた。負けた方の紅衣の人が悄々と南の方へ去つた。

其處へ金甲の神人が來たから、帝は林をして今の二人は何といふ人かと問はしめられた。

『紅衣の人は南方火德眞君、霹靂大仙趙太祖（卽ち宋の太祖）ぢや、黑衣の人は北方水德眞君、大金太祖武元皇帝ぢや』と言ひ捨てゝ、その神人は碁盤を片づけて行つて了つた。

社稷傾くを知る

帝は宋の天下が金に奪はれるに定つてゐるのを知つて、最早や月宮見物の興味もなくなつた。快々として道を急いで行くと、俄に一つの城があつて、紅の光が充ち滿ちてゐた。門番がゐたから尋ねられると、

『これこそ旱天大帝玉皇の城ぢや』と云つた。

帝は大に駭いて、林と共に天門を望見し、先刻の青鸞に乘つて歸らうとしてゐられると、其處に又忽ち人が現れた。松の如く瘦せて鶴の如く淸い人で、七星冠を頂き、雲根履を穿き、身に絲羅を纏ひ、手に寶劍を持つてゐた。帝は一目見てどうやら見たやうな貌だと思はれたから、尋ねて見ようとされると、その人は帝を見て忽ち怒の色を現はした。

見覺えたも道理

元の諫臣の怒罵

それは元の諫議大夫張天覺であつたのである。

『今に御覽なさい、陛下は夷の虜となられます、邪臣を信ぜられるから、さういふ始末にもなるので、その時になつては、宮中の內苑を慕はれてもだめですぞ、美人を愛しようと思つてもだめですぞ、庶民を虐げんとしてもだめですぞ、遠く流浪して五國城まで彷徨ひ歩き、寒に震へ餓に泣きますぞ』と聲荒らげて言ひ畢ると、張天覺は帝の御袖を拉へて引摺り行き、遙かに天門を望んで突き放した。林靈素も呀といふ間に、帝に摑まつたまゝ、共に九天の下に眞倒さまに落ちて了つた。

□寂しき歡樂

滿身冷汗に濕れた帝は、臥床の上に眼を覺された。

『何をお驚きになりました』と傍に寢てゐた李明妃は艶やかに笑つた。帝は夢中の物語を一通り李妃に物語られた。

『正夢もあれば逆夢もありまする、夢の事などお氣にかけられまするな』

夜が明けるのを待つて、帝はこの話を林靈素にもされた。

『己むを得ない事でござりまする。興廢の分既に定まつてゐます。人によるのではござりませぬ、皆天命です』と淋しく答へた。

少き餘生を貪り樂しむ

帝はその運の末に近づくを知つて、その殘り少き餘日を、出來る限り歡の内に過したいと、日夜朝暮の別なく放埒な生活を續けられた。

その後林靈素は、禁中出入も久しくなつたし、且つ恩賜の數々で財産も出來たので、溫州へ歸りたいと願ひ出たが、帝は許されなかつた。然し彼の罪を數へて諫められたので、帝は遂に彼を溫州に歸らしめ、宮祠を與へられた。

■林靈素については本叢書「神仙」に詳しく出てゐる。

□金盃を盜める女

群衆に錢を撒く

宣和六年正月十四日、鰲山の萬燈を見る群集に對して、宣德門から金錢銀錢を撒いて拾はせた。十五夜には内門の直下で萬民に酒を與へられた。

その時一人の女が御賜の酒を飲んだついでに、金盃を一つ懷にして出た。その女を捕へて帝に訴へた。

帝小唄に感ず

『妾は夫と共に萬燈を見に參りましたが、人ごみの中ではぐれてしまひました。それから御酒を頂きましたら顏が赤くなりました。一人で醉つて歸りましたら、きつと姑に疑はれますから、お盃を拜借して行つて姑の前に證據としようと考へたまでゝござります』

それにつきて、一首を聯ねました」と唄つた。

月滿逢壺燦爛燈　與郎携手至端門
貪觀鶴降笙簫擧　不覺鴛鴦失却群
天漸晚感皇恩　傳宣賜瞼生春
歸家切恐公婆責　乞賜金杯作照憑

帝はこの唄に愛でて、その女を罪せず盃をそのまゝ與へて歸らしめようとされた。ところが意見を述べるものがあつて、

『金盃が欲しさに豫て夫にでも作つて貰つて來たのかも知れませぬ。つまり陛下の御盃を騙り取らうとするのかも知れませぬ。新に題をお與へになつて、即座に一つお作らせになつて、それでもすら〳〵と新作が出來るやうでしたら、その時お盃を賜はつても宜しいかと存じまする』といつたので、なるほどと、その女を引戻して、「金盃」を以て題

とし「念奴嬌」を調として新作を命ぜられた。

■念奴嬌は唐の玄宗の頃の名倡念奴に關する詞曲の名、東坡も此調を用ひて赤壁を詠じたのがある。

その女は聖旨を領掌して立どころに一詞を作つて奉つた。

桂魄澄輝　禁城內萬盞華燈羅列　無限佳人穿繡徑　幾多妖艶奇絕　鳳燭交光　銀燈相射　奏簫韻初歇　鳴梢響處　萬民瞻仰宮闕　妾自閨門給假　與夫携手共賞元宵　誤到玉皇金殿砌　賜酒金杯滿設　量窄從來　紅凝粉面　尊見無憑說　假王金盞　免公婆責罰臣妾

帝はこの新作を御覽じて大に悅ばれ、この度限りとして、その女に盃を賜つた。

榮華の卷終

流離の卷　宣和遺事抄（下）

遼のために絕えず北邊を犯さるゝので、宋はこの契丹の强を挫くことに腐心した末、新に起つた女眞帝國の金と結托して、遼を挾み擊つ策を取つた。その策は中つたとも云ひ得るであらう。遼は確かに弱つたからである。然し遼が宋を犯さなくなつた代りに、金が無理難題を直接宋へ持ちかけるやうになつた。金の力を借りて遼を疲弊させたのは、宋に取りては脣亡びて齒寒しといふ結果になつた。

脣亡びて齒寒し

金が宋へ持ち込む無理難題は、遂に天子を拉し去つて、これを酷遇するとゝもに、國土の大半を奪ふまで進まねば已まなかつた。宣和遺事が記述するところは、正にその間の事情を說明するものである。

一、妖變漸く多し

宣和六年の三月に、金から使が來て米を二十萬斛だけ貰つて行かうと申入れた。預けた物を取り返しに來たやうな挨拶である。宣撫司（邊防の都統）の譚稹は、さういふ約束をしたやうな書付は無いからと拒絶した。金の使は、

『去年四月に趙良嗣が使に來て、確かに約束をしたのだ』と主張する。

『趙が口先でそんなことを言つたかどうか知らぬが、二十萬斛とは容易な量ではない。御用立てる事は罷りならぬ』と譚はきつぱりと刎ねつけた。

これは些さか痛快のやうであつたが、金を怒らせてしまつた。それから金は、兵を擧げて來る度に、この事を口實とするやうになつた。

二十萬斛の無心

閏三月に京師（宋の都は汴河南の開封）に地震があつた。陝西蘭州の諸山は陷沒して草木は土中に埋れたが、山下の畑にあつた黍苗は却つて山の頂上に生えた形になつた。朝廷は右司郎中の黄潛善を視察にやつたが、

『いや全く訛傳でございました』とばかりで實際を報告しなかつた。徽宗皇帝は安心された。そして黄は昇進した。

地震を祕して昇進

七月校書郎の衞膚敏を使として、金の天子の誕辰祝詞を述べに行かしむる事とした。

『金の誕生祝日は我が朝の天寧節より五日後れになつてゐます。それにあちらから祝賀使を差立てたといふ報告も來ないのに、此方から先づ賀使を出すのは、既に威重を損するものでございませう、若し金からは遂に賀使を出さないで濟ましたら、誠に不面目なことになりませう。私は燕山（直隸薊縣）まで參りまして樣子を伺ひ、若し金の使が來ないやうでございましたら、贈物などは國境に置いて立歸りませうと存じます』と衞は意見を述べた。

帝は成程と思はれて、

『然らば其方が考に任せよう』とあつたので、衞は燕山まで行つて見ると、果して金からは更に賀使などを派遣する樣子もなかつた。衞はそこから引返した。

十二月に洪水があつた。その頃奇怪な事が重ね〳〵現れた。都では果物賣の男がお產をした。酒屋の女房が四十餘になつて、俄に髭髯が生えて六七寸にもなり、然も頗る立派なものだつた。京尹からこの事を上申したから、その女房は詔により女道士とされた。

河北から山東にかけて連年の凶作で、米が足らず、木の皮を削り野生の草を啖ひしてゐたが、遂に極度になつたから、一齊に起つて群盜となつた。山東には張萬仙といふ頭

天變地異頻りに起る

群盜蜂起す

目の下に十萬からの一團が出來て濟州を圍んだ。京師を距る僅に百二十里足らずの近間であるのに、朝廷では更にそれを知らなかつた。又高托山といふ者は三十萬の大團を作つて河北に起つた。これは內侍の梁方元を將として征討に出かけさせた。

註此年八月に童貫が又用ひられて樞密院事、兩河燕山路の宣撫使となつて文武の大權を掌り、十二月には蔡京も復せられて領三省事（中書、尙書、門下の三省の長官）となつたことを注意して置く。

八百屋の神かゝり

二、遼亡びて金に迫らる

宣和七年の正月金は遂に遼を亡ぼした。

六月には童貫を封じて廣陽郡王となした。八月都の東門外の野菜賣が、皇城の宣德門に突入し、俄に狂氣のやうになつて、荷を投げ捨てゝ宮門に對ひ、

『太祖皇帝と神宗皇帝とが俺に言つて來いと仰せられたから言ふのだが、八郎（徽宗帝は神宗帝の八男）の驕奢は今に國を喪ふぞ、今の內に早く改めなければ後悔しても追つかないぞ』と

野狐に侮らるゝ玉座

怒鳴り散した。番卒は驚いてその男を捕へ獄に投じた。その內に正氣に復つたやうだから種々に問ひ訊して見たが、宣德門で豪語したことは全く記臆してゐないやうだつた。官でも處分に困つて密かに獄中で殺して了つた。

その頃萬歲山の狐の群が、山上の殿堂の間に皿や鉢を竝べて宴會を開いた。兵士を遣つて逐ひ拂はせたけれども、その邊をうろ〳〵して逃げ散らなかつた。すると今度は艮岳の狐が禁中へ潛り込んで、帝の玉座にぬく〳〵と坐り込んだ。これ亦逐うても行つたり來たりするだけで却々去らなかつた。帝は內心不吉の徵だと考へられたが、蔡攸はこぢつけて、

『艮岳の狐王が御馳走が欲しくなつたゞけでございませう』といつた。然し詔して狐王廟は取毀たしめられた。

金軍二道より迫る

十二月に金の將斡離不（斡喇布とも）粘罕（尼瑪哈とも）二人が道を分つて北方に侵入した。

註斡は金の太祖の第二子で、道敎佛敎を尊んだから、菩薩太子と稱せられた人である。

斡が軍は燕山を降して直ちに河北を犯し、粘が軍は河東から直ちに太原に迫つた。そ

の時吏部員外郎の傅察が賀正使として赴くのを、斡が軍で捕へてしまつた。傅をして身を地に投げて斡を拜せしめ、副使以下の者は皆列び拜して、斡に對して「臣」と稱せしめた。傅は獨り屈しなかつたので、金兵は武器を以て彼を脅しながら、

『宋の天子が德を失する事甚しいから、已むを得ず金の兵を以て天下の爲に伐つのだ』といつた。傅はそれに答へて、

『かねて同盟の誼があるのを破るために、さういふ言ひ懸りを作つてゐるのだ。昔から兵を用ひる者は、先づその曲直を以て勝敗を定めるものだ。我が宋は金に勢力が劣つてはゐないから、決して金の爲に蹂躙されはしない。お前などは死にゝ行くやうなものだ俺の首は斷る事が出來ようが、この膝を屈して臣と稱せしむる事が出來るものか』と罵り返した。金將は大に怒つて傅を斬つた。

この首は斬るべし、この膝は屈すべからず

童貫は太原にゐて、馬擴といふ者を金將の粘が陣に使にやつた。粘は馬をして帝王に對すると同じ禮をなさしめ、自ら踞坐してその拜を受けてから、

『我が金の大聖皇帝は、初め趙皇（宋朝は趙氏）と海を隔てゝ好を通じ、双方誓書を立てゝ萬世渝るまいと約されたのに、意外にも宋では約束に背き、此方を亡命したものや、遼から逃げ込んだ者どもを隱匿し、再三交渉しても要領を得ない返答ばかりするので、この度その曲直を辨ずる爲に大兵を率ゐて此處まで來たのだ、歸つてさういへ』と追歸した

臆病な童貫

馬擴は大原に歸つて、具に粘が言を童貫に傳へた。童貫は震へ上つて逃げ歸らうと思つたが、大原の守將張孝純に一應相談した。張は、

『金人が盟を破つて攻め入るのですから、大王（童貫は廣陽郡王なればいふ）は宜しく諸路の將士を會して、力の限り此處で防がれて然るべきだと思ひます。今大王がこの地を捨てゝ都へ歸られたら、人心必ず動搖し、河東河北の地は忽ちに敵の手中に落ちませう』と答へた。

童貫は眞赤に怒つた。

『俺は宣撫の命をこそ受けて居れ、邊土を守る役では無い。玆の守將が自分でその責に當ることを避けて、俺を引き留めようとするならば、一體玆に守將を置かれたのは何の爲だか判らない』と罵つた。張は掌をもみながら嘲笑つた。

重臣我が身を堵けず

『平時には童大王も幾らか威嚴があるやうだが、いやはや金が同盟を破つて攻め入るとなるとあの通り震へ上つてゐる。國家の重臣でありながら、一身を堵して國難に當ることも出來ず、鼠のやうに頭を抱えて逃げ出すとは呆れたものだ。あれで都へ歸つて人に

顔が合せられるつもりだらうか』

童貫はこの嘲に耳も籍さず、即日都を指して逃げ歸つた。

降將の嚮導

斡は燕山を陷いれた。遼から宋に降つて燕山に大軍を擁してゐた郭藥師等は忽ち金に降つた。金は郭を以て嚮導とするを得て、深く侵入するに多大の便となつた。斡は進んで中山府に迫つた。一方の將粘は朔州の武縣、代州の忻縣を取つて大原府を圍んだ。

天下に謝しても間に合はず

朝廷では花石綱や內外製造局を罷めた。今になつてさういふものを止めても、早や何の效もあるものではなかつた。

三、大學生の斬奸狀

金には散々に見縊られ內外の形勢日に非なるを見て、徽宗帝は位を太子に讓る決心をされた。その前に先づ詔を下して、己れの不德不明を謝し、天下の勤王義勇を鼓舞し、且つ中外の直言極諫を求められた。これまた既に機を失すること年久しきものであつた。

帝は位を太子に禪られた。これが欽宗である。徽宗は道君皇帝と號して龍德宮に入つた。太子妃だつた朱氏は皇后に冊立された。そして李鄴を金の軍に遣はして、帝が位を禪られた事を告げ、且つ講和を議せしめた。徽宗の退位は國民に罪を謝するのみならず實に敵國金に對しても謝罪の意味があつたのである。

敵國に謝罪の退位

金の軍は破竹の勢で南下してゐる。帝が退位されたといつて、それは氣の毒と鋒を收むべき謂れが無い。斡が軍は慶源府を犯し、更に進んで信德府を攻めて取つた。

大學生の彈劾上書

この時大學生の陳東は諸生を率ゐて闕下に伏して上書をした。その大要は、

『臣等聞く、古へより帝王の盛なる堯舜より盛なるは莫し、堯舜の盛なる善を賞し惡を罰するより大なるは莫し。堯の時八元八凱あり、而かも未だ用ふるに暇なし。四兇ありて而かも未だ除くに暇なし。堯はその用ふべく除くべきを知らざるにあらず、思へらく、我既に勤勞に倦めり、必ず天下を舜に授けん、特に用ふべきと除くべきとを殘して、舜をして大に賞罰を明にして天下に示さしめんのみと。故に傳へいふ、舜に大功二十あつて天子となると。天下これを誦して今に至つて息まず、臣切に謂ふ、道君皇帝の時にあつても、賢才の八元八凱が如くにして未だ用ひざる者無きにあらず、姦臣賊子の四兇が如くにして未だ去らざる者無きにあらず。道君皇帝も亦これを知らざるにあらず、特

六兇の罪を數ふ

に之を陛下に殘せるのみ。姦臣賊子の四兇が如き者を知らんと欲するや、曰く蔡京、曰く王黼、曰く童貫、曰く李彦、曰く梁師成、曰く朱勔これなり。臣等謹で按ずるに、蔡京が罪惡最も大なり。天資兇悖、首として亂階を爲し、忠良を陷害し、儈佞を進用し、子孫を引いて盡く要路に置き、祖宗の法度を變亂し、朝廷の爵賞を弄び、生民を虐げ、宦官と結托し、禍心を包藏するは王莽に比すべし。京が要職にあるに因り姦人並び進む王黼相ついで宰相となり、柔曼の容を索め、俳優の行をつらね、君を欺き上を罔し、國を虫ばみ民を害ひ、至らざるところなし。童貫は實に京が助によつて兵權を握り、遂に大帥となり王に封ぜらる。功を貪り賞を冒すも、事の機を悟らず、朔方の兵遂に輕擧を致せり、我が國盟を破り、我が隣好を失ふ、今日の事彼ならずして誰を罪せん。貫が恃むところは梁師成なり。婚姻を連ねて以て相救援せり。師成は表に恭謹を示し、裏に險詐を存す。忠に假りて佞を行ひ、賢に籍りて姦をなし、我が儒名を盜んで高く自ら標榜せり。李彦は民田を掠めて威を三路に震ひ、民の資産を奪ひて課稅を重く斂め、誅求甚しく、盜賊四に起れり。曩に清溪の寇起れるは、實に朱勔父子が東南の民を侵奪し、怨を諸路に結べるに由る。方臘（叛將）一たび呼べば四境響應し、州縣を屠り吏民を殺し、天下騷然として年を彌りて已まざるは、皆朱勔父子が致すところなり、按ずるに朱勔父子皆曾て罪ありて刑せられ、賄賂に因つて蔡京に事へ、交を宦官に結び花石を買收し、進奉の物もその實盡く已れに入れ、數路を騷がし、官司を蔑視する事奴僕に同じく、貢ぐ所を物色して盡く之を民に取り、民の家屋を撤し民の墳墓を發き、幽明共に禍を受くること所在皆然り。甚しきは深山大澤の人跡到らざる境にも、苟も一花一石あれば、擅まゝに威福をなし、州縣に迫り脅かして必ず取る。爲に往々人命を隕せり。東南の民、怨骨髓に入り、その肉を喰ひその皮を敷かんと欲し、天下この六賊に對して扼腕すること久し。我が國家を誤り、我が民心を離れしめ、天下困弊し、盜賊競ひ起り、夷狄こもゝ侵して我が社稷を危くし、道君皇帝をして痛ましくも已れを罪するの詔を四方に告げしめたり。京等六賊は罪狀未だ白せず、典刑未だ正さず、天下怨を歸せざるなし。陛下若しこの六賊を誅せずんば、何を以て道君皇帝の謗を雪ぎ以て天下の疑を解かんや。況んや今日の事、蔡京前に壞亂し、梁師成陰に內に賊し、李彦怨を西北に結び、朱勔怨を東南に結び、王黼童貫又從つて怨を遼金に結び、祖宗の盟を破り、中國の信を失ひ、邊隙を開き、天下の勢をして絲髮の如く危からしむ。この六賊は異名同罪たり。伏して願は

天下六賊を惡むや久し

六賊の首を四方に傳へよ

くば陛下この六賊を擒にし、之を市に列ね、首を四方に傳へて以て天下に謝せば、道君皇帝が未だ爲さざりしところを承けて陛下に於て成し遂ぐるに近からん、豈に偉ならずや」

四、屈辱的の媾和條件

立春に不吉の兆

欽宗即位されて靖康と改元した。

靖康元年正月六日は立春であつた。立春の前日には土牛を出す慣例がある。寒を送り春を迎ふる一つの行事である。この年も例年の通り土牛を作つて迎春殿に列べて置いて刻限が來たから樂を奏して土牛を迎へ、法の如く之を鞭つたところが、牛は碎けて了つた。實は夜半に殿中に不思議な泣き聲が聞えた。曉にこれを調べると殿上の神像が涙を流して居り、牛の首は切り落されてゐた。それを密かに修補して式を行つたのであつた識者は皆不吉の徵として眉を寄せた。

正月、言を求むるの詔が下された。監察御史余應求が上書して恩賞を受けた。金が侵入してから以來、進言を求むるの詔は度々出た。然し形勢少しく緩和すると、忽ち進言は抑え阻まれた。當時の民謠に、

「城門閉れば言路開け、城門開けば言路閉づ」と囃した。城門を固むる程に事急なる時は、狼狽して進言を徵し、少しく安心して城門を開くやうになれば、忽ち進言の路は塞がると嘲つたものである。

官軍風を望んで潰走す

正月九日、金の兵は既に河北に在りとの報が來た。內侍の梁方平が兵を領して河の北岸にゐたが、敵軍掩ひ至ると忽ち潰走して了つた。橋を守る者が金兵の旗幟を見て橋を燒き落して遁げたので、渡ることが出來ないで、一時金兵を支えた。梁が潰走したので附近の守備も風を望んで逃げ散り、官軍は河の南に隻影を留めぬまでになつた。

前面の對岸に敵兵がゐなければ、河を渡ることは容易である。金の兵は小船を集めて渡りはじめた。五日もかゝつて馬軍は渡し了つたが、步兵は未だ渡らなかつた。叛將郭藥師は先導となり、既に渡つた騎兵を進めて濬州まで進出した。帝は親征の詔を下された。

王黼は金軍が都に迫ると聞いて、逸早く一族老少を車に載せて都落をさせた。帝は命

を俟たずして、恣に落したのを憎まれて、王を貶して永州へ行かしめ、その家を沒收せしめられた。金銀財寶は萬を以て計る程にあり、婢妾も頗る多かつた。その中には婦人としての封號を有する者も多く、令人の封號を有する者八人、安人の封號を有する者十人もあつた。王は常に公然と官爵を賣り夥しい財を貪つてゐた。その頃京童の謠言に、

『三百貫は通判で、五百索は祕閣の値』といつて賣官の相場まできめてゐた。

王は悄々と永州へ赴く途中、雍丘縣の南固村といふ處まで行つたのを、吳敏と李綱との願によつて、開封の尹聶山の遣はした武士によつて殺され、その首は帝へ献ぜられた。

賣官の相場

朱勔は一旦鄉里へ逐はれたが、幾もなく死を賜ひ李彦も死を賜つた。

上皇(徽宗帝)も遂に都を逃げ出された。蔡京父子も南へと逃げ出した。

二月の二日に金の斡離不が軍は遂に汴京の城下に押寄せた。そして先づ直ちに厩舍を襲つて、馬二萬頭と山の如き糧秣とを取つた。これは降將郭藥師が案内を知つてゐたからである。

金軍城下に迫る

金の兵が黄河を渡つた時、若し宋が僅に二千の兵で守つたら生きて渡られるところではないかと歎じたといふ事である。上述の通り河の南岸には一人の官軍も踏留らないので、易々と金軍を渡らしたのであつた。

徽宗が位を退かるゝについて、李鄴を使として和を講ぜしめた事は既に述べたが、使から歸つた李は、頻りに金が強くて宋が弱いことを吹聽した。彼はいつた——、

『金人は虎の如し、　馬を使ふ龍の如し、
山に上る猿の如し、水に潜る獺の如し、
其勢ひ泰山の如し、中國は累卵の如し』

敵の強大を吹聽す

如し々々と六つ竝べたから、時人彼を稱して六如給事といつた。

さて金の兵は通天門景陽門を短兵急に攻め破らうとした。李綱は將士を督して防戰に力めた。李は敵數萬を殺した。馬忠も順天門外に金軍を惱まし、官軍の形勢が大に振つた。そこで又もや和を講することを考へて、鄭望之等を使として金軍に赴かしめた。

使者は金の將軍斡離不に見えていつた——。

『上皇の朝の事は皆過去の話として切捨てるとして、今上は新に金と誓書を交換し、萬世に好誼を繼げたい、その爲に親王宰相などの責任ある人を遣はして協議せしむる』

斡はさういふ對等の談判に應ずることは出來ない。答へしめていふには、

講和條件として慰勞金

『都を陷いれるのは瞬く間である、それだのに敢て占領を急がないでゐるのは、宋の天子が新に立つたといふから、宋の趙氏の祀が絶えないだけにはして上げたいからの事である。今和を議するならば、金兵の慰勞として金で五百萬兩、銀で五千萬兩、牛馬を萬匹、反物百萬匹を提供した上に、金の天子を「伯父」として敬ひ、元の遼の燕山の住民で漢へ逃げ込んだ者を元の土地へ還し、中出太原河間の地を金に割讓し、宰相親王を人質として贈るなら和睦の相談もしよう』

人質の皇第を贈ものと疑ふ

宋の朝廷ではこの苛重な條件でも肯く外は無いと思つた。皇弟康王を正使として赴かせる事にした。李綱は固くその不可なるを爭つたが用ひられなかつた。康王は金軍の陣營中に數月の間留つてゐた。

金の太子が康王と共に弓を引いた。その時康王は三たび射て皆箭に中て、三本の矢が一本に長くつながつた。太子はこの人質の康王といつてゐるのは、眞の親王ではあるまい、深宮に育つた人が斯くまで武技に精通してゐるとは思へない。屹度武臣の子か何かを親王と僞つて送つたのであらうと思つたから、斡離不と相談して人質取換を言ひ出した。その爲に肅王が代つて金に人質となり、康王は免れて南へ歸ることが出來た。

五、勤王の軍到る

金は孤軍深く敵地に入れり

この時种師道、姚平仲その他勤王の諸諸將が兵を率ゐて來て、二十萬からの大軍になつたので、京師では人心少しく安んじた。欽宗帝は、勤王の軍が來ると聞いて、非常に喜ばれ、安上門を開き李綱に命じて諸軍を勞ひ迎へしめられた。

この時は既に屈辱を忍んで、金との和議が決せられた後だつたので、帝は諸將に時局に就いての意見を徵された。种師道は、

『女眞(金)は兵を用ひる法を知らないと見えまする。續く兵も無いのに孤軍深く敵地へ侵入して、生きて歸られるものとでも思つてゐるのでございませう』と奏した。帝は、

『いや、最早や和を講じたのだ』

『私どもは軍旅の事を以て陛下に仕へてゐるものでございます、戰爭以外の事は更に存しません事で……』と言ひ放つた。帝は彼に同知樞密院事といふ官を與へられた。

金の方では宋に對して和議を許したが、莫大の金銀を要求して置いたのに、宋からは容

償金の無理算段

易に納めないので、嚴重に督促した。宋では困つてしまつて、取り敢へず在京の官吏といはず、軍人といはず、人民といはず、凡そ金銀を藏するものは根こそげ吐き出させることにし、この命に從はない者は容赦なく斬り捨てたので、金二十餘萬兩、銀四百餘萬兩を集め得た。このために民家の蓄へといふものは一擧にして空虛になつてしまつた。然かもその額は敵の要求に比して金は五分、銀は八分にしか達してゐないのである。

威光に恐れぬ快青年

その頃梁師成はまだ京師に留つてゐた。然し大學生等の上書もあり、世論が喧しいから、遂にその罪を責めて殺して了つた。

勤王軍中の姚平仲は快男子であつた。

姚の家は代々西陲に將たるものであつた。平仲は幼にして孤兒となつたので、一族の姚古が養つて子とした。十八の年に夏人と臧底河に戰つて、夥しく敵を斬つた。宣撫の童貫が召し出して談話を交はして見た。貫の方では姚がこの引見を光榮として自分に諂ふだらうくらゐには考へてゐた。ところが姚は別に有難がりもせず、異見があればどし〳〵述べて、少しも屈從する風がなかつた。童貫はこれで機嫌を惡くし、姚が戰功を賞しなかつた。方臘が亂を起した時も、童貫は好まぬながら、その武勇に服して軍に從はしめた。亂平らぎて諸將の功を論ずる際、姚は拔群の功があつたが、敢て推賞を願はなかつた。そして童貫にいつた。

『私は恩賞を頂きたいとは存じません。たゞ一度天子に拜謁を願ひたいと存じます』

策洩れて奇功成らず

この言で益々童貫に嫌はれるやうになつた。王淵劉光世などの諸將は、皆拜謁を許されたが、姚のみは召されなかつた。

その頃欽宗帝は未だ東宮であつたが、姚が名は知つてゐられた。であるから、今度金の兵に都を圍まれた際、彼が勤王の兵を率ゐて馳せ參じたのを喜び、彼を福寧殿に召して謁見を許された。そして厚く賞賜の恩命を下された。彼は感激して、金軍に夜討をしかけ、斡離不を檎にし人質の康王を取戻して來たいと申し出た。然るにこの密計が洩れて姚が金軍に切り込んだ時は、早くも陣地を換へてゐたので、目的を果さなかつた。

姚平仲の養父の姚古も亦必勝の策を献じたが、李邦彥がいかなる恥を忍んでも和を講ずることにのみ努めてゐるので、それも用ひられず、李綱が献策も採用されず、遂に誓書を作つて伯大金國皇帝、姪大宋皇帝と書くやうな卑屈極まる態度になつて了つた。

姚平仲は宋の朝廷に愛想が盡き果てた。飄然一青驟に跨つて亡命してしまつた。華山

勇將の晩年

に隱棲するつもりであつたが、山淺くして人に近きを見て、更に蜀へ走つた。遂に大面山の奥深く岩窟を見つけて棲んだ。それから四五十年も經つた孝宗帝の乾道淳熙年間になつて、ぶらりと世間へ出て來た。幾年を經たかも自分では判らなくなつてゐた。紫髯鬱然として數尺の長さになつてゐた。それで歩むことの早さは奔馬のやうであつた。陸放翁は青城山の上淸宮の壁に詩を顯した。

造物困ム豪傑ヲ　意將ニ使レ有レ爲　功名未レ足レ言　或作ニ出世賢ノ
姚公勇冠レ軍ニ　百戰起ニ西陲ニ　天方ニ覆ニ中原ニ　殆非ニ一木支ニ
脫レ身五十年　世人識ルハ公誰　但驚山澤ノ間　有ニ此熊豹ノ姿ニ
我亦志ニ方外ニ　白頭未レ逢レ師　年來幸廢放セラル　倘遂與レ世辭セン
從レ公遊ニ五岳ニ　稽首餐ニ靈芝ヲ　金骨換ニ綠髓ト　欻然松杪ヲ飛フ

これでは全く仙人扱ひされたものと見られる。

六、奸臣の末路

金の軍は汴京を圍むこと凡そ三十三日で圍を解いて歸つた。

中山、太原、河間の三鎭割讓の詔書と、人質として康王の代りに肅王を得たから、莫大な償金は容易に要求額を拂ひ得ないのを見越して、そのまゝにて金軍は歸ることゝなつたのである。その時种師道は黃河のほとりにその金軍に一擊を加へたいと申出た。李綱は兵を以て金軍を護送しようと申出た。そこで姚古等に十餘萬の兵を與へ、數道から竝び進ませ、若し好機會があつて擊つ可しと見たら協力して擊たしむる事とした。然し平和論一點張りの李邦彥は、此處で主戰論の諸將に戰功を立てられては困るので、密かに帝に奏して、

敵を退路に擊たん

『我が國は新たに金國と和を講じたばかりのところでございまするのに、諸將が金軍の退路を擊つて和議を破らうとしますのは、誠に不都合の事だと存じまする』といつて、大旗を河東河北兩岸に立てさせた。その旗には、

『擅ま丶に兵を用ふる者は勅によりて軍法に照すべし』といふ文字が認めてあつた。諸將はこれを見て氣を腐らして了つた。

諸將の意氣沮喪

さしも權力を振つた蔡京も、上皇と共に南京に逃げてゐたが、寄る年波と積り積つた

元兇の憤死

多年の罪障とに、遂に運命に見放されて秘書監に貶せられ、更に衡州に幽せられたが、それでも世間は未だ承知しなかつた。正言（官名）の翟某は帝に奏して、

『賊臣蔡京が姦邪の術策は、甚だ王莽に類してゐます。天下の姦邪の士を集めて腹心とし、遂に盗賊は蜂起しまするし、夷狄は中國を犯しますし、ために宗廟の神靈を震駭し奉りまする』と述べた。遂に蔡京は遠く廣東の儋州へ流さるゝことになつた。その子孫等も悉くそれ〳〵處分された。蔡京は潭州までいつて、憂憤の極死んで了つた。年は八十であつた。彼が潭州にあつて作つた小詞に、

八十衰年初謝　三千里外無レ家　孤行骨肉各天涯　遙望二神京一泣下。
金殿五曾拜レ相　玉堂十度宣レ麻　追思往日謾繁華　到二此番一成二夢話一。

宣麻とは麻紙に勅宣を認める意味で、大臣に任ぜらるゝ事である。此番は此のたびの意。

蔡攸も蔡脩も誅せられた。童貫は初め池州に貶せられたが、朝廷は彼が國家を誤れる罪十個條を數へて、南雄州（廣東）に追ひ、其處で誅せられ、その首は都へ送られた。

その年三月に李綱が南京へいつて上皇に說き、京師へ還幸を乞うた。これは今上と父子の間でありながら、離れてゐられては何彼と誤解が生じ、事を好む者は流言を放つたりするので、同じ都に居られたが安全だといふのであつた。四月徽宗は都へ還幸された。

上皇都に還幸す

五月种師中と姚古とは軍を進めて太原に金軍と戰つた、師中は戰死し古も敗走した。敗因をなした焦安節は誅せられ、敗走した姚古は廣州へ貶せられ、戰死した師中は少師と贈官され諡號をも賜つた。

六月には彗星が出たり、天文上の異變があつた。七月にも大きな彗星が東北の空に現れ、その尾は北に帝座、文昌（星の名）を掃くやうになつてゐた。大臣李邦彥等は、

邪說に惑ふ勿れ

『これは東北の夷狄（金）が將に衰へんとする兆でございまして、中國の憂となる事ではございませんぬ』と奏した。然し諫むる者があつて、

『天象に異變がある時は愼み畏れなければいけませぬ。天子は德を修めて以て天意に應じなければなりませぬ。媚ぴ諛らつた邪說にお惑ひになつてはいけませぬ』といつたので、詔を下して民間の疾苦十七箇條を除くことゝした。

統制の張師正が河北で金軍と遭遇戰をやつて、潰走して大名府へ來た。宣撫使の李彌大は敗將張を斬つて軍紀を正した。然るに張の部下だつた軍隊は、その爲に頗る不安を

感じてゐるところへ、童貫が誅せられて、部下だつた李福がやつて來て、この不安を抱いてる連中を唆かし叛を謀つた。地方を掠奪して次第に勢を增して來た。李彌大は韓世忠をしてこの賊を討たせた。世忠は李福を捕へて斬つた。そしてその殘黨の中へ單騎駈け入つて、

叛賊を說いて歸服せしむ

『お互に皆西人ではないか、平時は唯草賊を殺すことはするが、自ら賊となることは無いではないか、官では私を遣はされて皆を招かれるのだ、おとなしく降參すれば、罪は一切問はないことにしてやるが何うだ』と說いた。一同は忽ち歸順して了つた。

十月になつて主戰論者の李綱は、遂に失脚して揚州へやられた。金の斡離不は眞定府を陷いれた。朝廷ではそれでも平和論者が時を得て、張叔夜や錢蓋等が西南勤王の兵を率ゐて都へ上らうとするのを差止めたりしてゐた。それはやがて四方の勤王軍を阻止する事になつて、無力な宋の朝廷は愈益無力となるばかりであつた。

飽くまで卑屈な朝廷

十一月には康王を金軍に使として、土地の割讓やら、金の帝に衣冠を贈つたり、皇叔と尊び、例の尊號を十八字までも奉らうとしたりした。王は途中で滋州の宗汝霖が諫めたゝめに行くのを止めたが、行つたら歸れなかつたに相違ないといはれてゐた。

管理者の無い大砲が五百門

勤王軍を拒んで以來、都の守備は頗る手薄になつてゐた。五百餘門の大砲が郊外に置いてあつたが、誰もそれを管理する者がない。兵部では、朝廷に屬して樞密院が保管すべきだと主張し、樞密院では、軍器監に屬するといひ、或は駕部（車などの官廳）が保管すべきだといひ、駕部では、あれは庫部の所轄だといひ、互に他に押つけやうとするので、その五百の砲は宋朝の役には立たず、金人の用に立てるために、强ひて捨てられたやうなものであつた。

京師遂に攻め落さる

七、帝都の陷落

欽宗帝は親書を以て張叔夜を招き、守護を賴まれたが、張が金軍に對して試みた夜襲も失敗した。金の將の粘罕は又京師に迫つた。今度は天子親ら城下に出て盟をせよと言ひ出した。報謝使などを出したが受付けもしなかつた。圍まれてから凡そ四十日で、十一月二十五日に汴京は遂に守ることが出來なくなつて了つた。

城内の卒に郭京といふ者がゐた。遁甲法を用ふると自稱して、粘罕（ねばん）、斡離不（ありぶ）等を生擒

にして來ると言ひ出した。それを尊信する者が多くあつた。又劉孝といふ者が北斗神兵だの天關大將だのといふ、人を驚かす名を附けた仲間を持つてゐて、郭京が法螺吹くのを眞似てゐた。その日は郭京が大に功名を見せるつもりで、宣化門を開いて斫つて出た。然しその法螺だつたことは忽ち露はれて、郭京は金軍の堂々たる陣勢に抗すべくもなく命辛々に逃げ延びた。裏陽まで逃げて行つて、其處で人數を集めて亂を起しさうだつたので、早速捕へられて誅せられた。

官軍の惡戰苦鬪

一方汴京（べんけい）では、門を開いて斫つて出た一隊が散々の敗北をしたので、忽ち敵に城壁を乘取られてしまつた。姚仲友は亂軍の間に殺され、何彥慶も城上に戰死し、張叔夜は四晝夜に亘る奮戰に、敵の大將を二人まで斬つて落したが、尙も身に重創を受けながら父子力戰した。その部下も惡戰苦鬪を續けた。

欽宗帝は、京師の外廓が旣に敵に乘取られたと聞いて、聲を放つて慟哭された。『神師道が言を用ひなかつたゝめに、到頭斯ういふ事になつた』と慨かれた。この前に金軍が一旦圍を解いて歸つた時、神は金軍が黃河を渡るところで痛擊を加へようと申出たのであつたが、和議にのみ心を牽かれて取上げなかつた。そして神は聲を勵まして、

二帝に投降を迫る

必ず後悔するといつたのであるが、今日果してその言の如くなつたので、帝も彼が獻策を用ゐなかつた事を悔いられたのである。

二十五日に都が陷つて金の兵は亂入した。二十六日に金の粘罕は、天子と上皇と共に金の陣營へ來て、和睦と割地とを議せられたいと要求した。十二月に入り各官省の帳簿とか表とかいふやうな文書類を、全部金軍に引渡した。九日には天子の鹵簿とか樂器とかいふやうなものまで運び去つた。宮廷の儀制は何一つ殘らず掻攫はれて了つた形となつた。

女子一千五百人を要求

汴京は酷い雪であつた。米は一斗三千錢といふ高價になつた。飢餓に苦しむ貧民は街路一杯に仆れ、死屍地を覆ふ程だつた。それでも未だ若干の金滿家があるので、金の兵はさういふ家に掠奪を恣にし、壯者は殺し婦女は拉致した。二十一日には京師の中から十八以下の女子一千五百人を選んで金の後宮に納るべしとの要求を出した。官では止むを得ず、洛中を片端から驅り集めにかゝつた。その兩親などが泣き叫ぶ聲は天地に響く程だつた。然かも選まれた娘たちは、金の帝室に送らるゝ前に、金の兵士どもに散々に凌辱された。

あくれば靖康二年の元旦、金の粘罕は人を遣はして城内に年賀を申入れた。無論禮といふべきものではなかつた。十一日又帝に親ら出て事を議すべきを求めた。二十一日に金から人をやつて城内の辻々に掲示をさせた。

『元帥、北國皇帝の聖旨を奉し、この度遠く兵馬を率ゐて來り、事理を議するところ兩國既に和を通じたり、就ては金一百二十萬兩、銀一百五十萬兩を得ることを要す』

徹底的掠奪

斯くて金人は開封府尹の何栗を執へ、町々の民家を片端から捜索させ、金銀は勿論、櫛笄その他苟も金銀を用ひたものは、一片も殘さず沒收した。若し隱匿したのが判れば忽ち軍法によつて殺害した。ために無辜の民も多く死んだ。

二十九日又も天子親ら城を出てゝ議せんことを求め、金の朝廷から來た國書を屆けて來た。それには、今既に京師が陷つたのだから、二帝(徽宗と欽宗)は位に居るべきでない。一族の中から一人を選んで主に立てよ、皇帝の號を止めて宋王と稱し、上皇を天水郡王に、今上を天水郡公として、皇城の外に住居を與へて住ませる、といふやうな事が書いてあつた。金の使は又口上で、

『金の元帥は再三陛下に對して、城外に出て共に事を議することを求めたのに、陛下は今以てお出でがない。此の度金の皇帝の手詔が來たのですが、陛下は何とお考へですか』と詰め寄つた。欽宗帝は、

『いづれ篤と相談した上で返事をするから、卿は暫く退出して貰ひたい』といはれた。

骨を刈る惡罵も理あり

金の使は嘲笑つた。

『何しろ事は迫つてゐますよ、此方の言にお從ひになればお仕合せでせうし、お逆ひになれば必ず禍が來ることは明白ではありませんか。元來が陛下は臣下の爲に誤られて、今日の狀態を招かれたではありませんか、また此の上にもその臣下どもと相談されたところが、益々禍を大きくするだけでせう。金の皇帝は至つて寛慈正直で、こゝの天子父子のやうに反覆無狀な人とは較べられもしない』と思ふさま毒ついて、拜もせずに傲然と帝の前を退いた。恐らく一國の皇帝が他國の使臣に斯くも輕侮せられた例は少からう。

最後の通諜

二月二日粘罕の部將の郎遊麗といふものが、七百騎を率ゐて宮城の内門へ乘りつけ、

『兩國の利害について國王に目通りしたい』と申入れた。帝は門に登つて彼を見られた

『元帥は拙者を使として國王へ申入れる。過日我が北國皇帝の聖旨を傳へ、共に事を議したいと告げたのに、今日に至るも何の返事も參らない。かくては元帥は北國皇帝へ奉答

すべき詞がござらぬ。如何致さるゝ所存なのか、二日以内に確と返答を承らぬに於ては如何なる禍が及ばうも測られませぬぞ』と遊麗は聲荒らげて喚はつた。帝は答へて。

『その事なら既に當方では指揮を下して、今月の十一日に城を出て元帥に會見することに定めてある。いづれ會見の上で萬事元帥と議するであらうから、その旨を傳へられい』

『若しその十一日に出られぬに於ては、元帥は恐らく二度と協議しようなどゝ生溫い事は申しませぬぞ』と遊麗は氣味惡く脅した末、口調を改めていつた。

珍らしい酒代れだり

『拙者は玆に七百の人馬を控へてござるが、少々この者どもを犒つてやつて貰ひたい、一人當り金一兩で宜うござるによつて、これは陛下から給與して貰ひたいものぢや』

その時宮中には一文の金もなかつた。已むを得ず金環などを捜し集めて、辛うじて八百兩を彼に與へられた。有難うとも言はないで、それを受取ると一隊は歸つて行つた。

八、帝自ら敵陣に降る

約の如く十一日に欽宗帝は金の陣營に行く爲に城を出られた。數萬の百姓は車駕を押留めて、啼き叫びながら口々に喚はつた。

萬民の悲しき絶叫

『お出ましになつてはどんな事になるか知れません』

この有樣には帝も涙を溢された。京城の巡檢范瓊は、斯くてはならじと劍を按じ、

『天子は兩國の生靈をお救ひになる御心で、親ら己を屈して和を求めさせられ、今敵陣へ行幸なされるのぢや、旦にお出ましになつて夕方にはお歸りになるのぢや、若し御輦を停めてお引留めしたら、お前たちも生きてゐられなくなるのぢやぞ』と怒鳴りつけた。

天子を犧牲にして安逸を貪らんとするが如きこの言は、却つて痛く人民を激昂させた。怒號惡罵四方に起つて、石や瓦は范を目がけて雨の如く飛んだ。范は轅に取縋る者どもを數人斬り伏せた。車駕遂に城を出て金の軍門に着いた。

帝は陣中の一小室へ案内された。軍吏が出ての挨拶は、

『元帥はまだお寢みになつてゐますから、玆でお待ちなさい』といふのであつた。北方の夷狄と目せられてゐた金の陣中へ來て、中國の天子が、極端に侮蔑と冷遇とを受ける

極端な侮辱の第一幕

その第一幕が開かれたのである。

良少時待たせられた末に、賤しい召仕がやつて來て、

『元帥は王を待つてゐられます』といふから帝は奥へ進まれた。堂の階下へ行かれると上から粘罕が下りて來て、帝の手を執り、

『私は遠酋の長で、中國の禮儀のむづかしい事は更に存じないので、お氣に障へられな』と共に階を上り、左右に坐を命じた。帝を西向きに、粘は天子の如く南面して坐した。

何の不可をかいはん

ところが時經つても何の談話も交へない。左右には怖ろしげな者どもが大刀利刄を提げて立つてゐる。帝の左右には僅に二人の從者が侍してゐるだけであつた。

粘は金の詔書を取出させて、その意味を左右の者に命じて帝に傳へさせた。帝は、

『苟も生民に利あるならば、命のまゝに從ひます、兵革を止むることが出來れば、何を措いても不可は唱へません』と仰せられた。粘は又も左右に命じて、

『さう覺悟がつけば、暫く幕營へ歸つて、金の皇帝の聖旨をお待ちあれ』と言はしめ、武士に命じて帝を導いて幕へ入らしめた。そこでは酒食が出たが、帝はそれを食べる氣はしなかつた。長い事そこに置かれた帝は、

『元帥へ取次いでもらひたい、議すべき事は既に元帥の言ふがまゝに從つたのだから、外にはもう用は無い筈だし、宮城へ歸らしてもらひたいものだ』と仰せられた。

帝囚はれたるを悟る

『元帥は表を造つて皇帝の同意を求められるのでせう。明日早く行かれても晩くはありますまい』といふのが答であつた。帝は強ひて言ふことも出來ず、口を緘られた。

左右の者が又酒食を勸めた。のみならず伶人をして奏樂をさせた。帝は萬感胸に迫つて物を食べることも出來なかつた。夜が更けるに從つて、陣中の寒さは殊に酷しかつた。帳などもあるにはあつても、風に煽られて、寛いで坐せらるゝ所もなかつた。卓に倚れて痿れてゐられるのを見て、左右の者は頻りに勵ましもしたが、帝にはそれも涙を誘ふ種であつた。

夜も更けて五更の頃、俄に人が來て帝を導いて又堂に昇つた。其處には卓が一つあつて香燭が置いてあつた。粘罕は左右をして作成した表を帝に示させた。その文面は、

『臣姪南宋國王趙某、今叔北國皇帝の聖旨を受け、某と父と共に大位を退き、別に宗族中の賢者を選みて君とすべし云々』といふ欽宗から奉呈する降表であつた。そしてその表には帝の親署を求めた。帝はその命令的の要求を拒まるべき場合で無いので、涙を呑んで親署された。

降表に親署を命ず

その表が封ぜられた時、一騎馬武者が帳下に馬を飛ばして來た。

寒に堪へず酒を食る

それを見ると粘は左右に命じて椅子を出させ、自分は西向きに帝は東向きに着座した暫くすると高貴らしい紫衣の人が來た。その人も西向きに着座した。粘は人をして帝に紫衣の人は金の皇后の弟で、聖旨を傳へに當地に來られ、陛下との議事を催促されるのだと敎へさせた。帝は唯々として聞いて居られた。

席上へ酒が出た。夜更の事ではあり、寒さが身に浸むので、帝も堪へがたく續けさまに二杯を乾された。すると紫衣の人は、

『陛下は暫く此處へお留りなさい、後ほど北國皇帝の指揮を奉じて陛下とお話しませう』と挨拶をして、帝を元の幕營へ導かせた。帝が振回つて見られると、粘と紫衣の人とは又酒を飲んでゐた。帝は寒い營中へ入られた。未だ夜は明けなかつたが、寒くて眠る事も出來なかつた。左右にゐた綠衣の者が帝に語つて、

『先刻の紫衣のお方は皇后さまの御弟で、今十七軍都統です。位は粘罕の上です、今度當地へ來られたのは、汴京から後宮の女子一千五百人を選ばれる爲で、二三日すると北へ歸られます』と告げた。

暫くたつて夜が明けた、そして俄に報告があつて、

帝を愚弄して酒の肴にする

『統軍がお見えになつてお會ひになります』といふから、帝はこれを迎へられた。紫衣の人は悠然と入つて來た。帝は近く坐せられたが、紫衣の人の言葉は全く解せられなかつた。それでも帝は鄭重に禮を盡された。紫衣の人は傲然と左右の者に酒を命じ、大杯四五盞を立てつゞけに飲んだ。帝も一二杯を乾された。そして紫衣の統軍は帝に向ひて

『心配されな』と言ひ捨て一揖して出て行つた。

帝は陣中に留まる日數が累なるので、歸りたいと思はれたが、粘罕は、欽宗の降表に對する金の皇帝からの沙汰を待つてお歸し申すとのみいつて許さなかつた。それから粘は人を遣つて新たに宋の宗室趙氏の中から君主と立つべきものを豫選させる事や、京師の寺院を調べて上皇と欽宗とを入るゝ宮室を準備させる事などを、帝の面前でそれ〴〵命令した。帝は座を起つて粘に賴まれた。

『お指圖は一々從ひます、元帥の御厚意によりて、一度城内へ歸り父の安否を見て、私の無事をも知らせ、人の子としての孝道を盡さして貰ひたい』

粘は首肯いてゐた。左右に命じて酒を進めしめた。帳下に伶人が出て樂を奏し歌を唱へ、粘罕を崇めて大公伊尹に喩へた。粘は喜ばない貌をして、

金將諛辭を喜ばず

『大公伊尹は古の聖人だ、俺にはその萬分一も眞似は出來ないよ、よく人を見ていへ』と云つた。帝は、

『この樂人たちは我が宋朝の人々ではないか、此の場合何といふ事か』と仰せられた。

粘は笑つて奏樂を止めさせて、

『明日は陛下を京城へお歸ししします、五六日したら北國皇帝の詔書が到着しませうから、その時は又いざこざなしに、陛下がこの軍前へお出にならなければいけませんぞ』と云つた。

帝父子相抱いて泣く

九、帝后皆拉致さる

十七日の早朝に、帝は幕營を出て都へ歸ることを許された。

城中はその間に金人に剽掠されて、小民は夜となく晝となく號泣してゐた。帝は上皇に謁して、相抱いて涕泣された。

『誠に私は不孝不道の者でございます。上は君父の憂を殘し、下は百姓の災となり、身を殺しても責を塞ぐことは出來ません。今北兵に迫られて位を退き、新に賢良を選んで君としなければなりませぬが、私は上皇と吉凶共にお供を致します。後には弟の康王を立てることに致しましたら、祖先の社稷を失はないで宜しからうと存じます』と帝が述べられると、側に侍つてゐた韋妃（康王の母）は、

『今上皇と今上とが康王をお立てになれば、王は必ず中興の業を遂げられませう。然し地方々々の外鎭に詔を下して召され、四方の兵が京師に來ましたら、金人は狡猾ですから、きつと後の君たる方をも承認せず、兩陛下も京師にお留りになることを許しますまい。陛下はよく〳〵お考にならねばなりません』と云つた。事實は正にその通りになつた。

韋妃の豫想的中

三月四日になつて金の粘罕は上皇と帝とに使を遣はした。そして、

『今日北國皇帝より今後の處置に就き申達するところあるべし、車駕軍前に詣りて指揮を俟たれよ』と申渡した。上皇も帝も今更のやうに怖ろしく思はれた。正午頃に又も使で、上皇と帝と同行の上に軍前に至りて事を議せよと催促して來た。夕方までに度々使が來た。若し上皇が未だ城を出られぬならば、帝だけ先づ出るも妨げずともいつて來た。

金は宋の請を容れず

翌五日になつて、帝は今や逃げも隱れも出來ないから、金の陣營へ赴かれた。帝を帳下に立たしめ、粘は坐しながら對面して、

『北國皇帝は汝が請に從はず、別に趙氏以外の者を立てゝ王とされるのだ』と宣告した。その詔を帝に見せしめたが、遠く隔つてゐて、帝にはその詔書の文句は讀めなかつた。

帝はあばら屋の一室へ押籠められた。武器を携へた者が見張りをしてゐる。朝から食事もしてゐられないので、今更涙が溢るゝのみであつた。暮頃になつて番奴が一皿の肉と一瓶の酒とを運んで來て、

燈もない室の寒さに震ふ

『これを食へ』といつた。帝は泣きながら、

『父母にも逢へないのか』と仰せられると、番奴は嘲笑つて、

『なアに、是から朝夕逢へらアね』といつた。

その夜帝を入れた室には臥床もなかつた。木の腰掛が二つあるだけであつた。燈火の用意もなかつた。窓の外には兵士どもの罵り騷ぐ聲が絶えなかつた。寒氣に震へて帝は夜が明けるまで一睡もされなかつた。夜が明ける頃、誰かゞ帝を呼んで、

『上皇が來られた』といふから、帝は驚いて其方を見られると、數十人の荒くれ武士が

帝王の貧しい焚火

義に死するもの唯一人

上皇を引立てゝ行くのであつた。帝は駈け出さうとされたが、左右の者は放さなかつた。

それから十五日までの間に、皇族后妃諸王たちも續々陣營へ引かれた。上皇と帝とは同じ所でなく引離して置かれ、后妃諸王も皆互に逢ふ事を許されなかつた。たゞ上皇の鄭后と帝の朱后とは各附き添ふ事を許され、十六日に至つて二帝は同居を許された。時未だ寒氣烈しいのに、夜は竹簀の子の上に寢るので、到底眠らるべくもない。侍衞の者どもが茅や黍がらを拾ひ集め、焚火をして二帝をあたらせた。

夜が明けると粘罕は左右に命じて、二帝に迫り御衣を脱がしめ、卑賤の者が着る青色の衣に易へさせた。鄭朱の二后にも服を易へさせた。吏部侍郎の李若水はこの時まで帝に扈從してゐた。そして金の將士を惡罵してやまないので、遂に舌を切つて慘殺された。粘罕は密かに彼の死を壯なりとしたのか、左右を顧みていつた。

『遼の亡びる時は節に死するの臣が甚だ多かつたが、今宋朝には唯この李侍郎一人しか義を守る者はないのか』

李を葬る時、その衣の襟の中から詩が見出された。

胡馬南來久不歸　山河殘破一身微

功名誤レ我等ニ雲ノ過ルニ　歳月驚レ人還タ雪飛ブ
毎事恐貽ニ千古笑一　此身甘與ニ衆人一違
艱難重有ニ君親念一　血涙斑斑滿ニ客衣一

かくて宋の上皇今上をはじめ皇后諸王は盡く金の青城の陣中に拉致されてしまつた。北宋は全く亡びた。

註それから百年の後、今度は金が汴京に都してゐて、同じく北から興つて來た元の軍に圍まれ、場所もあらうに、同じ青城で后妃諸王を元に引渡して、女眞以來百八十年に及ぶ金の朝廷は全く滅亡したのであつた。

十、悲風慘雨北への旅（上）

金の陣中に囚はれた二帝と二后は、毎日一食一飲を給せらるゝのみの、世にもみじめな境遇に落ちてしまつた。

粘罕は今まで大宰だつた張邦昌を立てゝ君主とし、國號を楚とつけた。張は喜んで位に卽いたが、時雍、范瓊等の佞物が附屬するだけで、更に人望がなかつた。だから百官を任ずるにも皆「權」の字を附け、權知樞密院事とか權領中書省とかいふやうに、假任命といふ體裁にした。自ら朕といはず予と稱し、手詔を手書といひ、年號の改元もしなかつた。それでも彼と同じ昌の字を諱につけてゐる人々が急に改名したり、或は婢に昌奴と命名し、來客がある度毎にわざ〳〵呼出しては、散々に驅使して溜飲を下げる者もあるといふ風であつた。

更に人望なき新君

二帝二后以下一同は北の方金の燕京へ拉し去らるゝことになつた。それは金の皇帝に對して入朝の禮を執らしむるものであつた。

三月十八日早天に馬を牽き出して帝と二后とを乘らしめた。太后と皇后とは共に馬に跨つた事などはないので、役人が抱いて相乘することにした。楚王となつた張邦昌は百官を率ゐて二帝を南薰門に見送つた。路傍にこれを見る者皆涙を以て送つた。

百姓がお盆に飯を盛つて二帝に奉つた。二帝二后はこれを受け、分けて食べられたがぼそ〳〵として喉へ通らないものであつた。一行は警護の武士等五百人からあつたが、皆同じ青袍を着てゐるので、その中から上皇と帝とを見分けることは出來なくなつてゐ

喉を通らぬ飯を頒つ

るのに、この老人がよく見分けたので、理由を尋ねると、

『お顔色を見れば違ひまさア』と答へた。

帝はその老人に。

『母上が胸が痛むと仰しやるが、何か飲み薬はあるまいか』と仰せられた。

『宜しうございます、少しばかり鹽酥を持つて居りますから、唯今溫めて差上げませう』

と喜んでその用意をしてゐると、警護の武士はそれをもどかしがつて、さつさと一行を促がし立てゝ去つてしまつた。

騎馬隊の長をしてゐる者は姓は幽西、名は骨碌都といふものであつたが、皇后朱氏に懸想して、途中で數次戯言をいひかけた。二十九日に一行は黃河を渡るところまで來た。對岸から船が來て、その中には紫衣の人が乘つてゐた。その人は大聲に骨碌都を促がして、

『北國皇帝には四月半ばに燕京へ參りますと御約束申してあるのに、今日は三月も末日になつたではないか、急がなくてはいけない』

斯ういひながら骨碌都を見ると、その皇后を見る目色や笑ひかける容子などが唯事で

恣に皇后に戯る

顏を洗はざる四十日

ないのが直ぐ解つた。紫衣の人は赫怒した。刀を拔いて骨碌都を執へ、

『おのれは下賤から起つてお引立を蒙つてる身分でありながら、婦人に戯れてこの大事の道中に暇取らすとは不埒千萬な双ぢや』と一刀の下に斫り殺して河中に投じた。

四月十四日信安といふ所に着いた。二帝二后共に都を出でられてから、今日まで約四十日が間、一度もお顔を洗はれなかつた。此處で野川の水の澄んだのがあつたから、四人各水を掬んで顏を洗はれた。そして互に顏を見合せて、情無さに胸が塞がるばかりであつた。

土地の人から肉と酒とを一行の指揮をする澤利といふ者に贈つて來た。澤利は刀を拔いて肉を切り、大口開いて貪り食ひ、五七杯の酒を續けさまに煽りつけた。その食ひ殘り飲み殘りを帝に與へて、

『これを食へ、これから先では食物は無いぞ』といつた。朱后へは、

『さア此一きれの良い肉はお前のだ』と與へた。

其處へ縣知事が澤利に逢ひに來た。これ亦酒食羊肉などを齎して澤利と同座小宴を催した。時移ると澤利は醉つて了つた。そして朱后に命じて歌を謠つて興を添へよと迫つ

た。后はその意に從はなかつた。澤利は怒つて、

『お前たち四人(二帝二后)の命は俺の掌中にあるのぢやぞ、無禮を働いては爲になるまい』と罵つた。一同身が縮まる思ひをされた。后は涙ながらに立つて、盃を捧げながら歌はれた。

皇后を驅つて酌婦とす

幼富貴兮厭綺羅裳　長入宮兮奉尊觴
今委頓兮流落異鄉　嗟造物兮速死爲强

歌ひ畢つて澤利に酒を勸められた。澤利は心地よげに笑つて、

『文句が好い、も一つ歌つて知縣に酒を勸めるのだ』と命じた。后は更に、

昔居天上兮珠宮天闕　今日草莽兮事何可說
屈身辱志兮恨何可雪　誓速歸泉下兮此愁可絕

と歌ひながら知縣に盃を勸められた。

澤利は后の衣を捉へて、

『さア、此處に坐つて、一緒に飲むんだ』と引き寄せた。后はすり脫けやうと焦られたが、力及ばず却つて利澤に毆られて了つた。知縣は見かねたか、それを宥めたが、盃を后の手に置いて、

『も一つ將軍へお勸めなさい』といつた。

皇后自殺を企つ

『妾にはもうお酌は出來ません、殺された方がましです、死んだからとて少しも恨みには思ひません』と言ひ捨てゝ、后は庭井戸に身を投げようとされた。一同驚いてそれを抱きとめた。知縣も氣の毒になつて、

『將軍はこの人たちにさう迫られては宜しくありますまい。北國皇帝は此の四人の人が生きて入朝するのを待つおいでの筈ではありませんか、途中で死なれては將軍の落度になりませう、お役向が大事ですから』と嗜めた。澤利も醉に任せて責任を忘れてゐた時なので、成程と思つたか酒宴をやめて了つた。

十一、悲風慘雨北への旅(下)

一行は前途を急いだ。

或る村では宰領の澤利に酒食を捧げると同じく、帝の一行にも馳走を呈した。又或る

悲しく懐かしき邂逅

賤卒に呼捨てらる

所で、同じく地方官が出て酒や料理を饗した折、知縣が帝に謁して、

『實は私の妻が肅王のお召使だつたのでございます、皇后様にお目にかゝりたいと申してゐますから、唯今召つれます』といつて若い女を引つれて來た。その女は太后や皇后の見すぼらしい有様を見て先づ涙を流した。

『私は肅王のお召使の珍々でございます。』といつて太后には「婆々」（大御前様といふ程の言葉）と

いひ、皇后には「姆々」（お姉さまといふ程の意）と懐かしく呼ぶのであつた。そして身の上を語つた。

『先頃名も知らない金の部將に捕へられまして、この知縣が兄弟と申しますので、到頭媾にされました。さうなつてから未だ六日にしかなりません』と訴へた。さういつて話してるところへ知縣が來て、その女は引立てられた。

又數日の旅が續いた。そして或る官廳に着いた。その役所は全く新築で、門には武裝した番卒が列んでゐた。それ等が口傳へに、

『趙某父子を召すんだ』と命令を傳へた。二帝は門内へ入つて暫く庭下に立つてゐられた。其處には紫衣の高官が幾人もゐた。そこで堂上に坐してる人々に對し、帝は北面して（天子は南面す）再拜された。

遂帝も幽囚三年

『あの二人は海濱王に面會させて、それから明日城中へ入れるんだ』と命令されてゐた直接でなく間接に命令を傳へ或は脅かすのが金のやり方であつた。帝を引出して置いては他に命ずるところを聞かしむるのであつた。又別の庭中に帝を導き入れた。其處には胡服の人が一人ゐた。その人は何やら様子を伺ふらしく思はれた。左右の者がその人を指して帝に教へた。

『あの人は契丹（亡びた遂）の耶律延禧なんだ。お前さんと罪狀は同じもんだ。まだ公事が定まらないからあゝしてゐるのだよ』

さう教へて置いて又別の一小室へ帝を案内した。暫く其處へゐられると、先刻の延禧がは入つて來た。二帝に一揖して身の上を話しはじめた。

『私の契丹は大宋と南北に國を立てゝ二百餘年の間、つひぞ和好を絶つことなく過してゐましたのに、奸臣に誤られてお互に斯ういふ事になつて了ひました、誠に殘念な事です。あなた方は多分明後日あたり赦免の沙汰がありさうです、私は早や三年の間斯うしてゐるんですよ、いつになつたら埒が明きますか』

眞珠を産む珍品

稀代の香木

『何がさう引掛りになつてゐるのです』

『私の祖皇帝の時から二つの寶がありましたのですが、それが金に責め滅されます時に行方不明になりまして、今金の皇帝から、それを出せといはれて、その爲に三年も監禁されてゐるのです。その寶物と申しますのは、一つは百穴珠と申しまして、凡そ雛卵くらゐの珠で、表面に百の穴がありました、その穴の中にはいつでも一粒づゝの眞珠が入つてゐるのです。それを滿月の宵に取り出して月光を映すと、その穴中の眞珠がホロリと落ちるのです。そしてあとには又眞珠が出來るので、毎月百粒づゝの眞珠が取れる譯です。今一つの品は通香木と申すもので、長さ一尺ばかりですが、熱湯に漬して、その汁を取り衣服や草木花卉や、或は室内などに撒きかけますると、年を經て香りが消えず、又奇疾に服用すれば立どころに癒えますし、若しこれを焚けば能く天神を招き降し香氣數百里に及ぶのです。この二品が發見されない爲に、私は監禁されますし、妻子一族皆散り〳〵になりました。美貌の者は富家に入り醜い者は民家に入つた事でせう』

『此處は一體何といふところでせう』

『此處は平州です、燕京まではまだ七百里ほどあります、まア御我慢なさいまし』

帝と后とに沐浴を賜ふ

二帝は其處から引出されて門を出ると、そこには二后が日向に照りつけられて泣きながら待つてゐられた。

十二、朱后先づ崩ず

又行を起して六七日、やつと燕京に着いた。此處は契丹遼の元の都である。一行は御殿へ引かれた。金の天子の御前へ出ると、命ぜられるまゝに帝も后も地に跪き再拜される外はなかつた。その左右には數百人の臣下が並んでゐて、皆口々に萬歳を唱へた。そこへ二人の役人が來て金の天子の御沙汰を傳へた。

『皇帝はお前たちを勞らはせられて、衣類を下され、沐浴をお許しになる、明日は赦免狀を見せてやる』といつて帝を引きつれて今度は宰相の役所へ行つた。

其處の堂上には一人の人が坐つてゐた。左右の者が、

『この方は銀朱孛堇相公であられるぞ』といつたから、帝は又再拜された。すると宰相も立つて答拜をした。役人が出て詔書を讀み上げた。その中には、

『趙某父子の罪を赦して庶人となす』といふ文句があつた。

又帝と上皇と二后とは宮中へ引かれて、御殿の下に北面して再拜されると、詔が傳へられて帝は天水郡侯上皇は天水郡公になされ、各々燕京に住宅を賜はるといふ事であつた。左右の者が叱るやうにして二帝二后にお禮を述べさせた。そして一同を小さい室へ引き入れた。やゝしばらくして又一同は引き出されて、燕京の元帥の邸へ行つた。元帥にも又帝は再拜された。そこを出て護衛の者にとりかこまれ、徒歩で街々を歩いて、元帥府へ入つた。そして門内の廂の陰の小屋へ入れられた。その家の中には椅子や腰掛などは一つもなく、たゞ煉瓦が三四枚あるだけだつた。

遼名ばかりの公侯に封ぜらる

その日は帝は終日地上にお辭儀ばかりさせられて、食事も與へられなかつた。たゞお〳〵と落ちつかれなかつた。二日の間に水を二杯飲まれただけであつた。皇后たちは只々泣いてゐられるばかりで、柱に頭を觸れて死なうとまでされたが、それは番人どもに押しとめられた。二十二日から三十日まで、その室に閉ぢこめられて、錠を卸した上に十餘人の監視者がついてゐた。食事は日に粗末な飯四杯と米の水四杯を與へられるだけであつた。それもあまり不味いので、喉に通らず互に顏を見合せてゐられた。

二日に水を二杯

朱后は到頭病氣になられた。冷い地の上に臥して、毎日呻吟してゐられるのを、番人どもは口きたなく罵り叱るのであつた。もとより醫療など加へるのでないから、容態は日々に悪く、五月の二日に、その冷い土の上で亡くなられた。年は二十歳であつた。

皇后地上に崩ず

帝は深く嘆かれて、番人にその旨を知らせられた。やがて下級の役人どもがやつて來て、無雜作に皇后の死骸を引き出し、黍の席にぐる〳〵と卷いて、引きずつて行つた。その不人情な取扱に、帝はいよ〳〵悲しく思はれたが、番人どもが叱るのが恐しさに聲も立て得られなかつた。

翌る三日の朝早く、帝は又元帥府へ引き出されて、父子共に安肅軍へ行つて、指揮を待つべし、明日出發との命を受けられた。

帝の流謫はじまる

四日二十人ほどの護衛がついて、元帥府を立ち出でられた。夕方になつて、やつと燕京の北門に着き、そこの捕手の溜りに滯留された。それから行を起して進まれたが、既に暑氣も加はつてゐるのに、砂漠のやうな石ころ道を歩くので、風が來る度に砂塵は霧のやうに四邊を昏くした。その上途中には飲むべき清水も乏しかつた。

護衛の隊長は阿計替といふものであつたが、やゝ人情のある男で、帝の境遇を氣の毒

に思ひ、何彼と手心を加へてゐた。

『時候が悪いんですから、食物を食べ過ぎては病氣になりますよ、この邊には藥などはありませんからね』といつて、水がある處へ來さへすれば、必ず帝に與へる事にした。又配下の者どもを戒めて、口ぎたなく叱らぬやうに氣をつけさせた。日盛りの間は、木蔭などで休むやうにもした。

地獄の佛

その時帝は二十二、上皇は五十六であつたが、共に痩せ衰へて、埃に塗れ日光に曝され、尊い身分の御方といふ面影は少しもなかつた。もしこの道中に阿計替が附いてゐなかつたら六月の極暑中に野仆れ死をされたに相違なかつた。

十三、動亂に災せらる

太后の懷を搜す

十二日安肅軍の城下に着いた。その城は石などを用ゐず、土で築き上げて低いものであつた。門を入ると番兵が皆の身の廻りを撫で搜つた。鄭后の内懷まで手をさし込んで搜した。これは誰でも門を入る人にはする事で、城内にうさんな者が這入りこまぬためにするのであつた。一行は幾つかの街筋を經て役所へ入つた。そこで一同は司令官の前に拜をさせられた。拜終ると二帝一后は門を出て一小室に入り、その中に坐らせられた。そして粟飯と米の湯とが給せられた。阿計替は出入毎に言葉をかけて慰めてゐた。

貳に惱む帝王太后

この小い室に封じこめられた帝や后は、何しろ春から夏にかけ土埃の中を歩きつづけられた事とて、衣服は見るかげもなく垢染みて夥しき蝨に惱まれた。苦しさに堪へかねて、阿計替に洗濯を賴まれた。

古着は仕立の手數なし

すると司令部から使が來て、帝を呼び出した。そして金の天子の御沙汰だといつて下され物を與へた。それは夏衣の料にと紗二匹生絹一反であつた。帝は有難くそれを受けて、その品々を人に持たせて室へ歸られた。處がその頂戴物半分は番兵どもが取つてしまつた。そして夏物の古着を持つて來て、

『これを着るんだ、仕立てる手數がかゝらなくてよいではないか』と投げ與へた。

或夜俄に城内に騷動が起り、喊の聲をあげて、火焔天を焦す中に亂闘した。

安肅軍には司令官たる知軍が二人駐在してゐた。一人は金人であつたが、今一人は元の遼の契丹人であつた。二人は睦しく行かないのが當然で、契丹人の方が陰謀を企てた。

それは金の知軍を殺して置いて、二帝を擾つて南へ走り、西夏に投じようといふのであつた。

■西夏は北宋から南宋へかけ約二百年の間、内蒙古から甘肅地方を領して一國を立てて

ゐた。宋には勿論、遼にも金にも亡ぼされず、元の爲に亡ぼされた。

然るにこの密計が未だ實行されない内に、張本人の契丹の知軍が、酒の醉に乘じて下僕を鞭韃した事があつた。その僕は遺恨に思つて金の知軍へ陰謀を密告して了つた。そこで金人は急に兵を催して城内の契丹人を取圍み、その燒討をしたのであつた。曉までに殆ど契丹兵の全部を殺して、火も消え、騷は鎭まつた。その夜の亂鬪に殺傷された者は七百餘人を數へ、燒かれた家も夥しかつた。

契丹人全滅とかゝり合

この騷ぎは帝や上皇の少しも與り知らざるところであつたが、二帝をつれ出す計畫であつただけに、金の方では何とか言ひがかりをせずに置く筈がなかつた。

果して金の知軍は廳の庭下に帝を引出させた。そして罪を責めた。

『其方は契丹と氣脈を通じて俺を殺し、共に逃亡する所存だつたのだな、昨夜の内に契丹は殺して了つたが、其方の事は一應皇帝に上奏して始末をつけるのだ』

帝はこの上に謀叛の罪に問はれて窘められては堪らないから、外界との交通も出來ない囚れの身にさういふ企謀など出來る理由がないことを陳辯された。知軍は承知しない。

『現に訴人があるのだ。今更ごまかさうとしてもだめだ、手數ばかりかける奴だ』

帝は尙も寃罪であることを言ひ爭はれた。知軍は益怒つて左右に命じて鞭で帝を擊たしめた。帝は齒が碎け口から血を流された。散々韃つてから又元の室中へ引ずりこませて置いた。帝は疼痛に堪へず、泣くにも聲さへ出なかつた。

帝を撻つて流血淋漓

その日帝には食事も與へられなかつた。たゞ番卒が内緒で米の湯を持つて來てくれたゞけであつた。

數日を經て、又帝は廳の庭下に引出され、知軍に再拜させられた末に、金の天子の詔書を讀み聞かせられた。

『趙某父子、曩にその罪を免して安肅軍中に居らしめたるところ、朝廷の慈恩を顧みず、知軍李奉國と結托して叛を謀れり。元來死を賜ふべきも、暫く靈州に赴きて指揮を待たしむ、安肅軍の命令を得て彼地に向け出發すべきものなり』

二度帝を移す

讀み聞かせると、又帝を引立てさせた。帝は再拜して恩を謝せられた。しかも情無さ

に胸塞がつて言葉が出なかつた。それを見ると知軍は又怒り出した。

怨を晴してから引渡す

『まだ其方は口惜しさうにしてゐるのか、其方はこの俺を殺さうとしたのぢやぞ、俺はこのまゝ其方を手放すわけには行かないぞ』と左右に命じて帝を地上に引据ゑ、柳の枝で作つた鞭で散々に毆らせた。帝は痛みに息も絶え入る程だつた。

夜に入つて帝を門から引出した。總身の傷の痛みに堪へかねて、帝は立つことも困難であつた。その上に上皇は暑熱の爲に病氣となられ、言はうやうなき憂き目を見られた。

十四、韋妃金の夫人たり

帶を取上げて了ふ

斯くて帝の一行は靈州（甘肅省靈武縣）へ移された。そこでは土塀圍ひの中に放り込んだ上、帶は皆取り上げて了つて、圍ひの内外に番兵を置いた。帶を結ばせて置いては縊死されるかも知れないと考へたのである。毎日の食事は一回限り與へられた。

十月の或る朝、未だ暗い内に、俄に陣太鼓の響が四方に起り、人馬馳せ交ふ樣子であつたが、やがて火焔は天に映じて、又も物凄い修羅の巷となつた。

又も動亂に脅かさる

それは同所の知軍が部下の或る隊長の妻を奪つたので、隊長等が三人申合せて亂を起し、知軍を始めその一族家人等六十人を殺したのであつた。それでも氣がすまなかつたのか、市民の家六七百戸にも虐殺を逞くした。その騷ぎは晝頃には一先づ鎭靜した。

その亂を起した隊長等は、帝を押しこめてある場所へ來て、何れも馬から飛下り幾重ねかの衣類と乾糧とを差出し、

『これを上げよう、俺ら三人はこれから西夏へ行つてしまうからね、お前さんの國の方では、半年ばかり前に南京で康王が天子さまになつてゐるよ、まア辛抱したが宜い、今にお前さんたちも歸られるやうにならアね、此處の番人どもは二十何人か、皆殺して置いたからね、やアぐづ〳〵してはゐられない』と三人は又馬を飛ばして馳せ去つた。

三日ばかり經つて、外の土地から守備隊が來て、城内は平穩になつた。

唯一の同情者は助かる

番人二十餘人を殺したと隊長どもが話したので、親切者の阿計替も殺されたぢらうと思つて、今の場合心細さは一入だつた。帝は、

『あの男も殺されたでせうが、私どもは何うなることでござりませう』と上皇に話しかけられた。その言葉の下から、阿計替が不意に這入つて來た。

『無事で居ります、御安心なさい』

『おゝ無事であつたか、どうして助かつたのです』と帝は問はれた。彼は、

『私は仆れ重つてる屍骸の下に二日間潜り込んでゐましたよ、昨夜やつと這ひ出しました』と話した。これから又阿計替が新規の番兵の長として二帝を監視する事になつた。

或日帝や上皇は又廳の庭下に引出された。堂上には紫衣の貴人が坐つてゐた。

『自分を見識つてゐるか』とその貴人は帝に尋ねた。

『お見識り申しません』と帝は答へられた。

『自分は蓋天大王ぢや、乃ち四太子の伯父に當るのぢや』

さういつて、屏風の後から一人の人を喚び出した。それは康王の母の韋妃であつた。

上皇は自分の妃が今堂上に現れたので、驚きもし羞ぢもして、顏を揚げ得ないで俯首かれた。韋妃も同じく目をあげて上皇や太后を見る顏は無く、消え入りたい思ひで俯首いてゐた。

蓋天大王は左右に命じて、二帝と太后とに酒を與へた。そして、

『これはこの夫人に對するお義理なんだ』と機嫌よく笑つた。大王は韋妃を自分の持物

堂上の夫人は上皇の妃

元旦の囚獄慰安

にしてゐたのであつた。酒がすむと番人どもに、

『よく氣をつけて置け』と大王は命じた。

これからその監視が少し緩かになり、食事も先づ一通りは與へられるやうになつた。その冬を凍死もせず、無事に過されるだけの衣類も給せられた。

正月が來た。金の慣例として元旦には獄囚も少し監視を緩くし、死刑囚でも暫く檻外に出してやることになつてゐた。

帝も幽閉所から出て、その邊を歩いて見る事を許された。尤も廳の門外に出ることは許されなかつた。帝は物珍らしく四邊を眺めて多少氣分を慰めてゐられた。そこへ一人の女中が駈け出して來て、

『韋夫人からのお使でございます。十一官人も八官人も御我慢なさいと仰しやいました。それからあの……』と一段聲を潜めて、

『九兄さまは即位されたといふ事でございます、お歸りになるのも遠からぬ内だと思召せと仰しやいました』と何やら持つて來たものを、帝の御衣の袖に置いて、又あたふたと駈け出して行つて了つた。何だらうと御覽になると、それは棗を混ぜた大きな燒餅

思はぬ贈物を頒つ

（パンの類）であつた。當時の帝に取つては、不時の御馳走であつたに相違ない。

阿計替は又帝を室中へ入れた。そして、

『先刻九兄さまといつたのは誰の事です』と訊いた。

『私の弟の康王の事なんだ、今の韋夫人は康王の母親だから知らせたのだらう』

『それから十一官人八官人といひましたのは？』

『十一官人は父上で、八官人は私だ』

帝は今女中に貰はれた燒餅を、上皇や太后は勿論、阿計替や今度來た番兵どもに分配して食べられた。

二十日になつた阿計替は帝に敎へた。

『今月の二十九日は金の天子の誕生日ですから、全國で祝宴があります。宴を終つて燕京に祝ひを述べに行くことになつてゐます』

その夜阿計替は、先日燒餅を運んで來た女中を帝の前へつれて來た。女中は、

『夫人からの御傳言でございます、三四日内に燕京へ參りますから、又當地へ參るか何うか判りません、おからだを御大事にといふ事でございました』と言ひ捨てゝ急いで逃げて行つた。外の番卒どもがこれに氣づいて、

金の天子の祝宴

『何だ〳〵』と騷ぎ立てた。阿計替は、

『大王からのお申附があつたのを知らないのか』と叱りつけた。番卒どもゝそれで詮義立てもしないで靜まつた。

その夕、上皇と太后は韋夫人が此地を去ると聞いて大に力を落された。蔭ながら韋夫人が氣を附けてくれたので、今まで少しは苦痛の少い日を送られたのだから、又と此地に來ないかも知れぬといつて、夫人が遠くへ行くことは、上皇方に取りては甚だ心細い事であつつたのである。

二十三日に韋夫人は蓋天大王と共に燕京へ出發した。留守の部隊長の主席は曖雞兀といふものであつたが、帝の前へ來て、

『蓋天大王と韋夫人とは其方父子と何やらごて〳〵してゐたが、其方見たやうなものを留めて置いて何になるものでない。數日の内に蓋天大王に申し上げて何とか始末をつけて貰ふんだ。』

又二十餘人の番卒どもを戒めて、

頼みの綱の韋夫人去る

監視再び嚴重になる

『監視は決して緩めてはいけないぞ』といつたので、韋夫人の緣故で折角綏やかになつてゐた監視が再び嚴重になつた。それでも金の皇帝の誕生祝日には、酒と肉とが給せられた。

十五、月下斷腸の歌

さんだ腹癒に供せらる

二月に入つて、蓋天大王は靈州へ歸任せずに、他へ轉任になり、兀西哺途が後任として來ることが判つた。

その十日に新任の知事は靈州へ來た。帝を庭下に喚出して頻りに何か訊問するやうだつたが、その言語が全く通じないので、そのまゝ又帝を引立てさせた。あとで阿計替がやつて來て話したところによると、新任の知事の父が南宋討伐の爲に從軍して、江南で宋の軍に捕虜になつたといふ事で、その腹癒に此處で帝と上皇と太后とを苦しめるのだと言つてゐるといふ事であつた。

果して二帝は又一小室へ移し入れられた。その室は甚しい濕氣の强いところで、到底住はるべきではなかつた。二帝は相抱いて、

三度帝を移す

『親子が此處で死ぬるのか』といつて泣かれた。

折も折とて、唯つた一人の賴みになる阿計替は、燕京へ使にやられた。

『二十日も經つたら歸つて來ませう、お二人とも我慢しておいでなさい』といつて彼は出て行つて了つた。

未だ阿計替が都から歸つて來ない間に、使者が來て、

『天子の思召で、其方等三人は西汚州へ行つて指揮を待てといふ事である』と申渡した二帝は泣きながら、

『又も何處へ遣らうとするのだらう』といはれたが、なさけ容赦もない役人どもは、帝を引出して手を縛り、逐立てゝ歩ませた。その夜の內に靈州を立出でられた。

生きた人とも見えぬ悄悴

これから以後、日に五十里行き或は七十里行きして、辛苦はさまゞ、二帝も后も足が痛んで歩けなくなると、護送兵等が背負つて行くことなどもあつた。次第に沙漠の地へ入るので、風は强く霜は酷しく、三月の中旬とは言ひながら、寒さは嚴寒に異ならず、何れも衣類は薄いし、骨高く痩せ饒ひ給へる狀は、生きた人とも思はれぬ程であつた。

護送兵も見かねたか、途中で粗末な木の框を作り、枯草を取りて覆蓋を葺き、奇妙な輿のやうなものにして、それにお乘せして舁いで行く事にした。何れも幾度か絶え入らんとしては、辛くも危き命を維いでゐられるばかりであつた。

かくて三四日も歩いたところで、三四千もある騎兵の一隊に出會つた。首領は紫衣の貴人であつたが、その言ふところは何やら判らなかつた。帝は草葺の輿の中から衰へ果てた眼を懶く見開いて御覽になると、一人の綠衣の將がお側近くやつて來て、水や乾糧を取り出し、更に革袋の中から羊の乾肉を幾片か出して帝に奉り、小聲ながら、

是も轉々流離の人

『私は元來漢人でございます、私の父は周忠と申しまして、陛下にお仕へして、延安の鈐轄でございました。元符年間に西夏と戰ひまして私ども父子とも捕はれ、それ以來西夏にゐました。宣和年間に西夏は私を遣はしまして、契丹を助けて金を攻めさせましたが、又運拙く金に執へられ、そのまゝ此方に居りまする、今では私も靈州の總管となりました。ですがこの事はお洩しないやう願ひます。この頃金の四太子は江南の方へ行つて、何うやら旗色が悪いやうでございます。金の方では南朝の張浚、劉錡、韓世忠、劉光世、岳飛などいふ人々を皆名將だと大評判でございます。きつとさういふ人々が中興の大業を遂げませう。私も本は宋人でございますから、この御有樣を見るに忍びず、ほんの少々ですが持合せの肉を差上げます』と話し了ると、再び馬に跨つて出かけて行つた。

荒野の笛聲斷腸の響

かくて幾日か行進を續けた。或夕林中に野宿をした。月少しく明るき宵、護衛兵が笛を吹き出した。春寒き夜の荒原に咽ぶが如き笛の音を聽いては、轉た斷腸の念があつたのであらう。上皇は歌を作られた。

玉京曾て憶ふ舊繁華　萬里帝王の家　瓊林（園の名）の玉殿　朝に絃管を喧し
暮に笙琶を列ね　花城人去りて今蕭索　春夢胡沙を遶る　家山何れの處ぞ

忍びて羌笛を聽けば　吹いて梅花に徹す。

上皇は帝を顧みて次韻を促がされた。帝も涙ながらに一首を聯ねられた。

宸傳四百舊京華　仁孝自ら名家なり　一旦奸邪　天を傾げ地を折く　忍びて琶を拂くを聽く　如今塞外多くは離索　迤邐と胡沙に遠く　家邦は萬里　伶仃（孤獨の意）たる父子　曉の霜花に向ふ。

歌が出來て二帝と太后は更に新しく涙に咽ばれた。

十六、趙妃金帝を痛罵す

烟霧悲風の無人境

かくて進み行く道は草莽蕭索として悲風四に起り、黄沙は飛んで白霧となり、日出ても天地は烟霧に閉ぢられ、五里七里が間も、絶えて人家など見ざる時もあつた。時折は羊飼の人らしきを見るくらゐで、本道を歩いてゐるので無いことは察せられた。稀には城邑らしいのを望見することもあつたが、其處へは立寄らずに、遠く離れて行き過ぎるのであつた。

いやな先例

頃しも早や夏に近かつたので、楡や柳は道を爽んで生えてはゐたが、水溜りの萍と共に、何れも茶色をして、滴るやうな翠の色は見られなかつた。

十幾日か斯ういふ旅をつゞけて、辛つと西汚州の小い城に着いた。その地は至つて人煙稀な淋しい廢驛の趣があつた。

『此處は昔、契丹の道宗が高麗王の侃を囚へて置いたところです』と、有難くない先例まで番人どもは聞せてくれた。

城内は甚だ廣くなく、建物はあるが甍傾き軒崩れて、規模だけは官廳らしいが、荒れ果てゝ人住むべくも思はれなかつた。城の護衛三百人が、日毎に材木を伐り出して來ては、何うやら園をしたり、家根を葺いたりして、住居らしく手入をした。そして六七十人を護衛に殘して何處へか往つて了つた。

幾に雨露を凌ぐ官府

帝や太后はそのあばら家の一室へ入られたが、外へ出ることも出來ず、食事は日に一回、しかもぼろ〳〵飯のひどい物であつた。時たま羊の肉が少しくらいは與へられた。

字を書くから用が多い

或日二帝は話された。

『靈州にゐた頃は、阿計替が蔭ながら氣をつけてくれたので、折々は南方の消息も聞かれたし、一縷の望も無いでもなかつたが、今はその阿計替と別れてから二月からになるが靈州へ歸つてゐる事やら、何うしたのやら』

斯う話して居られると、番人の一人が帝の前へ出て、

『阿計替は私の兄です、私は査里といふんです、北國皇帝が私たち兄弟に專らお前さん方の番をさせたのです、今兄貴は靈州の同知の使で燕京へ往つてるが、そのうち又此處へ來ます。兄貴は字を書くもんだから、時々書附の要る使には引出されるんです。兄貴

が出かける時、あとは善く氣をつけて上げてくれと言つてましたつけ、なァに心配せんでも宜うがす、私が附いてるから』といつてくれた。

數日後に阿計替は果してやつて來た。

『御無事でしたか、私は靈州から上京へやられ、上京から靈州へやられ、それから又此處へやられ、いや何うもひどい目を見ましたよ』と話した。

早や秋になつた。冷氣が人に逼るやうになつた。空を渡る雁が北から南へ鳴きつれて飛んだ。阿計替は壁にかけてあつた一張りの弓を取つた。

雁を射て占とす

『弓をお曳きになりますか、この地方では雁を射つて何かの占ひにしますよ、どうでせう、私が一つ御名代に占つて見ませうか』

帝は一筋の箭を取り、天を仰いで祈られた。

『私は不幸にして上は祖宗を辱かしめ、下は萬民に禍しましたが、若し國祚が絶えず、復び興るやうでしたら、願はくば此の一筋の箭を一度で中てさせ給へ』と念じてその箭を渡された。

阿計替は受取つて、たゞ一箭に見事に射中てた。雁はばつさりと二帝の前に落ちた。

二帝は天に拜し地に拜して喜ばれた。

『本當にこの占ひの通りであつたら、もう死んでも思ひ殘す事は無い』とまで仰せられた。阿計替は手練を見せたのも嬉しかつたのであらうし、又善い功德を施したといふやうな得意さもあつたであらう。にこ〳〵と笑つてゐた。そして枯草などを折りくべて、雁の肉を炙いて一同で食べた。

金帝趙妃を愛す

金の都では皇后が亡くなつて、皇帝は氣が暴くなり、喜怒常平を喪つてゐた。日常刀を帶びてゐた。宮中でも少し機嫌を損ねる者は立どころに斬り捨てた。

その中で帝の氣に入つてゐたのは趙妃であつた。妃は欽宗帝の弟肅王の姫宮で、北國へ捕へられて妃とされたのである。妃は常に何とかして金の皇帝に一泡吹かせて、無念を晴したいと考へてゐた。皇帝の氣が暴くなつてゐるので、夏の頃氷で冷し通しに頭を冷してやつた。その爲又病氣になつた。

或日奏問する者があつて、

『趙某父子（上皇と帝）は現に西汚州で御沙汰を待つてゐますが、この頃四太子は金山で韓世忠の爲に大敗北を招かれ、南朝の勢が又次第に大きくならうとしてゐます。この際趙某

父子を更に北の奥地へお移しになつたが宜しうございませう』といつた。帝は、
『では五國城へやつて了へ』と命じた。

趙妃爭ひ諫めて肯かれず

趙妃は側でこれを聞いて驚いた。何處か知らぬが大變な奥の方へ先帝や帝が送られるとあつては默つてはゐられない。

『陛下は妾を可愛さうだと思召して、妾の父や兄を少しでもお庇ひ下さるなら、凍え死んだり餓死したりしないやうにお指圖を願ひます、妾一生御恩に着ますから』
『外界の事にお前なんか口を出すんぢアない』
『ですけれども血を分けた親兄弟の事ですもの默つてゐられませうか、陛下にだつて親兄弟はあるでせう』と突慳貪に喰つてかゝつた。帝は腹を立てゝ了つた。
『お前を宮中に置いたのでは、外には父兄の讐であり、内には妬婦であつて、危險極まる、若し禍を起されては後悔しても及ぶまい』
『何だ、お前は元來北方の小胡奴ではないか、妄りに上國を侵して宋を滅し遼を滅し、仁德は行はないで殺伐にばかり力を入れ、妾の親兄弟を酷い目に遭はせてゐる、いつかはお前が又同じ憂目を見るから、その覺悟をしたがよい』と妃も負けないで痛罵した。

命を捨て、痛罵す

妃は立どころに帝の爲に斬り殺された。

帝移さるゝこと四度

十七、太后の野仆死と上皇の失明

或日阿計替が何やら書附を持つて帝の所へやつて來た。
『又お供して五七百里突走らねばならぬ事になりました』
『それは又どういふわけで』
『上から命令で、私共幾人かは五國城といふところへ行かねばなりません、明朝早く出發となります』と敎へた。

五國城は今吉林省延吉縣の地方だともいひ、或は依蘭縣だともいはれてゐる。要するに滿洲の東北隅に近い處である。

翌日阿計替は帝の一行と護衛六十餘人を率ゐて西汚州を發した。夜までに約六七十里を歩いた。帝も太后も早や歩めなくなつた。泣きながら阿計替に向ひ、
『いつその事、金の皇帝へ申出て、この邊で一思に殺してもらひたい、何もこんなにし

て、千里の外に伴れて行く事はあるまい』とかき口説かれた。

『我慢が肝腎ですぞ、何も考へないか宜いんです、この阿計替が附いてるから、決して心配なさるなよ』と力をつけた。

太后樹下に崩ず

このやうにして五六日歩いた。太后は衰弱日に加はり、もはや一歩も進めなくなつた。帝は止むを得ず自ら太后を負ひまつりて進まれた。その夜路傍の木蔭で太后は遂に崩ぜられた。四十七歳であられた。邊鄙の事ではあり、斯うした事情の道中ではあり、葬儀など營まれるわけもなく、路側に刀で土を掘つて坑を作り、死骸は衣類でくるんで埋めてしまつた。二帝は共に臥しまろびて慟哭されたが、どうする事も出來ない。護衛兵の中にもお氣の毒に思ふ者もあつたが、又無遠慮に詬り罵る者もあつた。さうして追立てるやうにして行手を急いだ。

又も淋しい田舍城

又二日を經て五國城下へ辿り着いた。城に入ると前の西汚州に似て、城中の民家は僅に五六十戸、しかも何れも荒れ果てゝ家並などは更に揃つてゐなかつた。

役所だといふところへ行くと、正廳も廻廊も廂下も皆倒れかけた古御所であつた。帝を引いてその庭下に入ると、堂上には一紫衣の人が居たが、阿計替が取出した書附を見ても、解つたかどうか唯うん〳〵と首肯いたばかりであつた。

上皇も漸く衰弱

帝は役所の廡下に室を與へられた。狹い室で、辛つと二人坐られるだけの臺があつた。四壁は皆土塀見たやうなもので、庭前には木柵を結び、入口には封印をされた。

日が暮れてから一盆の食事が運ばれた。二帝はそれを分けて食べられた。

上皇は太后が崩ぜられた事を餘り歎かれたので、酷く目を惡くされた。一方の目は殆ど物が見えなくなられた。終日室内に坐つて目を瞑り、呻吟して死を待つてゐられるばかりであつた。帝に向ひて、

上皇失明

『御先祖が國を建てられて二百年にならうといふのを、内憂外患防ぐによしなく、一家三千の趙氏ともあらうものが、今僅にこの二人しか互に顏を見られないとは情無い境遇になつたものだ。一族の人々も散り〳〵になつて、多くは奴婢に落ちてゐるらしい。韋妃は蓋天大王に取られてゐたが、あれも其の後どうなつた事か』と歎き悲まれる度に、眼疾は次第に進んで、一箇月餘りで遂に一眼は盲となられた。

或日城内で祭禮があつた。天王を祭るのだといつて、年中行事の中でも重い儀式だと見えて、役所の庭中に祭壇が設備され、夜は夥しく燈を列ねたりした。帝は窓からそれ

を眺めて、神に祈念された。

『私は速かに死にたいと思ひます、南方には中興が出來ますやう、北方にゐる者は早く内地へ歸られますやう、御加護を祈ります』

その夜の夢に、空から神が庭上に降りて來て、帝に挨拶し、

『我は北方の神天王といふ者、上帝我に命じて陰兵を統帥せしめ、南北の生靈を衞らしめらる。これより更に十年あつて天下太平ならん。南朝の中興も略々昔に類するものとなるべし』と言ひ了つて天へ昇つて去つた。

夢中の神託

帝はその夢物語をして、上皇を慰められた。

又或日宦官が來て帝を引見していふには、

『北國皇帝は趙氏を皇后に冊立されようとの思召があるのだが、荆王の女で吳王の孫だと稱してゐるけれども、本當の續き合が判らないので、それを調べに來たのだ。詳しく申立て宜からうぞ』

更に他の趙氏を皇后に冊立

『いや私も大勢の一族を一々記憶してゐないのだが、京師が攻め破られた日から、宗秩に關する記錄など、皆北朝の手に渡つたのであるから、それがある筈だ、それで調べたら判るであらうのに……』と帝は答へられた。

『いつも后が言つてゐられるのは、京師にゐた頃は、上皇を伯公（大伯父さま）と、今上を伯父とお呼び申したといふ事だ。今は早や二人のお子さんも出來た。長は殊哥、次は青哥と名づけてある。何れ遠からず太子にも立たれるだらう。或は今時分は既に冊立を終つてゐるかも知れない。それから此地へ來る途中で、蓋天大王夫人の韋氏にお目にかゝつたが、二帝と后とに宜しくとだけ傳言された』

『太后は已に亡くなられたのだ』と帝が答へられた。その宦官は馬を飛ばして去つた。

又その後宦官が來て、今度は皇帝と皇后の思召で、鄭太后と朱皇后とを五國城に葬ることを許され、官から棺材を賜はるといふ沙汰であつた。そして其處へ二后の遺骸は袋に入れて擔いで來た。その崩れ果てた遺骸を木箱に納めて、淺山の下に葬つた。

辛うじて二后を葬る

皇后の思召といふので、特に二帝の監禁を緩して、城外へは出さないが幽閉しないで出歩かれるやうにした。これは二帝には久しぶりに籠を出たやうな感があつて、時々市中へ出ては民家に立寄つて、南朝の消息を聞き出さうとされた。然し市民の中にはそれに滿足な答をする者が無かつた。飲み物や食べ物などを進むる者があるくらゐであつた。

監禁少しく緩む

十八、待遇一變再變

見識らぬ一族の夫人

或日この五國城の同知として瓜歐といふ者が燕京から新に着任した。未だ若い女眞人であつたが、侍妾數人を置いて二帝を召した。そして二帝に酒や肉を饗して、

『當地は大分都から遠いので、よく保護してあげる』といつた。小蔭からその妻が出て來て、二帝を拜した。同知は、

『身内の者だよ』といつたが、二帝共にその婦人を見識られなかつた。尤も風俗も全く金に倣つて替つてゐた。そこで帝は、

『弟の姫だとは判つたが、ハテ、何王の子だつたかなア』といはれた。

これから又この新同知夫婦が氣をつけたので、二帝の拘禁は餘程緩やかになつた。

然しそれも永くは續かなかつた。或日突然飛脚が來て、敕旨を傳へた。

『皇后趙氏を廢して庶人となし死を賜はつた。であるから當城の同知瓜歐の妻趙氏と、統國不律介が妻とは、繫がる緣で共に死を賜はるのだ』といふのであつた。夫婦は意外の沙汰に驚きながら敕旨を拜した。夫人も泣けば瓜歐も泣いた。使の者は容赦なく、人をして棒を以て夫人を敲き殺させ、その首を取つて都へ馳せ歸つた。

皇后廢殺の事情

これから又以前の如く二帝は押こめられ、阿計替が監視することになつた。

一旦皇后にまで立てた趙氏を、何故に廢して殺したかは、二帝には解らなかつた。それも或日阿計替が聞き出して來て二帝に物語つた。

――當初は肅王の姫を妃に立てゝゐたが、帝の意に悖つて殺された。それから荆王の姫を妃として、一男一女を生み、既に皇后に冊立されてゐた。

或日帝と后とは碁を圍んでゐて、何か帝の意に逆らふやうな言を后がいつた。怒り易い帝は忽ち烈火の如くなつて、

『默れ、俺は既に趙妃を殺してるのだ。趙后だつて殺すぞ』と怒鳴つた。皇后は泣きながら衣冠を正して罪せらるるを待つた。その殊勝な態度にも未だ帝の怒りは解けず、宮中の監禁所たる外羅院へ皇后を入れてしまつた。

元來が敵國の姫君が皇后に立つたのであるから、國人の間には嫉妬反感が多かつたに相違ない。であるから一旦帝の怒を買つたとなると、讒言は數限りなく起つて來た。

讒言續出して皇后を陷いる

『皇后は誰かと私してゐるとか、宮中で韋夫人と密々話をしては泣いてゐたのは、南朝の爲に何か企てるのだとか、朔日十五日には必ず香を焚いて南方を拜んでゐるとか、さういふやうな、皇帝を疑はせる讒言が續々現れた。皇帝は遂に皇后に死を賜つた。のみならず皇后の一族は皆殺された。金の皇族をはじめ大官などで宋の趙氏の女を妻とするもの十餘人あつたが、何れも一時に死を賜つた。だから五國城の瓜歐の夫人にも及んだのである——

上皇死を企てて果さず

趙皇后が殺されてから、二帝の拘禁が嚴重になり、且つ何時金帝の氣が替つて來るかも知れないので、上皇はもはや免れぬところと觀念されたか、着物を引裂いて小繩を綯り合せ、それを梁にかけて縊死しようとされた。早く氣附いたから、危いところを帝は抱き留めて、

『さういふ事をなされてはいけません、若し陛下がさうしてお亡くなりになれば、私は人が容しません、實に萬世の後まで私は罪人といはれます』と泣いて諫められた。

番人どもは上皇が自殺を企てられた事を知つて、これは危險だと思つたか、何か藥を進めた。それを服用されると、上皇は數日が間食事も取れなくなり、厠へ入るにも一人では歩けず、帝が抱くやうにして伴れて行かるゝのであつた。

靈藥不雲木の不思議

阿計替に賴みて成る可く寛大に取扱つてもらふやうに願はれたところが、不雲木といふものを煎じた藥湯を進めた。この地方には一體藥といふ物が無いが、病氣をすれば何でもこれを煎じて飲むのだと阿計替は說明した。上皇はそれを服用された。なるほどそれで餘程落着かれた。阿計替の話ではこの藥木は病の吉凶を占ふことも出來るのであつた。湯で煎じる時、木が浮めばその病人は癒るし、沈めば死ぬ、半分浮き沈みするのは病氣が永引くのだといふのであつた。

ところがその阿計替が病氣になつた。全く口も利けなくなつて、昏々として寢てばかりゐた。帝は大に心配されて、自分で不雲木を煎じられた。その木は湯の上に浮んで、ぐるぐると廻つてゐた。帝はその煎藥を持つて行つて阿計替に與へられた。その夜大に發汗したが、それきり忽ち快癒した。

十九、上皇崩じて酸鼻の葬式

天輔十七年、宋の紹興四年の二月十八日金の皇帝晟が殂し、太子の亶が即位して天眷と改元した。

■此の項は不思議に誤寫を傳へたものらしい。金の熙宗亶が即位したのは宋の紹興五年である。金の天輔は六年までで天會と改元してゐるから、その年は天會十三年である。それから熙宗は即位しても直には改元せず、天會十六年を改めて天眷元年としたのである。

五度目の流謫

狐狸と鬼火に脅かされる

扨五國城の春は尙未だ草木の上には歸つて來ない頃、二帝の上には又新たる命令が下つた。それは新帝が即位して、既に康王を捉へて燕京へ拉致したから、二帝は更に均州に移し、やがて康王も同地へ送らるるといふのであつた。

二帝は即日五國城を發して、又五百里の難路を均州へ向はれた。特にひどい惡路で、六十里程行かれると日が暮れて路が見えなくなつた。それのみでなく、狐狸の類は林間に悲しく啼き交はし、氣味惡いそよ風は細雨を降らし、怪しい鬼火は縱橫に飛び、殆ど人間界とも思へなかつた。然かも遂に宿るべき人家もなかつた。

岩角の尖つたやうな所ばかりかと思ふと、今度は沼地へ入つて、じめ〳〵と草生ひ茂り或は果しなき密林に入るかと思ふと、又川を徒渉し、足は裂け破れて血に塗れ、見るも痛ましき道中が幾日も續いた。それが大抵日光の弱い暗い日ばかりで、重い霧のやうなものが立ち罩め、それを吸ひ込めば、咳が出て喉から血が出るのであつた。

霧を吸うて血を吐く

途中に古い廟があつた。塀や垣が繞つてゐるでもなく、唯數體の石像が祀つてあつた。その像はこの地方の夷の酋長ででもあるらしく、なか〳〵巧に刻んであつた。

『故老の話では、これは春秋時代の將軍李牧の祠だといふ事です。何故此處に廟を立て〻祀つたかは判りません』と阿計替が話した。

不測の神井

その堂の前には、石で桁を組んだ井戸があつた。その石は礪礫のやうに光澤のあるものだつた。その深さは百尺もあるといはれ、漢人種が盛な時は水が涸れ、北方人が盛な時は水が溢れ出る程になるといふ事だつた。試に石を投げ入れると、半の吼えるやうな聲がする。又その水は病氣をも治すといふので、一行の人々は何れも腰なる革袋を取つて、一杯湛へてゐる水を汲取つた。飲んで見ると味も頗る良いものであつた。

路傍の神に無理な祈願

帝は神を見て祈念された。

『金の勢力旺盛な事は、この井の水の豐かなのでも察せられますが、弟の康王が金に捕

へられて、宋は全く滅亡したといふ事を聞きました。然しこれは未だ確かだとは思ひません。若し眞に神靈といふものが有りまするならば、私の占に驗を見せて下さい、宋の復興が出來るものなら、どうぞ神像は立上つて下さい』と祈られた。帝の内心では、宋の復興の覺束なさは、この石神の坐像が起立することの覺束なさと同じであると思ひ諦めて、斯くは祈られたのであつた。

石神起上る

ところが良少時すると、その石像が雷のやうな音を立て、次第に體が搖れ出し、躍るやうに思つたが、忽ち堂内に起立してしまつた。姿が變じても石の紋理はばら〳〵になならず、元の如くに續いてゐた。帝の無理な祈念を知らない一同の者は呆氣に取られて見成つた。二帝は共に驚きつ喜びつ、拱手稽首して石神に再拜された。

徽宗遂に北地に崩ず

數日にして一行は均州へ着いた。そして酷い濕地に居を命ぜられた。

上皇は久しく健康を害してゐられた。そして食事も全く通らぬやうになつた。紹興五年の三月六日、上皇は衰弱の極遂にその地に崩ぜられた。

その地方では死人を埋葬するといふ事がないのであつた。死人があれば必ずその屍を火で焚き、半燒になつた頃定りの石坑の中へ投げ込んで置く。さうして置いてその穴の中の水で燈油を製するのである。

帝の屍を貫いて坑に投げ油の原料とす

阿計替がこの話をして帝を驚かしたところへ、早くも死人があると聞き知つて、五六の土人が駈けつけた。そして上皇の屍體を引擔いで運び去つた。帝は號泣しながら跡を逐うて行かれると、とある石坑の前で、屍體を焚きはじめた。半分ほど燒け爛れた頃、水をかけて火を消し、木の枝を屍體に突透して、それを引ずつて坑の底深く放り込んだ。帝は臥しまろびつゝ泣き悲しまれるばかりで、今は自分もと、坑の中へ飛入らうとされた。ところが左右の者が驚いて引留めた。それは帝を助けたいのでなく、この穴の中へ生きた人が落ちれば、中の水が澄んでしまつて油が取れなくなるからであつた。

阿計替は帝を促して歸つた。帝は日夜上皇の身の上を思つて哀悼された。

帝六たび居を移さる

二十、帝七轉して燕京へ

或日又都の使が來て、帝を引出して聖旨を傳へた。

『天水郡公趙某、此ところ死せりと聞く、その子天水郡侯は源昌州に移つて命を聽くべし』

我ありて帝の命を保てるのみ

といふのであつた。帝は又も苦しい道中をして僻地へ逐はるゝ事かと、それを聞くといたく哭かれた。阿計替は却つて驚いて、

『お喜びなさい』と注意した。

『何が喜ぶ事があるものか』

『何がではありません、此處から源昌州まで六百里の道ですが、同地から燕京は近いところです、これは上皇が亡くなられたことを聞かれて、北國皇帝があなたを近くへ移さうと思ひ立たれたのでせう』

帝は少しく落着くを得られた。翌日早速均州を發足して西南に向つて進まれた。道は平坦で今までの險難に比べて甚だ樂であつた。その休息するやうな人家も路傍にあるし何やら草花などが咲いてゐた。餘程今度は樂であつた。然し食物は毎日乾糧ばかりであつた。

帝は是までに早や數千里を歩き回られた。途次阿計替は、

『私が附いて廻つたから未だ宜かつたので、若し他の者だつたら、あなたも今まで無事ではゐられないでせう』といつたが、正にその通りであつたであらう。

頭髪白からざるを得ず

七度目は又燕京

又五六日を歩いて源昌州に達した。城内へ入ると市街の狀も今までの僻地と違つて繁華であつた。此處の同知は赤黎喝といつて阿骨打の從兄弟であつた。帝を引見して、

『お前さんが南朝の少帝（若い天子の意）なのか、遠路いろ〳〵辛苦な事だつただらう。聞けば父も母も亡くなつたさうで、北國皇帝の御慈悲でお前さんを當地へ移されたのだ。心配しないが宜い』といつて左右に命じ酒や肉を運ばして帝に與へ、自分も同じくそれを食つた。食ひ畢ると又帝に向つて、

『一體年は幾つだか知らないが、さう頭が白くなる年齢ではあるまい』といつた。

『三十六ですが、數千里の遠方を歩き廻つたので、頭も白くならないでゐられませんでした』と帝はほろりとされた。赤黎喝は、

『まア心配しないが宜い』と慰めて、帝を一小室へ導かせた、そこには珍しく寢臺や夜具なども備へてあつた。

食事は相變らず不味かつたが、その室には阿計替と同宿であつた。

帝はこの源昌州といふところに一年餘り留め置かれてゐられた。

翌年になつて帝は燕京へ召された。鹿州、壽州、易州、平順州等を經て燕京への道中

は至つて平坦な歩きよい道であつた。その上沿道各縣の同知は、帝へ衣服を贈つた者もあれば、又食物を饗した者もあつた。

神託の歡迎

或る所では路傍に酒食を捧げて待つてゐた者があつた。そしてその民がいふには、

『この土地に神がありまして、大變靈驗のあるお神ですが、貴い方がお通りになる時はきつと前夜にお告があります。昨夜もお告があつて、明日は天羅王が十七人の從者を召連れてお通りになるぞとありました。それで斯ういふものを用意して差上げるのです』

帝も阿計替もその酒食を受けられた。

『その神廟は何處にあるのか』と帝は尋ねられた。

『あれにござりまする』と小高き岡を指した。

神廟の不思議

帝は阿計替とその廟へ上つて行かれた。門を入ると、凡そ三十人ぐらゐの人が挨拶するやうな聲がした。不審に思つたが人影は無い。像の前へ行かれると、その神は石で刻んだ女性で、手には鐵で作つた劍を持つてゐた。その左右に侍立してる像も皆婦人であつた。帝も外の者どもも拱手して頭を地につけて拜した。拜し畢つて門を出ようとされると、又三十人程の聲で挨拶をした。その廟には別に神の名を記した掛札などは無かつた。土地の者は單に將軍と稱するだけであつた。

『先刻天羅王がお通りになると、あの百姓はいつたが、あなたは何の事だか御存じですか』と阿計替が帝へ尋ねた。

『いや何の意味だか知らない』

『佛經に天羅神といふのがあります、きつとあなたは天宮から人間界に落されて生れられたのでせうよ』

『天宮の者としては餘り難儀な目に遭ひすぎるではないか』

『それが逃れ難い定業（ぢやうごふ）といふのでせう』

帝は珍しく笑はれた。

廿一、途中變異の數々

又或日途中で林の間に烟の上るのが見え、鐘の聲が聞えたので、これは寺だらうといふので休息に入ることにした。

石の仁王の挨拶

門を入ると石の仁王が對立してゐたが、それは阿吽の構でなく、共に手を拱いて、會釋をしてゐるやうであつた。そこへ一人の僧が出迎をしたから、一同は本堂へ上つた。非常に大きな神像が安置されてあつたが、別に何の裝飾什器もなく、石の香爐が一つあるだけであつた。僧は大勢が來たのを不審がるやうであつたので、帝は簡單に、

『自分は趙某といふもので、均州から源昌州を經て、この度燕京へ行くものです』と說明された。阿計替にはその說明が物足りなかつた。

『此のお方は南國の天子です、北國へ捕へられてゐられたが、今度燕京へ行つて北國の皇帝に逢はれるのです、途中で此處へ通りかゝつたから一休息と思つて這入つたのです』と註釋を加へてしまつた。

茶の味を忘るる十年

僧は童子を呼んで、茶を出すやうに申し附けた。やがて香り高い茶が一同に配られた。帝はその茶を啜りながら、茶といふものゝ味を十年も忘れようとしてゐたのだと考へられた。これは護送の人々も同じ事で、帝に附いて廻つてる間、茶など飲んだ事はなかつたのである。阿計替は又別の事を考へてゐた。

『この邊では茶は非常に得難いものになつてゐる。燕京で茶一斤は金一兩といふ高價である。それに斯ういふ荒廢した寺に極上の茶があるといふのは不思議だ』

瑞祥續出もあてにはならず

その茶の味は格別で、飲んだ氣持といふものは、重たい甲冑をすぽりと脫いだやうな身も心も輕々となるやうな快感があつた。その茶器は白石で作つてあつた。

やがて二童子は茶器を片づけて去つた。僧も奥へ入つたまゝ出て來ない。一同は又出發しやうと思つて、僧に禮を述べるつもりで奥へ入つて見ると、ひつそり閑として人間など影も無い。そこの小室に石刻の僧と二僧子とが安置してあつた。その顏を見ると、先刻茶を勸めたのは正にこの童子だつたと考へられた。

阿計替は寺の門前で、重ね〳〵帝にめでたい瑞祥があつたことをお喜び申した。帝も惡い氣持はしないので、

『わしが前途が開けるならば、お前たちは正に再生の恩人といはなければならない。さうしたら厚く恩義に酬いるであらう』と仰せられた。

頃しも盛夏の候で帝も衛兵も疲れ果て、木蔭を求めて休んでゐると忽ち大雷雨が襲來した。木蔭では凌げないので、民家を見付けて雨宿りをした。するとその家へ落雷があつて、その家の夫婦に小兒皆打ち殺された。その夫婦の死骸には、背中に何やら文字ら

おそ蒔きの天罰好臣に下る

しい象が赤く現れたが、然しそれは讀まれなかつた。唯子供の背中の篆文だけは鮮かに讀まれた。文字は「章惇後」（後は生れ替りの意）の三字であつた。帝は驚き且つ歎ぜられた。

『章惇が國事を誤つたのが、京師までも攻落さるゝに至つた發端だつた。その天罰が今子孫の上に廻り來たのだ』

田舍宿に天國の喜び

雷雨は收まつたが、俄の洪水になつてその夜は民家に宿せられた。燕京へは尙七百里あつて、こゝは擅州北斯縣といふ處だといふ事であつた。

平順州といふ城へ入ると、そこは頗る繁華な町で、殆ど燕京に類するものがあつた。阿計替は帝をお供して州廳に同知に謁し、その命令で驛舍に泊ることになつた。酒も肉も澤山に支給された。帝は寢室へ入つて見られると、粗末ながらも寢臺夜具が備はり、机や腰掛も置いてあり、帳や幕も張つてあつて、一通り體を具へてゐた。帝は思はず、

『おゝ復た天上を見ることが出來た』と喜ばれた。土の上や草の中に冷たい夢を結びかねる境遇に、永い事苦まれた帝は、田舍宿にも天國の感を抱かれたのであつた。

燕京を去る僅に廿里といふ水平鎭まで來て、入京は明日として山寺に一夜を過すことゝした。衞兵等も帝と同じところに臥つた。

奇怪な對話

一同はぐつすり寢込んだが、帝と阿計替とは目が冴えてゐた。すると隣の室らしいところに話し聲が聞えた。寺僧が二人で話してゐるらしい。

『因果といふ事があるだらうか』

『無いといふことが言へるものか、那の人はその前身は玉堂の天子だつたのだが、玉皇の說法を聽かなかつたゝめに、人間界へ謫せられて生れて來たのだ、ところが人間界でもやはり佛法を滅ぼしたからこそ、遠く北地の憂目を見たではないか』

『もう太抵數千里の外で死んだゝらうな』

『もう死んださ』

『水火の中に葬つたらうな』

帝は慄とした。正しく父帝の身の上を語つてゐるのである。起き上つてその室へ行かうとされたが、狹い室內には足の踏み場もなく衞兵等が臥し亂れてゐるので出られなかつた。話聲は尙も續いた。

『南の康王はどうしたらうな』

『那の人には周易六十四卦を讀了させてからの事さ』

解らない我が身の上

『少帝は何うする』

帝はスワ我が身の上と一層耳を欹てられた。

『那の人は天羅王だ、その内に又天へ歸るさ、だが馬足の報は免れまいな』

それからまだ〳〵二十年も先の事を話してゐた。金の事宋の事いろ〳〵あつた。雞が鳴く頃になつて、急に寂りして聲は絶えた。帝は阿計替と約束して、夜が明けたら僧に逢はうと考へてゐられた。

豫言を解いて的中

夜が明けたから、二人は戸を押開いて隣室へ入ると、その室は堆かき塵埃で、凡そ四十年も人が這入つた事の無い様子であつた。それから方々寺中を捜したが、寺僧などは一人もゐない。附近の住民に尋ねると、兵火に罹つたまゝ久しく無住の寺だといふ事であつた。

『あの談話は皆思ひ當ることばかりだが、周易六十四卦を讀ませるといつたのと、馬足の報といつたのは何だらうね』と帝は阿計替に尋ねられた。彼は存外了解がよくて、

『康王の在位六十四年といふ意味でせう、それから馬足の報といつたのは、きつとあなたに、これから馬にお乘りになるなと戒めたものでせう』と答へた。この解釋は後になつてなるほど〻思ひ合せられた。斯うなると阿計替までが歩々仙人臭くなつて來る。

帝王の面影絶えて久し

廿二、少康を得た燕京の生活

一行は燕京へ到着した。先づ元帥府へ行つて粘罕に謁せられた。途中で市民は一行の通るのを見て、或は泣いて見送り、或は近づいて問ひ勞はる者も多かつた。

帝は絶て久しい粘罕の前へ出て、覺えず跪いて拜をされた。十年來帝はお辭儀のし通しだつたから、今威容堂々たる元帥の前へ出て、へタ〳〵と跪かれたのも無理はない。粘罕は苦笑してちよいと答禮をした。

帝に酒食を與へ、阿計替に命じて帝の入朝が許されるか否か、その筋の都合を訊かせ、今晩は兎も角も海濱侯耶律延禧と一處に置くやうに申し附けた。

此處で永年の馴染だつた阿計替の任務は解除された。その他の護衛兵等一同もそれ〴〵官に補せられたり金帛を賜つたりした。

帝は新に元帥府の役人の手で、ある官府へ導かれた。其處では既に勅旨によつて、帝

を海濱侯と同じく羅院へ置く事に定めてあつたので、帝は直に一小室へ入れられた。海濱侯延禧は既に其處に來てゐた。

遼の天子だつた耶律延禧は帝を見て、

『お久しぶりですね、趙公は何處からおいででした』と尋ねた。

『私は彼方此方と五六千里も引摺廻りされましたよ、途中で父母妻子は皆亡くなりますし、お話にならぬ艱難を嘗めて來ましたよ』

『いや私も公と似たり寄つたりですよ、私も海耀州から來たのですが五千里は歩きましたよ、先年燕京でお別れして以來の辛苦は、お互に何度死ぬかと思つたか知れません、兎も角も今日命存へて、再び此處に廻り逢ひましたのは皇恩だと思ひます、天へも昇る心地とでも言ひませうか』

左右の者は、むだ話をしてはいけないと戒めた。二人は一つ床にその夜を過されたが、夜が明けるまで双方とも默つてゐられた。

翌日二人は別の所へ案内された。それは美しく掃除された家で。二人にはそれ〴〵椅子が與へられた。帝も延禧も、

延禧との邂逅に互の身の上話

『こんなものに坐するのは十二年目だ』と喜ばれた。

十二年ぶりの坐り心地

其處へ紫衣の人が聖旨を傳へて來た。

『耶律延禧と趙某とは竝に朝見を免し、共に鴻翼府に入らしむ』といふのであつた。金の鴻翼府は中國の鴻臚館で、外使擯待の官邸であるから、二人はお客分といふ待遇になつたのである。二人は再拜して恩を謝せられた。それから冠服も賜はり、鴻翼府内の小室に二人は同居された。

金の皇帝にも謁見したし、朝夕には飲食物も運ばれた。それ等を特つて來る者は數人交替で、餘所ながら嚴重に監視する風であつた。果して二人は油斷して失策した。

兩侯引分けらる

或日海濱侯が帝の手を執つて何か囁いた。帝はそれを聞き手を拱いて額に加へ、皇天〻〻と感謝された。その爲に二人は忽ち同居を禁ぜられて、淋しく引分けられた。帝は安養寺といふ寺へ入れられた。そこへは又阿計替が監守人としてやつて來た。帝は折〻は寺僧と閑談されることもあつた。

或日阿計替は他の監視人などを遠ざけて、密かに帝へお知らせした。

『中國の天子は臨安府に遷つて無事だといふ話です。南北の間がらは尚未だ穩かに納ま

りません。此方の朝廷でも現に講和の相談はあるやうで、黄河を界として、宋の三京は還し南北の民をそれ〴〵郷里へ歸復せしめる事になりさうです、さうなればあなたも南へお歸りになられます』

帝はたゞ有難う〳〵を繰返してゐられた。

帝は此の寺に二年ばかり居られた。一時は幽靈のやうに衰へてゐられたのも、次第に恢復して、先づ尋常の容貌になられた。

天眷十年になつて、帝は寺を出て、燕京の北に邸宅を賜つた。但しそれも監視嚴重で外から戸を閉ぢて番をしてゐるのであつた。金の婦人で重罪犯の者を一人、身の廻りの世話人に入れてくれた。そして毎月米五斗と薪一束とが支給された。水や火は門の内外で受渡しをして、飲食が畢ると火の氣といふものを置くことを禁ぜられた。實は錢も一千づゝ月々給せられるのだつたが、それは番人どもが預つて、入用なものをそれで支辨し、殘金は番人の懐に入るのであつた。室などは一通り人の住むやうに出來てゐたが、夜になつて燈が無いのは辛かつた。

翌十一年の秋、洗濯女の女囚が死んだ。又女が一人來たがそれは帝の室へは入らぬ番人が引留めて自分の妾にしてしまつた。それから帝は城東の玉田觀といふ道教の寺へ入られた。

帝少しく元氣になる

無燈に苦しむ

廿三、馬蹄にふみにじられて

天眷十六年（紹興二十三年）金の熙宗は殺されて、岐王亮が立ち、貞元と改元した。亮が帝位に即いてから、又欽宗帝に對する待遇が一變して、苛酷になつて來た。そして元帥府の外獄たる廨院へ移してしまつた。これで新帝亮は帝を助けて置かない所存だと察せられるやうになつた。

貞元は三年で正隆と改元され、その五年に金帝亮は、海濱侯延禧と天水郡侯たる帝とに騎馬打毬の練習を命じた。帝は貞元の始から永い牢獄生活で濕氣に中てられ、年は寄るし手足が震へて打毬どころの沙汰ではなかつた。然しそれを無理に馬に乘せられ打毬をやらせられた。正隆六年の春、帝亮は諸王文武百官を從へて講武殿に宴を催し、大閲兵式をやつた。その時延禧と帝とに各一隊を領して打毬をやらせた。その馬は痩馬ばか

金の新帝は害意あり

遂宋二帝一時に殺さる

り宛がはれた。既に仕合が始まると逞しい胡騎數百一隅から突進して來て、先づ延禧の胸を射貫いた。延禧は馬から落ちて即死した。帝は之を見て驚き續いて落馬された。紫衣の者が帝を起しもあへず射殺した。その屍體はそのまゝ馬の踏み躙るに委せた。この大仕掛の仕合は全く二人を殺さんが爲の式であつた。

帝は時に歳既に六十であられた。

金帝亮は既に先年宋の姦臣秦檜の手紙によつて、韓世忠等の恐ろしい大將連が居なくなつてる事を知つてゐたので、この年大に南征の軍を起すことにした。

九天より奈落の底まで　終

興亡のいろく

偉大なる秦の始皇

一

秦の先祖は五帝の一なる顓頊の後裔である。顓頊の十餘代後に非子といふ者があつて、牧畜の業に長じてゐた。依つて周の孝王が非子を用ひて馬を飼養せしめたところが、頗る好成績を擧げたので、孝王はその功を賞して秦の邑を與へた。之が秦の始祖とも云ふべきものである。非子より五代後の襄公の時に當り、西戎、犬戎が申侯と共に周の幽王を酈山の下に殺すや、襄公は兵を出して周の爲に戰ひ、且つ平王を助くる所があつたので、平王は之に對して岐より以西の地を賜つた。是に於て襄公は始めて一國を領し、諸侯の班に列することを得た。次いで襄公より八代の裔孫、繆公の時に至つて、百里奚及び蹇叔の二人を擧げて國政を掌らしめ、屢々晉と戰つて勝ち、又由余の謀を用ひて戎を伐つて大いに之を敗り、國を增すこと十二、地を開くこと千里、遂に霸を西戎に唱ふるに至つた。

偉大なる秦の始皇

秦の祖は牧畜の人

霸を西戎に唱ふ

秦の連戰連勝とその擴大

繆公の後十六代を經て孝公が立つた。公は鋭意治を圖り、人民を愛撫し、鰥寡孤獨を憐れみ、汎く戰士を招き、賞罰を明かにした。後商鞅を用ひて法を變じ、刑を修め、內は耕稼を務め、外は戰士の賞罰を嚴正にし、新に都を咸陽に移し、師を率ゐて諸侯を逢澤に會して天子に朝せしめた。かくて孝公は齊、魏、と戰ひて勝ち、晉と雁門に戰ひてその將魏錯を虜にし、兵勢大いに振ふに至つた。

孝公の子惠文公に至つて、著しくその國勢を伸展した。此時に當り秦は兵彊く國富み、頻りに外敵を擊破して勢ひ破竹の如く、領土を四方に擴張するに至つた。卽ち惠文公の六年には魏をして陰晉を秦に割讓せしめ、翌年更に魏を伐ち、その將龍賈を虜にして、首を斬ること八万に及び、八年には再び魏をして河西の地を割讓せしめ、翌年には汾陰、皮氏の二地を取り、十年には魏の上郡の十五縣を略取した。惠文公は卽位後十四年にして、自ら王と號し、此の年を以て改めて元年とした。秦の惠王卽ち是れである。惠王の五年に至り、韓、趙、魏、燕、齊の諸國が匈奴を帥ゐて共に秦を攻めたので、秦は庶長疾をして修魚に之を迎へ伐たしめ、その將申羌を虜とし、趙の公子渴、韓の太子奐を敗り、首を斬ること八萬二千に及んだ。九年には更に司馬錯をして蜀を伐ちて之を滅さしめ、又趙の中都、西陽の地を攻略し、十年には韓の石章を取り、翌年には魏の焦を降し、十三年楚の漢中を攻め、地を取ること六百里に及んだ。かくて惠王の時代に至つて秦の勢威は漸く四方に及ぶに至つた。

周王頓首して秦に讓る

惠王卒して武王立ち、次いでその弟昭襄王位に卽き、范雎を宰相とし遠交近攻の策を採り、更に白起を將として四方を攻略した。卽ち秦は當時到る處に連戰連勝し、楚からは新城、新市、宛、鄢、郢の諸地を攻略し、魏からは垣、安城、卷、蔡陽、長社、邢丘等を取り、韓からは武始、南郡、上黨を掠取し、趙からは武安、皮牢及びその他二十餘縣の地を攻略した。かくて秦の兵勢は隆々として諸侯を慴伏せしめたので、周の赧王は之を安からぬことに思ひ、竊かに諸侯と合從して秦を攻め亡さんと圖つた。依つて秦は兵を出して之を討つた、赧王は大いに恐れ、自ら秦に入り、頓首して罪を宥されんことを乞ひ、その邑三十六を悉く秦に捧げた。依つて周室の寶物であつた九鼎と大呂は秦に歸し、かくて武王以來二十七王、八百六十七年にして周室は遂にその社稷の祀を失つた、實に秦の昭襄王の五十一年の時であつた。

昭襄王卒し子の孝文王が立ち、次いでその子莊襄王が立つた。王は呂不韋を丞相と爲

し、更に蒙驁、王齮等を將として近隣を侵略せしめた。卽ち卽位の一年には蒙をして、韓を伐つて成皐、滎陽を取らしめ、翌二年には蒙をして趙に向ひ、太原を攻略して三十七城を取らしめ、三年には王齮をして上黨一帶の地を降さしめた。かくて莊襄王は卽位以來領土擴張のために殆ど寧日なく活動し、絕えず攻戰に從事したが、在位僅に四年にして歿したので、太子政が統を嗣いで立つた。是れ卽ち秦の始皇帝である。

人質としての莊襄王

二

秦は非子の時始めて秦の邑を得、襄公に至りて諸侯の班に列し、惠王の時自ら王と稱して威を四方に振ひ、次いで昭襄の立つに及び、著しく國力を伸長したのであるが、始皇帝に至り遂に六國を滅して天下を統一し、玆に秦は榮華、隆盛の極みに達したのである。かくて始皇は天下の覇權を掌握して絕大なる勢威を振つたのであるが、併し彼の幼時は寧ろ數奇なる運命にあつたと云はねばならぬ。

話は少し前に戻るが、始皇の父の莊襄王は、初め名を子楚といつて、孝文王の子であつたが、この人が秦の王位に卽かうなどゝは、初めのうちは誰ら豫期してゐなかつたので

呂不韋が深謀

ある。孝文王には二十餘人の庶子があつたが、その正夫人の華陽夫人には一人の子もなかつた。子楚は孝文王の庶子の中の一人であつたが、秦のために趙の國に人質となつて預けられてゐたのである。ところがその後秦は約に背いて屢々趙を攻めたので、趙では怒つて、秦の人質の子楚を虐待するやうになつた。かゝる次第で子楚は追ひ〳〵困窮して生活にも困るやうになり、その住家は荒れ果てゝ訪ふ者とてもなく、いとゞ詫しい生活をつゞけてゐたのである。この時陽翟の人で呂不韋といふ豪商があつたが、商業上の取引で屢々趙の都の邯鄲に來るうちに、遂に子楚と懇意になるやうになつた。彼は子楚が他國に流寓して困難に陷つてゐるのを見ると、流石に商人のことゝて、算盤勘定の上から、子楚を利用して大きな利益を得ようと企て、或日子楚を訪問して、

『私は貴方を立身出世させて見ようと思ひますが、いかゞですか』と問うた。

すると子楚は笑つて、

『まあ、他人の事を心配するよりも、先づお前の立身出世を圖るがよいじやないか』と云つた。

この時呂不韋は意味ありげに、

『いや、貴方が出世なされば、私も自然出世するやうになるんです』と呟いた。

子楚は之を聞くと、早くも呂不韋の心中を推察して、

『では一體どうしたなら俺が出世するか、一つお前の意見を聞かうじやないか』と思はず膝をのり出した。で、呂不韋は靜かに自分の考を談り出した。

子楚大に意動く

『今秦の王位に卽いてゐらるゝ方は、貴方のお祖父さんですが、王は大分高齢のことでありますから、軈て貴方のお父さんの安國君（後の孝文王）が王位を嗣がれるのは明かです。所が安國君には子供が二十餘人もありますが、まだ嫡子が定つてゐないのです。尤も安國君の長子の子傒は、王の覺えも芽出たく、その上土倉といふ謀臣などもあつて、有力な後嗣者とは目されてゐますが、それにつけても、貴方は人質となつて敵國によこされた位な方ですから、父君から疎んぜられてゐることは判り切つた話です。で此のまゝにしておいたなら、貴方はとても安國君の嫡子となることが出來ないのです』

『うゝ、如何にもその通りだが、それにしても俺が秦の嫡子となるやうなことが出來るだらうか』と子楚は深く怪しむやうに云つた。呂不韋はこの時さも確信のあるやうな態度で、

婦人の力を借るべし

立身の資本は千金

『えゝ　それは確かに出來ますとも……それには先づ華陽夫人の力を借りるのが一番よいのです。貴方のお父さんは夫人を非常に寵愛してゐますから、夫人に色々の珍しい財寶を贈つて、その歡心を買ひ、夫人から貴方を嫡子にしてもらふやうに賴むのです。私は貧乏ではありますが、今貴方のために運動費として取敢へず千金を出しませう。そして之からすぐに秦の國に行つて、安國君や華陽夫人に逢つて、屹度貴方を秦の太子として見せませう』と說いた。すると子楚は大いに悅び、

『若しお前のいふ通りに、俺が首尾よく秦の王位に卽くやうになつたら、屹度秦國を前と二人で治めることにしよう』と云つて、篤く呂不韋の厚意を謝した。

依つて呂不韋は千金の中から五百金を割いて、それを子楚に與へ、以て汎く四方の賓客と交る資金と爲さしめ、自分は殘りの五百金を以て色々の珍奇な財寶を買込み、それを揃へてはる〴〵と秦の都に旅立つた。

呂不韋の腹案は豫め十分に熟してゐた。彼は秦の都咸陽に着くと、すぐに華陽夫人の姉を訪ね、夥しい土產物を捧げて、老夫人を悅ばせておいてから、頻りに子楚の賢明なことや彼が汎く天下の賓客などと交遊して、名聲の籍々たることを述べた後、

『子楚は遠い敵國の都にゐても、遙に故國を偲び、常に華陽夫人を天として敬め、日夜泣いて父上の安國君と夫人とを戀ひ慕つてをります』と言葉上手に述べ立てたので、夫人の姉も大いに感心して、

『では何れ妹にもその事を話して悦ばせませう』と約束した。

呂不韋の吾物と辯舌とに依つて、すつかり魅せられてしまつた姉夫人は、早速華陽夫人を訪づれて、呂不韋のいつた一伍一什を夫人に取次いだ。

『昔から色を以て人に事へるものは、色が衰へれば愛が衰へると云つてをりますが、貴方は今こそ太子の寵愛を一身に集めてをられるものゝ、子といふ者のないのが何よりも貴方の不仕合はせです。ですから今のうちに早く王子たちから、賢明で孝行な方を選んで嫡子とし、將來その人を國王としたなら、たとひ安國君が亡くなつた後でも、貴方が勢力を失ふやうなことはありますまい。それには今趙に人質となつて行つてゐる子楚は、賢明なばかりでなく、常に貴方を慕ひ、尊敬してゐるといふ話ですから、之を嫡子としたなら、貴方は將來必ず幸福な月日を送ることが出來ると思ひます』と一所懸命になつて說きすゝめた。

身の安全を計れ

計畫通りに解決す

胎兒持參の美人

華陽夫人は姉の言葉に感動してしまひ、やがて一日折を見計らつて夫の前に出で、子楚を嫡子としてもらひたいと願つた。すると安國君は元より夫人を寵愛してゐるのだから、之に反對する筈もなく、直ちに之を承諾した。子楚を嫡子と定め、呂不韋を以てその後見役としたのである。

この時呂不韋は邯鄲の美姫を得て、之と同棲してゐたが、一日子楚を招いて酒をくみ交はし、さては美姫をして舞踊せしめて大いに酒宴の興を助けた。子楚はチビリ〳〵杯酒をあげながら、暫くは恍惚として窈窕たる美人の歌舞に見とれてゐたが、戀慕の情に堪へがたく、やがて呂不韋に向つて美姫を懇望した。呂不韋は初めこの申込を快からず思つたが、之れも畢竟は自分の立身する端緒であると觀念して、當時美姫が懷姙してゐたことを秘して、之を子楚に與へたのである。この美姫より出生した政が即ち後の始皇帝である。で、始皇は實は呂不韋の子だと云ひ傳へられてゐる。

かくて始皇は幼時父の子楚と共に趙の邯鄲に居り、その間危險の身邊に迫ることも屢々であつたが、漸くにして秦に歸り、後に父の子楚が首尾よく即位して莊襄王となり、その歿するや、始皇は僅に十三歳にして王位に即いたのである。かゝる次第で、莊襄王

が王位に卽き、次いで始皇も王となることを得たのは、偏に呂不章の盡力に依つたのである。であるから莊襄王は呂不章を丞相に任じ、次いで始皇の時に至り彼を尊んで相國と爲し、往昔齊の桓公が管仲を尊んだ例に倣ひ、仲父と稱したのである。

三

呂不章と李斯と

太后の醜聞

秦王政は相國呂不章に諸政を行はしめ、尙楚の上蔡の人李斯を擧げて客卿と爲し、かくて內政は事大小となく、概ねこの二人の方寸に依つて決定されたのである。之と同時に王は蒙驁、王齮、麃公等の諸將をして兵を率ゐて韓、魏、衞、趙の諸國を侵さしめて、着々として天下統一の事業に進んだのである。

この時に當り秦の宮廷の內部は著しく頽廢してゐた。莊襄王の死後秦王政の母太后は邯鄲以來の呂不章との情好を再燃し、王がまだ弱年で何事をも知らないのを幸ひとして、頗る醜態を演じたのである。然るに王がだん〳〵成長して事理を解するやうになつたので、呂不章は太后との醜關係が暴露して、禍の身に及ばんことを恐れ、太后の愛情を他に轉ぜしめやうと計り、嫪毐といふ者を宦官であると詐つて太后に薦めた。すると呂不章の計策は見事に成功して、爾來太后は呂不章との情好を忘れて、只管嫪毐をのみ愛するやうになつた。かうして二人は不義の淫樂を恣にして、醜聲屢々外に洩れるやうになつたが、遂に太后は姙娠して、二兒をさへ生むに至つた。かくて毐は長信侯に封ぜられ、その權勢は隆々として廟堂の大臣を凌ぎ、はては政治にまでも干涉するやうになつた。

禍を轉嫁せんと企つ

當時毐の私邸に於て使用した僮僕は數千人の多きに達し、身の榮達を求めんが爲に彼の舍人となるもの千餘人に及んだといふことである。以て毐が太后の恩寵を笠にして、如何に權力を振つたかを想察することができる。然るにその後王が嫪毐の非行を知るに及び、毒は嚴罰の身に及ばんことを恐れ、王の御璽及び太后の御璽を矯め、兵を發して雍の祁年宮を攻めんとしたが、王は之を咸陽に破り、毒を執へて誅戮し、尙その三族を誅戮するに至つた。

呂不章も遂に終を完うせず

次いで王は嫪毐の事件には更に呂不章も關係してゐることを知り、彼を誅戮せんとしたが、彼は父王を秦の王位に卽けた大功があるので之を殺すに忍びず、依つて相國を免じて河南の知行所へ遂ひやることゝした。かくて不章は怏々として二年の憂き月日を配處に送つたが、王の怒り益々甚だしく、更に家族と共に蜀に遷されることゝなつたので、

憂憤の結果遂に鴆酒を飲んで自殺してしまつた。

王は嫪毐と呂不韋とを罰したけれども、その怒尚已まず、遂に太后を雍の賓陽宮に幽閉した上に、毐との間に生れた二兒を執へて殺害してしまつた。この時太后の事について王に諫言をする者が多かつたので、王は之を阻止しようと思ひ、諫爭者を捕へてその四肢を斬り落し、屍體を累々と王宮の階下に積み重ねておいたが、その數が二十七に及んだと云ふことである。時に齊の人茅焦といふ者が來て、諫言をしたいと申込んだ。依て王は、

『其方はあの積重ねた屍體が目に入らぬか』と取次の者に云はせると、焦は平然として、『天には二十八宿があると申しますが、今闕下に積んだ屍體は二十七箇だけであります。で、臣の諫言に罷り出ましたのは、二十八宿の數にしたい爲であります。私は聊かも死を怖れる者ではありませぬ』と答へた。

二十八宿と諫臣の數

王は之を聞くと烈火のやうに怒り、焦を引出させて、之を罵ると、焦は從容として、『今陛下の行はれることは、誠に狂悖の行と申すより外ありませぬ。陛下は無慘にも母の夫たる者を殺し、たとひ父を異にするとはいへ、二人の弟を縊り殺し、その上太后を

幽閉して、それについて諫言をする忠臣を容赦もなく殺害されるのです。昔から暴君と云はれてをる桀、紂でさへ、これほどひどい事はしなかつたのです。今若し天下の人が之を聞いたならば、秦のために統一しかけた人心は忽ちに瓦解して、恐らく秦に心を寄せるものは一人もなくなるでありませう。私は之を心配するので、敢て死を冒して陛下に諫言を致すのであります』と云ひ放つた。

始めて諫言を納る

すると秦王は始めて前非を後悔し、厚く焦を賞して上卿の爵を賜はり、車駕に陪乘させて直ちに太后を咸陽に迎へ、甘泉宮に居らしめて、元の通りに之を優待した。

かくて宮廷の廓清が一段落つくと、大臣等は會議を開いて、更に内政の改革を圖り、先づその第一とし逐客令を發することゝなつた。といふのは、當時秦の國勢が隆盛となつたので、多くの説客どもは、何れも功名榮達を求めようと思つて、諸國から陸續として秦の國に集つてきたのである。然るに秦の大臣どもの考では、諸國の遊説の士が秦に仕へるのは、秦の利益を計るためではなく、却つてその舊主の爲に遊説するのが目的であるから、彼等は秦に取りては寧ろ有害であると云ふのである。で、秦では之がために逐客令を出して、國内より諸國の説客を一掃することゝなつた。この時李斯が上

逐客令發布の必要

秦の強大は說客の力

書して、

『昔穆公、孝公、惠王及び昭襄王が何れも秦の國を盛ならしめたのは、百里奚や商鞅や張儀や范雎等の說客を用ひられた爲であります。是等の說客はいづれも秦の爲に粉骨碎身の誠を致し、絕えて他國の爲に計らなかつたのです、若し秦が今天下を統一せんとする時に當り、他國の人だからと云つて賢才豪傑の士を悉く國外に放逐するやうな狹い量見では、天下を統一することなどは思ひもよらぬことゝ存じます。寧ろそれよりも汎く門戸を開放して、天下の賢才英傑の士を迎へるのが刻下の急務であると思ひます』と痛論した。依つて王も成程と思ひ、李斯を再び官に復し、俄に逐客の令を撤廢することゝなつた。

六國漸く亡び盡す

秦は鋭意內政を改革すると同時に、外に向つては連年兵を出して天下統一の事業に突進した。卽ち王の十七年には內史騰が將として韓を攻め、その王女を擒として韓を滅し、十九年には王翦、姜廆を將として兵を出して趙を滅し、二十二年には王賁、魏を攻めて之を滅し、二十四年には王翦、楚を滅し、二十五年には王賁、燕を滅し、二十六年には王賁、齊を滅した。是に於てか六國悉く滅びて四海一に歸し、周末四百年の長期に亘つた攻伐紛亂は遂に一掃せらるゝに至つた。時に秦王三十八歲の時である。

皇帝と稱し制と詔とに改む

四

秦王は天下を統一して、自ら思へらく、我が德は三皇を兼ね、功は五帝に過ぐと。そこで王の稱號を改めて自ら皇帝と稱し、皇帝の命を『制』といひ、令を『詔』といひ、皇帝の自稱を『朕』と云ふことに定め、尙死後の謚は子が父を議し、臣が君を議するものであるとの理由から、爾後之を廢し、自ら始皇帝と號し、その以後を第二世、第三世と稱し、以て萬世無窮に傳ふべしと令した。

李斯封建の弊を論ず

既に天下を統一し、秦王は皇帝と號するに至つたが、更に玆に問題となるのは、國內の政治組織を如何に定むべきかと云ふことであつた。依つて丞相の王綰（おうわん）等は、

『燕や齊や荆の地は、帝都を距ること極めて遠く、十分に朝廷の命令が行き屆かないから、是等の地方には王をおいて治めるより外ありますまい。で、皇子等を立てゝ王と爲し、以て是等の地を治められるがよいと思ひます』と奏した。すると李斯は之に對して、

『昔周の武王は同族の子弟を多く各地に封じたが、後には是等の諸國が疎遠となり、互

に割據して攻戰に日を送つた爲に周室は滅亡したのであります。で、諸侯をおいて國内を治めしむることは、將來のためによくないと思ひます』と主張した。

依つて始皇は之に從ひ、天下を分ちて三十六郡と爲し、郡に守、尉、監を置くことゝなつた。是に於て從來の封建制度は廢せられて郡縣制度となり、地方分權主義は滅びて中央集權主義が確立されることゝなつた。そして始皇は全く國内を鎭定して、再び爭亂の起らないやうにと苦心し、それには兵器が國内にあると再び叛亂の起る恐れがあるから

天下の武器を收む

と云つて、悉く之を沒收して咸陽に集め、それを改鑄して新に十二の銅像を作つた。之と同時に從來天下は六國に分れ、その法律、制度が區々として一定してゐなかつたので、新に法令、度量衡、車軌等を一定し、尙道路を開通し、運河を開鑿して生産、交通の發達を圖つた。

かくて秦の地は東は海に至り、朝鮮に及び、西は臨洮、羌中に至り、南は北戸に至り、北は黃河に據りて塞を作り、陰山に沿ひて遼東に至り、玆に彪然たる一大國家を現出するに至つた。

天下定まり、國内の諸政漸く整ふや、始皇は帝王の權威を萬民に示さんと欲し、鹵簿堂々として四方を巡狩した。卽ち二十八年には嶧山より泰山に上り偶々大雨に遭ひ、松樹の下に雨宿りをしたといふので松樹を封じて五大夫と爲した。湘山では大風俄に起つて江を渡ることができなかつたので、博士に向つて、湘山に祀つてある神の名を訊くと、それは堯の娘で、後に舜の妻となつた娥皇、女英の二人を祀つてあるのだと答へたので、大いに怒つて湘山の樹木を悉く伐つて、全山を裸山としてしまつた。

始皇の示威的巡狩

三十二年に始皇は更に北方の邊境を巡行した。その時燕の人盧生といふものが、鬼神の事を以て未來のことを記した書冊を献上したが、その中に『秦を亡ぼすものは胡なり』といふことが書いてあつた。そこで始皇は大いに怒つて、將軍蒙恬をして、兵三十萬人を率ゐて匈奴を討たしめたが、それでも安心ができないと考へて、胡の襲來を防ぐために萬里の長城を築造した。それは臨洮を起點として遼東に至り、蜿蜒として東西一萬餘里に及ぶものであつたが、之を築造するために要した經費と人間と時間とは莫大なものであつた。兎に角彼なればこそかゝる大規模のものを作ることができたのである。

讒言を憂へて長城築造を遂ぐ

三十四年に丞相李斯が上書していふのに、往時天下が亂れた時には、諸國は遊說の士を招いて、自國の富强を計つたのであるが、今天下は旣に定つたので、人々は各々その分

讀書を禁ずるの外なし

に安んじてゐるのがよいのである。然るに今の諸生は徒らに昔を尊び、今の政治を誹謗するものが少くないが、之は彼等が徒らに役にも立たぬ書籍を讀むためだと思ふ。で、之を防ぐために歴史官の所藏する書籍の中、秦の記錄でないものは悉く之を燒き棄て、又博士でないもので、詩書や百家の書を所藏するものには、悉くその書を差し出させて、之を燒却することにし、たゞ醫藥卜筮、種樹の書籍だけを殘しておきたい。又竊かに詩書を談論する者はその屍を市に曝し、古を尊び今を誹謗する者はその一族を誅したいと。依つて始皇は李斯の獻言に從ひ、令して汎く之を國民に行はしむることにした。然るにその翌年に至り侯生と盧生といふ二人のものが、痛く始皇の政治を非議して、そのまゝ洛陽を逃げ出したので、始皇は大いに怒り、察する所咸陽にゐる他の書生どもの中にも、朝廷を誹謗するものが少くあるまいと云つて、之を嚴重に調べた上、四百六十餘人の書生を坑の中に入れて殺してしまつた。この時長子の扶蘇が始皇を諫めて、

學者を坑中に焚殺す

『彼の書生等は昔の聖人孔夫子の說を學ぶもので、仁義を尊び、道德を重んじ、いづれも概してその心掛の正しいものであります。然るに陛下は獨り法のみを重んじ、彼等を罰することが餘りに過激に流れて居ります。天下のものが之を聞いたならば、屹度秦に叛くものが出て來はしないかと心配してゐるのです』と云つたが、始皇は之を聞くと大いに怒り、扶蘇を帝都より逐つて、上郡に赴かしめ、以て蒙恬の軍を監督せしむることゝした。

阿房宮の大規模

三十五年に至り始皇は大いに宮城を築き、その外觀を莊嚴にし、勢威を四方に示し、且つ帝王の生活を樂しまんとした。そこで正殿を渭南の上林苑の中に造營せんと企てたが、之を作る前に、先づその前殿を阿房の地に築造することにした。その規模の廣大なること、東西五百步、南北五十丈に及び、殿上には万人を坐せしむべく、殿下には五丈の高さの旗を立てることができた。又宮殿には長い〳〵廊下を幾條も作つたので、之を傳はつてすぐに南山に行くことができた。南山には大きな門を作り、又上下二重の高い廊下を作り、それを傳はつて阿房から渭水を横斷して、咸陽の宮殿に行くことが出來た。

この宮殿は澤山の經費と人間とを使つて、日夜工を急いだけれども、始皇の在世中には竣工しなかつた。で、宮殿にはまだ名がつけられてゐなかつたが、阿房の地にあつたので、世人は之を阿房宮と呼んでゐた。そして始皇は諸國より多くの美女を集めて、この金殿玉樓に贅澤な酒宴を催し、歌舞絲竹の間に、ありとあらゆる人間の歡樂を極めたのであ

つた。

三十七年には始皇は李斯、宦官の趙高と末子の胡亥等を從へて、又々東方に巡狩したが、途中で病に罹り、遂に沙丘に於て崩じた。在位三十七年、齢五十であつた。

桑花の夢は五十年

五

法の人力の人

始皇は天性强情我慢で、堅く自説を採つて他人の意見などは聞かない性質であつた。彼は幾分李斯などの影響もあつたらうが、兎角法律を重視して文教を輕んじ、飽くまでも力を信じた、强固なる意志の所有者であつた。彼の最も熱中した事業は天下の統一といふことで、武力を以て六國を統一した後には、更に法律、制度をも統一し、尙諸國の風俗習慣をも統一し、甚だしきに至つては、思想の統一をも强行したのである。即ち儒書を燒棄し、儒生を坑にした如きは、己の思想を以て天下幾万人の思想を統一せんとしたものである。併しながら彼が從來の政治組織を改變し、封建制度を排して郡縣制度と爲し、地方分權主義を改めて中央集權主義と爲したのは、以て國家の主權に鞏固なる基礎を與へんとしたものである。

無限の專制主義

要するに彼は天下統一なる目的に到達するためには、毫もその手段を選ばなかつた。元來法治萬能派の使徒として覇道を尊び、力の福音を信じて武力主義を謳歌した彼は、徹頭徹尾力を以て天下の統一に從事し、苟くも自己に抗するものは、之を粉碎しなければ已まなかつた。その結果として彼の欲する所、彼の命ずる所は一も行はれざることなく、爲に極端なる君主專制主義が行はれるやうになつた。而して彼は獨り人間のみを專制威壓したのみならず、更に甚だしきに至つては神靈及び無情の木石をすら自己の意思に從はしめんとした。例へば彼が泰山の松を封じて五大夫と爲し、又湘山の神を叱して全山の樹木を伐採せしめた如きは、明かに彼が專制主義を無限に行使せんとした證左である。そして彼は實に武力主義と專制主義とを以て天下を統一したのであるが、その滅亡もやがて此の二の主義に累せられたものであつた。

とはいへ始皇は帝王として偉大な人物であつたことは之を否定することができない。彼は豪宕雄大の資質を具へ、毫も小事に齷齪せず、その考ふる所、その思ふ所、恰も天馬空を往くが如く、絶えて凝滯する所がなかつた。彼が幾千萬の黃金と幾千萬の人間を驅使して阿房宮や萬里の長城を築造した如きは、一見突飛な事のやうに思はれるが、か

〻る事業は彼の如き規模雄大な人物でなければ之を實行することができない。之を以て彼を愚なりといひ、痴なりといふ者はあるが、その雄大さに至つては畢竟彼に匹儔するものがあるまい。たゞ前にも云つた通り、彼が偏に武力主義のみを謳歌して、道德文敎の點を輕視した結果、長く國民を心服せしむることのできなかつたことは、かへすがへすも彼のために惜まなければならぬ。

秦の天下僅に十五年

一

秦の始皇は武力を以て六國を滅ぼし、宇內を併呑して自ら始皇帝と稱し、連綿として統を萬世に傳へる所存であつたが、巡遊中に沙丘の平臺にその五十年の生涯を終ると、陵土未だ乾かざるに群雄忽ちにして四方に蜂起し、萬世どころか三世子嬰（しえい）の時に秦は忽ちに滅亡するに至つた。曾ては美姬麗人を集めて天下の春を樂しんだ咸陽の諸宮も、今は敵の一炬に燒失して、空しく廢址の秋を照らす月の影のみ寒く、げに秦室の末路は槿花一朝の夢よりも果敢なきものであつた。

始皇帝の三十七年十月癸丑、皇帝は東方を巡狩して兗州まで來たとき、一夜夢に東海の龍神と戰つたが、之にうち勝つことができないので、一所懸命に逃げ出してくると、やがて漫々たる大海の岸に出た。で、今はいづくにも遁るゝ所がなく、進退谷まり、たゞ茫然として佇んでゐると、突然天空より一匹の赤龍が降下して一口に己れを呑んだので、

驚き叫んだ途端に、はしなくも彼は夢から覺めたのであつた。始皇はそれから心思怏々として樂しまず、五體倦怠して兎角氣分がすぐれなかつたが、遂に平原津に至つて病を發するに至つた。それでも病を押して車駕をすゝめたが、痛く神經が昂ぶり、はては『死』といふ言葉を忌むやうになつたので、群臣は相戒めて、敢て死のことを云ふものがなかつた。かくて沙丘に至つて病ます〳〵重く、遂に自ら起つ能はざるを知るや、始皇は密かに李斯を召して、

起つ能はざるを知る

『朕は先年東海を埋めて龍神を犯したことがあるが、今龍神と戰つて負けた夢を見て病氣となつたからは、恐らく本復することはむづかしいと思ふ。それで朕が死んだ後は、長子扶蘇に位を嗣がせるがよい。朕先に誤つて彼を上郡に逐ひやつたが、彼は仁愛の情に富み、慈悲の心があるから、國君としては誠にふさはしい者である。必ず彼を以て秦國の君とせよ』と云つて、傳國の璽書を中車府令の趙高に渡した。

李斯等喪を秘す

李斯は若しこの時始皇の崩したことが世間に知れ渡つたならば、諸公子が位を爭ふばかりでなく、忽ち天下が亂るゝことを豫知し、喪を秘して發せず、たゞ之を知るものは少子胡亥と趙高と、始皇の左右に侍してゐた五六の宦官だけに過ぎなかつた。で、彼等は密かに始皇の屍を棺に入れて車の中に置き、之に政治を奏したり、食事を上つたりすることが平生と毫も異ることがなかつた。折しも時は七月のことで、炎熱灼くが如く、爲に腐敗した屍の惡臭が屢々車外に洩れ出たので、之を紛らすために車の後に鮑魚一石を積みこませたと云ふことである。

繼嗣問題と趙高

當時秦の樞機に關與して最も勢力のあつたのは丞相李斯であつたが、それにも增してメキ〳〵と勢力を占めてきたのは趙高であつた。彼はもと獄吏であつたが、刑法に通ずる所から始皇に用ひられ、始皇の末子で、最も帝に愛せられてゐた胡亥に法律を敎へてゐた。そのうちに佞奸な彼は巧みに始皇の氣に入るやうに立ち廻つて、偏にその信任を得ることに努めたので、頻りに累進して、遂に政治上に大なる勢力を有するやうになり、今や國内では押しも押されもせぬ有力な者となつてゐたのであつた。

然るに始皇が崩じたときに、先づ第一に趙高の心中に思ひ浮んだことは、その後嗣問題であつた。即ち次に位に即く皇帝の如何は、彼の政治上に於ける勢力に絶大の關係を有するのであつた。で、趙高は如何なる犧牲を拂つても、自分に有利な人を後繼者とする必要があつた。然らば始皇の遺詔通り、扶蘇が立つたら何うかといふに、その場合には

趙高は全然政治上より失脚しなければならなかつた。といふのは、扶蘇は賢明にして、常に高などが始皇に向つて追從阿媚してゐるのを見て苦々しく思つてゐたからである。之に反して胡亥は幼少の時から彼が教育して、非常に親しい關係があつたから、若し胡亥が立つならば、趙高は諸政を思ひのまゝに行つて、益々權勢を張ることができるのであつた。で、趙高は始皇の遺詔を矯めて、胡亥を帝位に卽けようと決心し、密かに之を李斯に相談すると、李斯は、

『俺は今まで先帝の厚い御恩を受けてきたのだから、何んな理由があらうとも、人臣の分として先帝の遺詔に背くわけには行かない』と反對した。

趙高は之を聞いて、

『では伺ひますが、若し扶蘇が帝位に卽かれたなら、帝は貴方を寵愛されませうか、それとも蒙恬を寵愛されませうか』と訊ねた。

巧に李斯を脅かす

『うむ、それは扶蘇が長い間蒙恬と一緒にゐて、辛苦艱難を共にしたから、俺よりも蒙恬を寵愛されるのは判り切つた話じやないか』と答へた。趙高は輕く首肯いて、

『如何にもその通りです。太子扶蘇は賢明な上に決斷力があり、それに貴方とはあまり親しくないから、若し帝位に卽いたなら、屹度貴方の官を剝いで蒙恬を丞相とし、遂には貴方を誅戮するに相違ありません』と說いた。それでも李斯は

李斯遂に動かさる

『たとひ俺はどんな災難に逢はうとも、今更先帝の遺詔を改める意思は毛頭ない』と頑强に之を拒絕したが、趙高が再三利害を以て說いたので、遂に心ならずも之に從ふやうになつた。依つて李斯は詐つて、沙丘で始皇の詔を受けたといつて、胡亥を立てゝ太子と爲し、更に書を作つて公子扶蘇、及び蒙恬に死を賜つた。

かくて李斯等は柩を乘せた車に供奉し、晝夜兼行で咸陽に歸つてきて、始皇の喪を發すると同時に、少子胡亥を帝位に卽けた。これ卽ち二世皇帝である。

二

低級な二世の希望

二世皇帝は、東方の郡縣を巡狩して、歸つてきてから或日趙高に向つて、

『朕は旣に帝王の位に卽いたから、之れからは耳目の好む所に從ひ、心志の樂しむ所を行ひ、逸樂燕遊に耽つて壽を全うしたいと思ふが、それには一體何うしたらよからうか』と問うた。すると趙高は、

愚劣極まる進言

『それには先づ法律を嚴重にし、刑罰を苛酷にして、從來の尊大頑固な大臣どもを除き、陛下の親しい者どもを擧げ用ひられたならば、陛下は誰にも憚ることなく、思ひのまゝに燕樂せられることが出來ようと思ひます』と奏した。

二世は之に從ひ、爾後硬直な大臣や公子などに寃罪を着せて無暗に之を誅戮し、或は一時に六人の公子を誅戮したことなどもあつた。又そのとき公子將閭といふ者があつたが、矢張り趙高のために忌まれて、兄弟二人と共に內宮に囚はれてゐたが、その斷罪が遲れたといふので、二世は使を遣はして斷罪を督促したので、將閭は大いに怒り、身の罪なきことを絕叫して、二人の兄弟と共に自殺したといふことである。かうして趙高は自分の邪魔になる前朝以來の忠臣や公子などを多く誅戮したが、彼の最も憚つてゐるのは李斯であつたから、何卒之をも滅したいと考へた。で、一日彼は李斯を訪ねて、

未だ目の上の瘤がある

『今關東の諸侯が悉く秦に背いて國家が危いにも拘らず、天子は常に遊樂に耽り、その上阿房宮の大造營を繼續して、之がために要する費用は莫大なものです。所が之を諫める人は貴方を措いて外にないのです。で、どうか國家のためと思つて貴方から一つ陛下を諫めてもらひたいのです』と懇請した。

李斯は之を聞いて、

『實は俺も前から陛下をお諫めしようと思つてゐたのだが、陛下はいつも深宮にあつて、朝に出られないので、心ならずもお諫めすることができずにゐたのだ』と歎息した。

『それでは私がよい折を見計らつてお知らせしますから、そのときに陛下をお諫め下さるやうお願ひします』と云つて趙高は辭し去つた。

宴中に諂を請ふ

それから間もなく趙高は故意と、二世が宮中で美姬を集めて樂しく酒宴をしてゐる時を窺つて、李斯に諫言するやうにと告げたので、彼はかくとも知らず、二世が酒宴をしてゐたときに、三度までも拜謁を願つた。すると二世皇帝は大いに怒つて、

『朕にはいくらも閒暇な時があるのに、李斯はいつも朕が樂しく酒宴をしてゐる時にばかり拜謁を願ふのは、誠に朕を愚弄したやり方である』と云つた。

趙高は李斯を陷れるのは今であると思つて、

陷いるゝに妙を得たり

『李斯は先帝の遺詔を矯めて陛下を帝位に卽けたのですから、自分ではその功によつて王侯にでも封ぜられる積りでゐた所が、その恩賞がないので、快々として深く陛下を怨んでゐるのです。それに斯の長男の李由は三川の郡守となつてをりますが、楚の賊と通

じ、且つ李斯も内々楚人と往來してゐるさうですから、御用心が肝腎だと思ひます』とさも事實であるかのやうに述べた。

これから二世は漸く李斯を疑ふやうになつたが、趙高はこの機に乘じてます〳〵李斯を讒言したので、二世は遂に李斯及びその三族を斬つて、之を市朝に曝らさしめた。李斯は獄を出て斬られるときに、次男を顧みて、

『俺はお前ともう一度故郷の上蔡に歸り、犬をつれて東門を出て、昔のやうに兎狩りをして見たいと思ふが、今はもうそれも出來なくなつた』と云つて深く布衣時代の樂しみを追想したといふことである。

かうして趙高は彼の忌み憚つた大臣、元勳等を悉く誅戮してしまひ、己れは中丞相の位に任ぜられてからは、暗愚劣弱の二世を擁して誰に憚ることもなく、自分の思ひ通りのことを斷行したのである。

李斯の族滅

三

かくて内には佞奸邪智の趙高が專權を振つて惡政を行つてゐる時に當り、外には群雄が四方に起つて秦を亡さんとしてゐたのである。

始皇なればこそ壓制もきく

一體始皇は天下を統一してからも、李斯のやうな刑名學派の政治家を用ひ、威力一方で國家を治めて、少しも慈悲仁愛の政治を行はなかつたので、人民は何れも秦に心服しなかつたのである。けれども始皇のやうな威力ある專制君主が存する間は、國民の不平は兎に角壓迫されてゐたが、一度彼が歿して暗愚無力の君主が立つやうになると、群雄が蜂起して海内は恰も蜂の巣を破つたやうに騷擾したのである。

秦に對する反抗運動は早くも二世が卽位した年、陳勝、吳廣の徒に依つてその口火を切られた。陳勝は楚の陽城の人であつたが、曾て日傭人となつて田圃に出て耕作してゐたとき、一日その朋輩に向つて、

『俺が將來富貴の身となつたら、お前を立派な人に引立てゝやらう』と云つた。

朋輩は之を聞くと、

『お前は今たかの知れた日傭人じやないか、お前なんどが何うして立派な人間になれるものか』と云つて嘲笑した。

すると陳勝は

陳勝の豪語

『さて〳〵燕や雀のやうな小さな鳥は、鴻鵠のやうな大きな鳥の心を知ることのできないものである。それと同じやうに、お前のやうな凡人には、とても俺のやうな大人物の心中を推察することが出來るもんじやない』と豪語した。以て彼が早くより大志を抱いてゐたことが判る。

その後陳勝は吳廣といふものと秦の士卒九百人の長となり、漁陽の守備に赴くこととなつたが、折あしく途中で大雨に遭つて、進むことができず、そのため規定の日限までに漁陽に到着することができなかつた。そこで陳勝は士卒どもに向つて、

王侯將相豈種あらん

『秦の國法は非常に嚴重だから、若し俺たちが期日におくれて漁陽に着いたならば、軍律に照らして屹度斬罪に處せられるに相違ないが、そんな事でムザ〳〵と死ぬのは全く犬死である。昔から王侯となり、將相となつて人の上に立つものも、決して俺たちと別種類の人間ではないのだ。で、俺たちも奮發さへすれば、王侯將相となるのは何の雜作もないことだ。だから俺たちは之れから漁陽へ行つて犬死をするよりも、寧ろ義兵を起して暴秦を討ち、若し失敗したなら潔く死んで名を萬世に傳へようと思ふが、お前たちの意見は何うか』と諮つた。

小群雄競ひ起る

すると士卒どもは何れも之に贊同したので、遂に元年七月、陳勝は兵を蘄に擧げて、自ら楚王となつた。次いで陳の人武臣も兵を趙に擧げ、自ら稱して趙王と號し、齊の人田儋も亦自ら立つて齊王となり、又楚の將周市は魏の地を定め、魏の公子咎を立てゝ魏王とした。併し是等の群雄と共に兵を擧げた者の中で、最も有力なるものは劉邦と項羽の二人であつた。

壯にして身を修めず

四

劉邦は沛の豐邑の人で、隆準龍顏にして、髯髯美はしく、左の股には七十二の黑子があつた。性仁慈にして人を愛し、好んで施與を爲し、快活豪放にして常に生產、家業を顧みなかつた。壯年にして泗水の亭長となつたが、酒と色とを好み、兎角放埒の行が多かつたが、二世の時に至り兵を沛に擧げてその令を殺すに及び、蕭何、曹參、樊噲及び沛の子弟三千人が之に從つて、兵威遠近に振つた。劉邦は後に秦を滅して天下を統一した漢の高祖である。

項籍、字は羽は楚の下相の人で、代々楚の將たりし家柄であつたが、その叔父項梁が

人を殺したので、項羽も共に亡命して吳に逃れたのであつた。項羽は若いときに書を學んだが、少しも上達しないので、之を棄てゝ劍道を習つたが、之にも成功しなかつた。それで叔父の項梁が羽の無能を叱つた所が、羽は、

萬人を敵とすべきのみ

『元來書は姓名を記すことができれば、それで十分だし、又劍道はたゞ一人を敵とするものに過ぎないから、そんな小事は骨を折つて學ぶ必要がない。私はそれよりも萬人を敵とする術を學びたい』と云つたので、項梁は之を奇として、それから兵法を羽に敎へることとなつた。曾て秦の始皇が會稽に遊んだとき、羽はその堂々たる鹵簿を見て、

『俺は始皇を討ち滅して、彼に代つて天下を掌握したい』と云つた。すると梁は慌てゝその口を掩うて、

『おい、馬鹿なことを云つてはいけないよ。若しそんな事が知れたなら、俺たちの三族が誅せられるよ』と云つて、深く之をたしなめたが、梁はこの時から羽の凡庸でないことを知つたのであつた。羽は身の長八尺餘、力能く鼎を扛げ、才氣人に過ぎてゐたから、吳中の子弟は皆羽を怖れ憚つてゐた。

さて群起した叛軍は次第に勢を得たのみでなく、燕、趙、齊、楚、韓、魏には悉く王が立ち、彼等はいづれも各道より咸陽に攻め上つてくる勢を示したので、秦の國家は今や危急存亡の秋に立つたのである。それにも拘らず趙高は出來るだけ此の事情を二世に祕し、以て責任を逃れようと思ひ、あまつさへ秦の將軍章邯が項羽のために破られ、頻りに援軍を乞うて來ても、之に對して援兵さへも送らず、二世に對しては、

國の亡びるをも知らず

『近頃盜賊どもが關東に亂を起しましたが、既に全く鎭定いたしましたから、決して御心配には及びませぬ』と云つて、ひたすら一時を糊塗してゐた。で二世は天下の形勢が今どうなつてゐるのか少しもそれを知らなかつたので、安心して日夜酒色に溺れ、遊樂に耽つてゐる間に、秦は刻々と滅亡の域に近づきつゝあつたのである。かくて趙高は國家の危急を餘處にして、偏に自分の勢力を伸ばすことにばかり汲々としてゐたが、一日、群臣がどの位自分の命令に服從してゐるかを試さうと思ひ、一疋の鹿を馬だといつて二世皇帝に献上したところが、二世は笑つて、

『丞相は思ひ違ひをしてゐるのだ、それは馬でなくて鹿ではないか』と云つて、左右の侍臣に訊ねると、侍臣の中には趙高に阿つてそれを馬だと云ふものもあり、又正直に鹿であると云ふものもあつた。それを趙高は傍にゐて聞いてゐて、後になつて、鹿といつた

鹿を指して馬とせざれば誅せらる

ものをば密かに殺害したので、百官は爾來高の威勢に怖れて、その命令に逆ふものがなくなつた。

そのとき項羽は秦の大將の王離を鉅鹿の下に虜にして、その勢ひ破竹の如く、各地の群雄は一齊に之に應じて、關東の地は悉く秦に背いたのであるが、沛公はいち早くも數萬の兵を率ゐて既に武關を屠り、密かに趙高に使を送つて降伏を勸誘したのである。かうなつては流石に奸智に長けた趙高も到頭納まりがつかなくなり、若し天下急迫の狀態が二世皇帝に知れたなら、今までの隱蔽の罪に問はれて、當然誅戮は免れぬことと考へ、爾來病と稱して朝見しなかつた。

五

二世は一夜白虎が現はれて、帝の車駕を引く馬を嚙み殺した夢を見、大いに心配してその夢を占はせたところが、卜者が

『それは涇水（川の名）の神が祟をなすためであります』と答へたので、二世は望夷宮に於て齋戒し、犧牲として四匹の白馬を涇水に沈めてその神を祠り、尙使者を趙高の許

水神の祟

弑逆の相談忽ち成る

に遣はして、

『お前は先に、盜賊どもが既に鎭定したと云つたが、實際はまだ少しも平定しないさうじやないか。お前は何うして今までそれを朕に隱くしてゐたのか』といつて之を責めた。是に於て趙高は大いに當惑し、密かに自分の婿である咸陽の令の閻樂といふものと、弟の趙成とを招いて、

『今まで俺は諸國に叛軍の起つたことを陛下に隱してゐたが、陛下は今漸くそれを知つた樣子である。すると俺は今までの罪によつて誅戮されるかも知れないから、寧ろ機先を制して陛下を弑殺し、その後に扶蘇の長男の嬰を位に卽けやうと思うが、どうか』と相談した。すると彼等は一議にも及はず之に贊成し、遂に郎中令に旨を含めて天子の節符を得、帝都に盜賊が入り込んだと詐つて兵を集め、閻樂が之を指揮して望夷宮の門に押し寄せて、

『賊がこの中に入つてゐる』と云つて開門を迫つた。すると宮門の番人は、

『宮城は平生守護職がゐて嚴重に守つてゐるのだから、賊などの入る道理がない』と云つて開門を肯んじなかつたので、閻樂は怒つてその首を刎ね、一同どつと許りに喊聲を

あげて宮殿に亂入した。かくて郎中令は閻樂と共に宮殿に入り、二世の御座の幃へ矢を一條射かけると、二世は之を見て大いに驚き且つ怒つて、左右のものどもを喚んだが、既にそのときには彼等の影も形も見えず、たゞ一人の宦官が彼の傍に侍してゐるばかりであつた。で、二世は彼に向つて、

『その方は何故こんな騒となるのを早く朕に知らせなかつたのか』と訊くと、彼は、

『いや私はそれを申上げなかつたからこそ、之れまで陛下のお側に居られたのでございます。若しそれを申上げたら、とうの昔に殺されてゐたので御座いませう』と答へた。

今まで命を保つた所以

二世は之を聞くと徒らに切齒して、悲憤の涙にくれるばかりであつたが、この時閻樂はつか〳〵と二世の前に進んで、さも輕蔑するやうに彼を睨みつけながら、

『貴方は今まで驕り高ぶり、無暗に人を誅戮して無道であつたゝめに、天下は悉く貴方に叛いてゐます。で、貴方は今早速自分で身の始末をおつけなさい』と云つた。

すると二世は初めて惡夢から覺めたやうに

『朕は今丞相に逢ひたいのだが、何卒逢はせてくれまいか』と乞うた。

『いや、それはいけません』

皇帝頻りに値下げする

『それでは一郡の土地を貰つて、その王にしてもらへば結構だが。さうは出來ないかしら』

『いやそれもなりません』

『では万戸の邑を得て列侯の末に列しようと思ふが、どうか』

『それも駄目です』

『では最後の願として、妻子と共に黔首となつて、諸公子の中に列しようと思ふが何うか』

そのとき閻樂は冷然として、

『私は今丞相の命を受けて、天下のために貴方を誅戮しやうとしてゐるのですから、いくら貴方がかれこれと泣言をいつた所で、私は一言も丞相にそれをお取次ぎすることは出來ません』と云つて、兵を麾いたので、二世は事の叶はざるを見て遂に自殺してしまつたのである。依つて趙高は大臣や諸公子を集めて、

『二世は今まで臣下の諫を用ひずに、暴逆なことのみを行つたので、遂に人民の心を失ひ、今や六國はいづれも自立して秦の命令に從はないやうになつた。で、私は國家の滅

びるのを見るに忍びず、敢へて二世を誅戮した次第である。それに秦の領土は諸方の叛軍から攻略されて、だん〳〵と縮小し、今は僅にその一隅を有するに過ぎないから、帝號を廢して、六國と同樣に王號を稱ふる方がよいと思ふ。かうしたならば、天下は皆秦の帝位を奪はうとする企を翻し、秦を攻めることをやめるに相違ない。又二世の後には扶蘇の公子嬰を立てゝ王としたい』と諮つた。

帝位を捨てば安からん

六

子嬰趙高を謀る

かくて衆議一決して子嬰を秦の王とすることに決定し、先づ嬰をして五日の間齋戒して身を淨め、それから玉璽を授けて王位に卽けることゝなつた。で、子嬰は之に從つて齋宮に入つて潔齋したが、五日目になつて密かにその子二人を呼んで、

『丞相趙高は二世に誅戮されるのを恐れ、それを殺して私を位に卽けた大逆人であるが、聞く所によると、彼は旣に楚軍との密約が成立し、秦の宗室を滅して關中の王にして貰うことに決つてゐるさうだ。で、今私に齋戒を勸めて、大廟で玉璽を傳へやうといふのは、實は私を其處に誘き出して殺害しようと云ふのである。それで私は齋戒を終つてから、病氣だといつて出て行かなかつたなら、趙高は必ず私を迎へるために自分で玆に來るに相違ない。そのときお前だちは韓覃や李畢などと、齋宮の外に兵を伏せて待つてゐて、若し趙高が來たなら、その場で彼を刺し殺してしまへ』と命じた。

子嬰は病と稱して齋宮から出て行かなかつたので、趙高からは頻りと迎の使者をよこしたが、それでも行かなかつたので、遂に豫期の通り高が自ら子嬰を迎へに來た。で、子嬰は趙高の大逆不忠を責めて卽座に之を誅戮し、尙三族をも斬殺してその顚末を汎く公表し、遂に秦王の位に卽いた。

時旣に遲し

かくて奸賊は悉く誅戮されたけれども、時は旣に遲かつた。もうその時には叛軍は四方に勢威を張つて、秦の國家は半ば壞崩してゐた。子嬰はそれでも百官と評議した上、嶢關に殺到して來る沛公の軍を喰ひ止めるために、韓榮や耿沛に五萬の兵を授け、朱蒯と共に之を迎へ討たせたが、無慘やその甲斐もなく、沛公は遂に秦の軍を破つて武關に入り、使を咸陽に遣はして子嬰に降伏を勸めた。依つて子嬰は遂に力盡きて奈何ともすること能はず、卽ち頸に璽綬をかけ、素車白馬にて出てゝ天子の璽符を沛公劉邦に奉り、その軍門に降服した。時に子嬰が秦王となつてから僅に四十六日目であつた。次いで沛

在位四十六日の天子